

528

13

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始





村田豊秋著

人間論

大正
13. 6. 28
内交

中央出版社刊行

人間論序言

人間とは何んぞや、これ千古の疑問であらねばならぬ、そして幾多の先哲が、解決せんとするも得ざりし不可解の謎である、之れを科學上から、生理上の發達を研究して進化的に考へると、凡そ人間と言ふものは、地球上に初めから生存してゐて、親から子へ、子から孫と言ふ風に、生殖したものは思はれない、なるほど高等動物は、親から子へ順次、生殖して行くのであるが、併し最下等の動物に至つて、無性生殖を營むものになると、まつたく動物の原形質と稱し、極く微細な一塊の物に過ぎなく、いつれが

雄であるか雌であるか甚だ不明であり、彼のアミーバの如きは全く雌雄の別が無いのである、蓋し下等動物と、人間などの高等動物とは、まつたく別種のものかと言ふと、決して然うではない、たとひ如何なる高等動物にしる、母胎に在る最初期には、彼の原形質動物と同様のものであるが、それが次第に變化して、遂には原形質動物とは全く異なつた高等動物となるのである、譬へばクラゲの如きものは、その第一期には全く無性生殖であつて、雌雄の區別が無かつたのが、第二期となつて始めて雌雄の區別が生ずる、また蚯蚓や蛭のやうに、一體にして兩性を兼有してゐるが如きも稀れにはある、言ふまでもなくアミーバは單細胞動物で、そ

の細胞は人間の血液中の血球の如く、核と伸縮胞と腔胞との部分から成立して居り、开が身體の伸縮によつて池や水溜りの中を泳ぎ、食物をば求めて不消化物を排泄してゐるところは、人間の生活の通りである、デ其の蕃殖作用は、單に核が二つに分割され、各々が獨立して、謂はゆる分體法で生殖するのである、彼の蚯蚓なども、二つに切斷すると、各々が獨立して、二つの蚯蚓となるのである、斯かる分體法の行はれる下等動物は、いづれが親で何れが子であるかと言ふことが不明である、此等の分體生殖動物にも、部分としては大小の區別があり、小さいものは芽體と稱して、その生殖法を出芽法と言ふのである、ところで植物の芽生と動物

の芽生とは、全く同じ作用であつて、唯だ單に其の方法が異なつてゐるのに過ぎない、されば植物に似た動物があり、殆んど動物のやうな植物もある、斯様な植物とも動物とも見分け難いものが、幾億萬年と言ふ長い星霜を経て、次第に發達に發達を重ね、更に更に進化に進化の道程を辿り、今日に見るが如き高等動物たる人間となつたのである。

蓋し人間が生れるのは、春になつて花の咲くのと同じである、また人間が死ぬのは、秋になつて葉が散るやうなものである、つまり開は變化の相、推移の態である、惟ふに開花落葉、非常な變化のやうではあるが、大自然と言ふ上から大觀すると、少しも異

状としない、素より開は生ぜず滅せず、増しもせず減りもせぬ、たとへば人間、生れた、死んだ、猶ほ且つ風光、美しくなつた、汚なくなつた、と言つても、増しもせなければ、減りもしなく、また移りもしなければ、變りもしない、彼の水なるものは、本來が清淨なものであつて、飲料とする所のものであるが、それが濁つて汚なくなると、もはや衣類の洗濯も出來なくなる、然しながら濁つて汚ないと言ふのは、それは假りに一時的のもので、水の本性は矢張り清淨なのが眞實である、だから其の泥を漉せば、忽ちにして濁水は清澄と變じ、もはや安んじて飲料に供することが出来る、開を唯だ水の上だけで言ふと、如何にも大なる變化のや

うであるが、之れを大自然の上から大観すれば、何んの少しも異状としない、それと同様で、人間の死と言ふものも、まづたく肉體や精神が消滅するのではなく、唯だ其の形態が變化するまでのことである、謂はゆる雨あられ雪や氷と變りながら、落ちれば同じ谷川の水が、天氣が好ければ太陽の熱の爲めに、水蒸氣となつて天へ昇り、それが氣壓の變化によつて、また雨あられ雪や雹となつて降つて來る、斯の如く幾變化するけれども、水その物の本性は決して異状なく、依然として些少の増減もない、それと同じこと、本來は人間、生れもせず死にもせぬ、此の生れず死なぬと言ふところの、生死を飛び越えた所を諦めて行くのが、人間が心

の本體に歸ると言ふ、故に本體の上から見ると、人間に生死と言ふものは無い、素より雲の下から月を眺めて居るから、或は隠れたり將た現はれたりして、始終變化をして居るやうではあるが、若し雲よりも高い所の上つて月を眺めたなれば、月は大きくも無ければ小さくもなく、隠れもし無なければ又た現はれもしない、月は依然たる月であつて常住不變である、さあれ兩頭ともに截斷すれば一劍、天に倚つて寒く、そこに人間として絶對の安心がある。

西歴紀元前四百七十年、ギリシヤのアデン府に、彫刻師を父とし、産婆を母として生れたのが、千古の聖哲ソクラテスである、

彼れが阿典の軍に従つてゐる頃、天寒く雪が非常に降つた、從軍の人々は何れも嚴冷に惱まされたが、そのとき彼れは薄衣で而も跣足、よく四方を奔走して少しも苦痛の色を見せず、心頭を滅却すれば火も亦た涼しい悟底の心地を發揮した、それから阿典の軍が、デクリウムに敗れた時の如きは、其の態度の沈着にして、死を恐れなかつた風采は、思はず人をして敬慕の情に堪えざらしめたと言ふ、その後、彼れは評定官や司法大官や元老院議長などの顯職に就いたが、恬淡寡慾、身に粗衣を着け、美食を攝らず、陋屋に甘んじて住んだ、そして常に正義を愛し、不善を憎むことが甚だしく、遂に野に下つて頻りに道を傳へた、毫も巧言を弄せず、

盛んに市民の無識を痛撃し、眞理を啓發しようとなつた、しかも謙遜にして、如何に卑しき者に對しても、親切と叮嚀とを以てし、心から之れを愛し、その惱めるは慰め、躓けるは勵まし、安立を標的とする理想の彼岸に導いた、然るに何時の世にも、正義は容れられない、釋迦だつて迫害を受け、孔子も陳蔡の間に苦しみ、基督は十字架上の露と消えた、ソクラテスも亦、種々の罪名の下に獄に投ぜられた、斯くて刑の時、彼れは靜かに毒杯を仰いだ、開が弟子は相見るに忍びず、皆な面を腑せて泣いた、彼れは却つて其の人々を慰撫しながら「友よ、何を泣くか、人は天意に任せ靜に死ぬべきものなり」と言ひ終つて、靜かに床上に臥したが、そ

の負債のあつた事を思ひ出し、これを償却すべき由を弟子に命じて、頽然として呼吸を絶つた、眞に死を見ること歸するが如き、これ何んによつて然るかと言へば、唯だ其の衷心の大達觀である、生死二つなしと信ずる悟道的思想である、斯の如くんば死敢て恐るゝ所はない、生必ずしも喜悅ではない。

ソクラテスは「我れは素より我れの愚なるを知る、唯だ我れは智を愛するものなり、即ち我れは智者にあらず愛智者なり」と言つて、哲學の原語たる希臘語のフィロソフィアが、フィリア（愛）とソフィア（智慧）との兩義から成り、即ち「智慧を愛す」と言ふことを以て哲學であるとして居たのである、然り哲學は、愛智の最も

高度に進められた結果であると言ふも過言でない、随つて之れを最も廣義に定義するときは、宇宙の根本原理を究明する學なりと言ふことが出来る、否な啻に之れを言ひ得るに止どまらず、這是事實として哲學史の説明するところである、即ち古來の哲學が、自己の研究對象として論じ來たりしもの、謂はゞ自然界と人事界との現象を問はず、殆んど有らゆる學科の題目を網羅し、以て其の根本原理に關する攻究を精緻ならしめんとして居る、故に希臘に於けるソクラテス以前の哲學は、自然界の考察を中心とし、宇宙論、物理、天文等の諸學に涉り、しかも其の以後に至つては、更に人事界の考察を中心として、人性、倫理、心理、論理、政治

等の諸學に及び、希臘末期より中世哲學に涉りては、安心問題、解脫問題、神學、基督論、罪業論、救濟論など宗教問題を中心として攻究の對象となし、近世に入りて、稍や哲學の對象は特殊問題に境域を限るの意義を有するの傾向となつたのである。

抑も吾人が世界に對し、人生に對し、少しく省察の態度を取つて望めば、種々なる驚愕の念、怪訝の情起こらざらんとするも得ぬ、即ち人生の歸趨如何、世界の真相如何てふ問題は、一度この怪訝に觸れて萬人の腦裡に浮き出せざるを得ざる必至の問題である、然るに此の問題に觸れ、最も根本的絶對的解釋を與へんとす吾人の心意活動を大別すれば、二種の特質がある、蓋し一は理

智的に其の方法を選び、他は情意的に其の手段を取るもの是れである、其の理智的方法によるものは、飽くまで合理の道筋を踏んで、秩序と系統を立て、以て其の究竟の原理に到達せんとすもの、之れ素より科學乃至哲學である、更に情意的手段を取るものは、深く空想と直觀の確信に依り、謂はゞ偉大なるものに向つて渴仰する信念によつて、其の究竟の原理を獲得せんとするもの、开は言ふまでもなく宗教である、されば宗教は、情的すなはち信仰的であつて、しかも哲學は、智的にして寧ろ懷疑的である、前者は信仰によりて満足を得んとし、隨つて主觀的であり實踐的である、後者は合理に依つて満足を得んとし、夫れが爲め客觀的で

あり理論的である、然しながら吾人の理智も情も、其の歸するところは心意の一元である、故に之れを劃然兩別するが如きは不能に屬し、情の要求するところ理智必ず之れに伴ひ、又た理智の欲求するところ情必ず之れに伴ふ、だからして理を重んずる哲學と雖も、時に宗教的に偏して神學的哲學となり、専ら信仰に依憑する宗教と雖も、往々合理的説明に依りて哲學を追ふ事となる。

惟ふに心の性質は、夫れが心の實質から成ると、將た心の徑行プロセスから成るとを問はず、心の實在そのものである、此の心の實在すなはち心の屬性(或は實體、現體とも言ふ)が、有らゆる心的經驗の根本的要素であり、开は智識主義または任意主義とも言ふべく、

欠

欠

宇宙の一部分である、吾々お互ひは宇宙を組織する細胞である、
ところで人間の仕事、即ち爲すべきことは、此の宇宙を、お互ひ
の共同一致の力で、少しづつでも良くして行くことである、そし
て开を、永遠より永遠の時へ傳へることである、言ふまでもなく
开は、其の一人を缺くことは出来ぬ、その一分を失ふてはならぬ、
斯くて人間の生活は意義がある、また以て人間の生存は價值があ
る、故に道德とは、善を行ふの道である、道德の價值は、人間の
生活上に於て、活力を與ふる所に存する、性として人は弱く、思
はざる迫害を受け、種々な誘惑に陥り、稍やもすれば悲觀墮落に
傾き易い、斯かる場合に、吾々をして奮闘せしむる原動力は道德

的觀念である、吾々をして誘惑から逃れしむるものは道義的節操である、人間は、此の道徳的觀念の上に立ち、足を實社會に踏み込んで、手を生活の働きに染めるのである、人の此の世に處して生存を保つには、衣食住の必要がある、だから理財の方法を講ずるにあらざるば、一日も安んじて生活することは出来ぬ、然るに人々お互ひが利を争つて飽くことを知らず、自己のみ貪り欲したならば、遂に人間社會は修羅の巷と化せざるを得ない、その相争ふ人々の心に一點の溫情を注いで、お互ひに克己し、自制し、相譲り、敬愛し合はしむるものは實に道徳である、故に生活を離れて道徳はなく、道徳と生活との關係は、爾かく切實なるものがある、

る、併し自己のみ一人を清うして満足し、自分だけ單獨に善の生活を續けて行けば可いと言ふのが道徳ではなく、眞なる道徳の精神は、人と人との調和にあつて、現實の社會に活動しながら衆庶と圓滿に交際して行くのでなければならぬ、ところで眞實の道徳は、世間の社會生活と交渉のあるところに力があり、生命があるのであつて、然うした道徳の原動力は之れを人間愛に求めなければならぬ。

人間は如何に生くべきか、これ亦た容易ならざる問題であらねばならぬ、そして幾億の衆庶が、血みどろの苦悶を續けつゝある現實の悲痛事である、しかも人間の幸福は、家庭から其の端を發

するものである、开が平和の曙光の齋らすところの、豊かにして濃やかなる情操を以て人生争闘の疲勞を醫やすにあらねばならぬ、然るに今や在來の宗教は光りを失ひ、凡べて傳統的の藝術は廢れ、古い哲學は崩壞して而も道德の根柢は危機に瀕してゐる、斯くて學藝の道德に及ばず影響も究め得ず、人間不平等の起原も探り難く、人類は何に依りて安立を得んか、何に對して歸敬を捧げんかの問題に就て悩み、謂ふところの人生の迷路に立つて彷徨しつゝある、加ふるに國家は行き詰まり、社會も行き詰まり、政治も行き詰まり、學問も行き詰まり、そして人間も亦た行き詰まつてゐる、如何にせば、此の行き詰まりを轉回し得るか、我が新

日本は不幸にして前途に寸尺を辨ぜざるが如き境遇にある、蓋し人生の根本的なからくり、仕掛けが洞觀され、現實と未來に對して如何に歩み、如何に進むべきか、指示され、遺失したものが何處にあり、將た探求して居るものが那邊にあるかを知見せんと欲せば、須からく思想によらねばならぬ、併し思想の根柢には生活がある、さあれ現時の思想動搖の根柢には家庭生活の不安定がある、猶ほ且つ現代の社會は人間をして悉く器械化し物的視するところに其の弊癘を見る、斯くして自我は滅せられ自由は失はれるところに近代人の苦惱がある、开が苦惱と悲痛に徹して、自覺せる思想家のみが味識し得る愛の宗教は、即ち吾人の以て主義とす

るところである、自覺なき「我」は皆な是れ悉く悪の根源である、有らゆる之れまでの權威を失ひ、完全なる生活の標的と歸趨とに迷へる近代人の爲めの生の哲學は、取りも直さず吾人の主張である、古い囊には新しい酒は容れられない、快適の家庭は近代の人間生活の基本である、快適思想を翹望し、それをば生活化さうとするのが人間禮讚の本願であらねばならぬ。

哲人 豊秋誌

人間論 目次

第一章	△章の哲學上より見たる人間論	二
第二章	社會學上より見たる人間論	三七
第三章	心理學上より見たる人間論	五七
第四章	有機感覺より見たる人間論	七九
第五章	人生問題より見たる人間論	九二
第六章	精神分析學上より見たる人間論	九九
第七章	文學上より見たる人間論	一二五
第八章	善の研究より見たる人間論	二二六

第九章 宗教上より見たる人間論……………二二六

第十章 概念的的精神より見たる人間論……………二一九

第十一章 藝術上より見たる人間論……………一九〇

第十二章 論理學上より見たる人間論……………二〇三

第十三章 表出作用より見たる人間論……………二三二

第十四章 道德上より見たる人間論……………二二〇

第十五章 美學上より見たる人間論……………二七九

第十六章 慾望上より見たる人間論……………三四六

第十七章 努力性能より見たる人間論……………三六七

第十八章 自覺上より見たる人間論……………三六一

第十九章 精神狀態の基調より見たる人間論……………三六九

第二十章 戀愛至上主義より見たる人間論……………四〇五

第二十一章 優生學進化論上より見たる人間論……………四二六

第二十二章 科學上より見たる人間論……………四三九

第二十三章 性教育上より見たる人間論……………四六四

第二十四章 兩性問題より見たる人間論……………四九一

第二十五章 結婚問題より見たる人間論……………五二九

第二十六章 死生超脫上より見たる人間論……………五九二

—目 次終—



人間

論

村田豐秋著

第一章 哲學上より見たる人間論

悲觀と樂觀、唯心論と唯物論、理想と現實、此の二つの哲學系統は、哲學史上に於ける永遠の型である、そして新しい社會哲學が現はれるにしても、ヘラクリタスとデモクリタスとは、兩々相對峙して決して譲らない、ところで前者は、世界には唯だ一つの智慧があるべきものではない、凡べての物を貫く此の世界の秩序は神にも人間にも之れを造らなかつた、夫れは始めからあり、今あり、後ある、永遠の火であつて、適當な時に燃やされ、適當な時に消されるものである、神は晝であり夜であり冬であり夏である。戦争であり平和であり満腹であり飢餓である、神は火の如く變化し香として薫せられる時に、其の各々の匂ひで知ることの出来るものである、人間は物に依つて善惡を區別する、併し神に於ては凡べての物が善であり美である、凡べての物は

有りとして又た無い、凡べての物は有り、併し實は何も無いのである、ヘラクリタスは如上の現實に對する悲觀的な哲學者である、猶ほ又た後者は、人生は凡べて物質のみで出來て居ると見た、凡べてが嚴肅なものであるとは見なかつた、それで何でもかでも笑つて暮すことを主張した、しかも有らゆる物が分子の繼なぎ合せである、人間の智慧と言つたところで感覺から出來たものである、感覺とは要するに分子の反應に過ぎぬと考へて居たらしい、彼れには神は無かつた、眞とか善とか美とか言ふものも無かつた、彼れの最高の善は、精神の平均を失はぬことにある、蓋し恐怖や大慾や心配や悲哀やには何でも反對した、人間一人の死と猫一匹の死と何等の變りはない、社會は矛盾であると言つて興がる、そして生を笑ひ死を笑ひ神を笑ふ、デモクリタスは斯様な哲學者である、つまり理想主義の觀念論者は泣く、又た唯物史觀の實在論者は笑ふ、斯くして今日の社會は、結局このヘラクリタス系統の哲學と、デモクリタス型の哲學との二つに依つて、泣き笑ひの兩舞臺を見せられて居るのである、デ神と最高善

を説く宗教家は、天と死後を指示して、現實の世界苦から人間を救済しようとは言はない、しかもヘラクリタスの如く魂は肉體の中に在つて死んで居るが、肉體の死と共に復活して永遠に生きると言ふのである、其の反對にデモクリタスの所論に共鳴する物質論者は、現代に於けるパンの公平とパンの幸福を説くのである、そして最高善の不必要と神の無能を説く、此の二つの領域には、仲間地帯が殆んど見つからぬやうである、併し仔細に考へれば、此の二説とも一應の理屈はあるが、二つながら其の争點が違つて居る、ヘラクリタスの如く法則や理念や智慧ばかりから其の哲學を出發するのが間違つて居る、デモクリタスのやうに物質と物質との組織を考へられる感覺のみから出發する哲學も又た間違つて居る、蓋し笑ふことも、泣くことも、初めから有つたのでは無い、素より悲觀と樂觀とは、生命があつてから後に起こつた問題である、然り、人間の究極するところは生命である、其の他には何も無い、物質と言ふものが、實在的にあるのではない、物質と言ふのは、人間の感覺の符號を借りた表象である、

生命の外に神は無い、生命の外に宇宙は無い、生命は凡べてを超越して居る、物質と見えるのは生命の衣裳である、死が或る個人を奪ひ去ることは出来る、併し其の生命は過去に去つたゞけであつて、死が過去の生命と人格までも亡ぼしてしまつた譯ではない、されば其の精神は事業や著述や藝術やなどに依つて残り、また其の肉體は我が子に移つて更に孫に傳はり無限に生存される、猶ほ物質は家である、家は壊れても住める人の存するが如く、物質は死んでも生命は残る、宇宙はエネルギーである、生命は其の本體である、生命は進化する、進化は價值の上進である、宇宙の本體は生命の價值上進である、人間の死は生命物質の亡びたのでは無い、寧ろ死そのものは生命物質の變化と見べきものである、人間の生活は恰も燃ゆる火の如きものである、其の火の消ゆるや忽ち灰燼と化するが如きものである、斯く生物の死が繰り返されて行く毎に宇宙は何時か自然と進化して行くのである、畢竟するに死はひとつの約束である、前提である、デ流動の本體も、笑ひの根源も、皆な此の生命の中に溶け入るものであ

る、曾て地上の有らゆる何物も、生命を除いて考へられたことは無い、物質も生命が有つたればこそ見られもし考へられもしたのである、凡そ生あれば必ず死あり、死は動かすべからざる事實である、此の死を超越するところに、久遠の生命があらねばならぬ、蓋し物質は生命の附録である、パンは生命の糧ではない、生命の全部ではない、生命の或る一部を充たすべき或るひとつでしかない、生命はパン以上の或る多くのものを要求して居るではないか、惟ふに宇宙を大きく、美しくして行くのは生命の進化である、素より宇宙の構造は、個々の生命が緯となり、經となつて完成する、然るにパンは宇宙を構成する能力を持つては居ない、生命は絶対である、宇宙そのものに通じ、神そのものに通ずる、生命は故に我れ吾れ人間に内在し、そして人間を超越して居るものである、だからして生命は人間の内に考へ、泣き、笑ひ、しかも物を言ふ、生命は人間であり人間を超越して居る、生命は人格であり人格を超越して居る、其の超越の境地を假りに神と言ふ、故に神とは超越と言ふことの符牒である、斯く生命は

物質的肉體を家とし、それに宗教、哲學、藝術、科學など、有らゆる裝飾に依つて宇宙の構成を、より多く善美ならしめようとするものである、蓋し何所までも限り無く伸びる人間の生命、宇宙の有らん限り存在する人間の生命、其の生命を人間は考へなければならぬ、しかも其の生命を單に生活のみに任せることは出来ない、并は素より不自然である、故に生命は人間の究極であり、又た人間の究極は生命である。

ところで人間の生活上には、少なくとも二つの要求があると思ふ、一つは感情の上から言つたロマンチズムで、もう一つは理性の上から見たカチリズムである、此の二つの要求を解釋することは、現代の思想や文藝にも密接な關係があるばかりでなく、知らず識らずの内に人間日常の生活の上に現はれる必要な事實である、素より人間の生活は、概して感情的と理智的との二つに區分される、否な區分すると言ふよりも、吾々人間の内的生活を反省して、其所に見出だされる複雑無数の要求中、特に際立つた著しい二種類の要求に思ひ當るからである、そして此の二つの要求は、多

少は人間の内的生活に思ひを潜める者が少なからぬ苦心を重ねる所であつて、生活經驗に關する最深要求であることに注意して欲しい、吾々は人間として善い生活がしたい、價値の高い生活がしたい、之れが生活上の根本的の要求である、初めから感情的とか理智的とか言ふやうな區別はない、凡そ全人格上の複雑な要求である、すべて實際上の切實な全的要求である、然るに此の全的要求が分岐して、それごとく特殊な傾向を取つて來ると、無數の傾向の中で特に際立つた二つが目について來る、テ姑らく宗教上の要求に就て考へて見ると、吾々人間は最後の安心を欲する確信を要求する、此の安心と確信とは何う言ふ境に見出だされるか、或る種類の人は人生の實相の會得と言ふことに重きを置いて居る、人生の歸趣真相が會得されるれば、そこに安心や確信が宿ると觀て居る、事實われわれ人間に避け難いのは斯う言ふ神秘的な要求である、人間に不相應な無益な疑ひつゝも尙ほ吾々の運命に思ひ廻らして一種神秘な感に堪えない、死は吾々に限り無き感想を與へる、茫漠として無際涯な天地の間に生死する

ことは畢竟何故であるか、如何にも不思議に堪えられない、それが全然無用の懷疑だと言へば科學も哲學も畢竟無意味に歸してしまふ、此の種類の要求は素より其の性質が甚だ複雑で、普通の意味に於て智的など云ふ言葉で解釋の出來ぬことは勿論であるが、然しながら其の根柢の傾向から言へば高義に於て理性的であることは免がれない、けれども此の種類の要求と並んで更に別種な宗教的要求がある、元來宗教上の安心とは自然の實相とか人生の歸趣とかの問題ではない、自然の實相や人生の歸趣などは、限りある人間の智慧を以てしては到底會釋されるものでない、隨つて宗教上の安心は、夫れ等の智慧の沙汰を離れて、人格の中樞が美事に充實される所にある、充實の程度は即ち安心の程度である、宗教的眞理は人格充實の勢力の意味で、普通に言ふ智識上の眞理ではない、充實の力の大きなものが、即ち宗教上の眞理である、斯う言ふ意味で吾々は客觀の眞理や事實よりも主觀の自由や安心や充實を要求する、高義に言ふ主觀の満足が吾々人間が最高の要求である、宗教上の安心は此の主觀の満足を意味

するに外ならないと言ふのである、之れは假りに宗教上の要求に例を籍りたに過ぎぬが、結局この二種類の要求は一つに調和せらる可きものであらう、併し現代の人間には、此の二種類が意地わるく離れ、となつて居て、どうしてもシツクリ調和しない所がある、妙に互ひに矛盾する要求の爲めに苦しめられて居るかの感がしないでもない。

ところが普通の生活にも、同じやうな感じがある、謂はゞヨリよく生活したいと言ふのが、實際の根本的要求である、本來を言へば此の要求は吾々に取つては、全一に調和された要求でなければならぬ、然るに實際は夫れが全的に感せられて居ない、蓋し科學的空氣の中に育ち、事實や眞實に著しく敏感になつた現代人は、凡べてが事實に合し眞實に一致することを熱望する、だから夢幻や空想や不自然は今代人の敵である、一般に此の傾向に支配されて全的要求は一種の特色を帯びて居る、吾々は眞實の生活がしたい、事實に合した間違ひの無い生活を送りたい、自然の人性に相應した生活が

欲しい、自然性を矯めた虚偽の生活ほど賤しいものはない、事實を離れた空想的な生活ほど空虚なものはない、故に事實を離れることは凡べてに於て空虚夢幻を意味する、吾々は得難い一生を夢にしたくない、シツクリ事實に符合し自然法に一致した眞實の自覺的生活に入りたいと言ふ要求が、普通の淺薄な意味の主智的とか理性的とか言ふ形容を許さないものであることは言ふまでもない、まして智識一邊の好事的な要求ではない、正當に言へば夫れが切實な要求である限り深く情意に根柢を置き、其の本質も極めて複雑多岐で容易に一定の形容や解釋を許さない、けれども此の種類の要求が飽くまで眞實な生活が欲しく、事實に一致した生活が欲しいと言ふ點を其の著しい特質として居る限り、そして顯著な特質だけを強いて形容しようとするれば、高義に於て之れを理性的と解釋するは止むを得ない、情意の全的要求中、眞實と言ふ一面に重きを置いた一種の實際的要求の意味に外ならない、斯う言ふ要求が、もはや過ぎ去つた前代の要求だなど、言ふのは餘りに輕卒な判斷である、現に吾々の血管の中に餘りに

強すぎるほど躍りめぐつて居る活きた要求ではないか、吾々は寧ろ此の要求の強すぎる爲めに苦しんで居るでは無いか、此の意味の理性的要求は、全的要求中の一部分にしか過ぎず、吾々には別種の強い要求がある、开は即ちヨリよく生活したい、價値の高い生活が欲しいと言ふことは單に自然で且つ眞實な生活が欲しい、と言ふことの外に伸び／＼した自由な生活が欲しい、活き／＼した元氣に充ちた生活が欲しい、深い徹底した底びかりのする生活が欲しい、死すとも恨みなしと感嘆し得られるやうな經驗を味はひたい、可憐な美しい優さしい生活が欲しい、恍惚として我れを忘れるやうな生活が欲しい、と一々數へ切れないやうな複雑な要求を含んで居るのである、若し出来るならば、自然で且つ眞實であると同時に、富贍で深刻で、自由な優美な、悅樂の生活が欲しい、眞に人間として有價値な活き甲斐ある快適の生を味はひたい、それが叶は無いならば、たとひ事實や法則は何うあらうとも、事實や眞理や畢竟何者ぞ、有りの儘を言へば、本來が生活の爲めの事實や眞理ではないか、开は生活の方便とし

て、人間が拵へ出した道具ではないか、素より生活の方便、自分の造つた道具に支配されるやうな生活をしたくない、吾々は唯だ充實した生活を送れば、たとひ夫れが夢と言はれやうが、何と言はれやうが、自分に絶對の安心さへあれば死んでも憾みが無いと、斯う言ふ風な複雑な要求が人間の本來的であることは拒まれない、ところで主智的な現代は、甚だしく此の種類の要求を弱めて、人間を狭く窮屈に考へさせる傾きが強いが、しかも此の種類の要求は、到底人間に固有な本來的要求である、之れを前の理性的要求と區別して、假に情的要求と名づけても宜しいと思ふ。

蓋し本來を言へば前の理性的要求は後の情的要求の中に調和されなければならぬものであつて、情的とは言ふものゝ實は理と情とを兼ねた人間内部生活の全的要求であると言つてもよい、しかも科學的空氣に育てられた現代の人に取つては、前の理性的要求が非常に強い、現に此の理性的要求のみが人間唯一の要求と考へて居る人も澤山ある、だから全的要求が分裂して其の間にシツクリした調和がなく、雜然また混沌と

して起こり來たる不調和な要求に對して、吾々は其の取捨選擇に迷つて居る、内的生活は之れが爲めに益々動搖する、此の動搖を靜める爲めには須からく吾々は全的要求に着眼しなければならぬ、デ文藝上のナチュラリズムは恰も近代の傾向を代表し、ロマンチズムは感情的要求を意味して居る、と言つて之れはナチュラリズムやロマンチズム全體の説明ではない、單に複雑な此等のイズムのチビカルなエッセンシアルな部面を人間精神の要求と言ふ一面から觀測したものに過ぎない、今日の思想や文藝を假にロマンチックなナチュラリスチックな混沌として複雑なものであるとすれば、夫れは如上の内的生活の混沌として不調和な動搖に相應する今日の人間思想は單に理智的のみでは解釋は出來ぬ、須からく之れを情的に見なければならぬ。

惟ふに生活の情的要求とは、生活を味はふことだとも言へる、生活を味はずしては人間に生活はない、人間の幸不幸と言ふことは一面から言へば生活を味はふか否かに存する、貧富貴賤は問題ではない、如何に巨額な富があつても、如何に名聲榮譽があ

つても、生活を味はふことを知らぬものは、素より本當の幸福を味はふことは出來ない、蓋し生活の情味とは何であるか、又た其の情味は生活にどんな關係があるか、謂はゞ茫漠たる問題ではあるけれども、吾々人間に取つては多大の興味がある、デ生活の情味、又たは單に生活の味はひと言へば、言ふまでもなく生活そのものを噛みしめて味はつた吾人の情の上の経験を意味する、生活の範圍は廣い、其の内容は極めて複雑である、素より生活の情味は多種多様にして、又た極めて複雑なるべきは自然である、今茲では、特殊の情味に就ては姑らく言はず、たとへば吾人が平常、感興を惹く度合の比較的強く深く長く、且つ比較的複雑にして、よし精確に生活全體の情味と總稱し得ないまでも、少なくとも其の情味中の重要なもの、顯著なるもの、情味中の情味と感ぜられるものに就て、其の色合を何と形容すべきか、其の特質を何所に求むべきかに就て考へて見る、普通には生活の重要な情味が極めて簡単に解釋されて居る、其の複雑な情味までが餘りに簡単に形容されて居る、蓋し一面に於て生活は樂

しい、面白い、愉快なものである、スキートなものであると解釋されて居るが、且つ他の一面に於ては生活は辛い、苦しい、悲しい、哀れなことが其の重要な情味と解釋されて居る、樂天と厭世とはまさしく此の二方面を語るものである、生活の情味が、或は楽しく面白く、或は又た不快苦痛の調子を帯びて居るのは言ふまでもない、さりごと此の種の簡単な言葉で、複雑な生活の情味を言ひ現はさうとするのは、餘りに大膽な餘りに無理なことである、仔細に論ずるまでもなく、經驗上の事實に徴すれば、生活の重要な情味は極めて複雑である、其の内容は味はへば味はふほど深みがあり、不思議であり、濃厚であり、艶麗であり、壯絶であり、悲痛である、然るに此等複雑な情味を十把一ひからげに、或は苦樂、且つ面白い、辛いと言ふ簡単な形容詞に盡さうとするのは、生活の眞意義を果さざるのみか、生活そのものに就ては幾多の誤解を世に廣める因ではあるまいか、しかも吾人の日常生活に於てすら、其の情味は極めて複雑かつ濃厚である、夫れを唯だ簡単に面白い辛いと形容される情味も、仔

細に味はへば苦樂以上、面白い辛い以上、尙ほ様々な複雑な味はひを含んで居る、多くの場合に於ては苦樂の兩調が妙に混交して、苦しいやうな楽しいやうな、しかも夫れ以上、強く吾人の感興を惹く深い混み入つた味はひが感せられる、よし苦しからうが、楽しからうが、吾人は尙ほ其所に、吾人の感興を惹くに足る興味を覺える場合は幾らもある、たとへば月もおぼろ花もおぼろな夜ひとり郊外を散歩するとする、苦しいと感ずることもあらう、楽しいと感ずることもあらうが、單に苦樂を以て盡す可からざる一種複雑な情味を覺えるのが普通である、また深夜心ゆく友と靜かに來し方ゆく末を物語ると、吾人は其所に形容すべからざる限りない情味を感ずるのである、且つ假りに吾人が小説を讀み深く感ずる、實際生活とは多少趣きが違つて居るが吾人は尙ほ小説により人生の複雑な情味を味はふ、斯様な類例は餘りにクラシカルに、餘りにロマンチックだと難する者もあらうが、嚴格な意義に於て、近代の現實生活の情味——ロマンチックなのとは頗る趣きを異にした近代生活の情味は、更に明かに苦樂

一邊のものにあらずして、より複雑に、より嚴肅に、何とも形容の出来ない一種不思議な味はひを有つて居る、世人は動やもすれば、近代生活をひとへに苦痛一邊または悲哀一邊のもの、如く解する、苦痛と悲哀とは近代生活の唯一の情味なるが如く解する、現實生活なかんづく近代の現實生活が、ロマンチックな一種遊戯に類した輕快な情調を含んだものにあらずして、寧ろ嚴肅な苦痛と悲哀との情調に富んだものであることは、吾等も之れを認める、しかも近代生活が赤裸々な眞面目な生活であるだけ、強い深い苦痛と悲哀とに富めることは、何人と雖も之れを是認せざるを得ない事實であらう、然るにも拘はらず、吾々は近代生活は決して單純に苦痛一邊のものにあらずして、苦痛の情調の中におのづから一種深刻な、眞面目な強い鋭い複雑な情味が深く内在的に籠れるを主張せざるを得ない、猶ほ且つ近代生活が爾かく赤裸々に眞面目に現實的であるだけ、それだけ其の情實は更にいよ／＼深く鋭く層一層もつと／＼切實に吾人の感興を強める底のものである事を主張せざるを得ない、吾人が情生活全體

を壓倒する程の激烈な苦痛は別として、之れに苦痛の情調の伴ふことは必ずしも吾人の感興を絶滅するものではない、寧ろ逆さに強く吾人の感興を惹く情味は、おほかた深い苦痛と悲哀とを包んで居ると言へよう、クラシカルな情味は凡べて此の種類のものである、だからして吾等は近代生活の情味を何うしても單に輕快なもの、面白いもの、愉快なもの、と形容がし難いと同時に、又たひとへに苦痛一邊、且つ悲哀一邊と感せず、寧ろ其の苦痛と悲哀の味はひの裡に、何故とも知らず強く吾人を引きつける眞面目な、嚴肅な深い鋭い一種複雑な深奥な情味の籠れるを認めざるを得ない、そして現實生活が吾人に取りつて苦しからうが面白くあるまいが、尙ほ吾人は其の中に一種深みのあるシンミリした不可思議な情味を味はふのである、されば一日の勞役を終つて、生活に疲れた勞働者がたゞ／＼として家路に歸るとき、彼れが苦痛と悲哀とは明らかに其の顔面に示されて居る、しかも彼れが現世に執着する一人の勞働者なる限り、彼れは尙ほ他人の得知らぬ生活の不思議な情趣を味はつて居る、人は彼れが食す一片

のパンの味はひを、ひとへに饑餓をしのぐ肉的快乐とも見るであらう、然しながら彼れが食す一片のパンは彼れが心血を濺いだ勞役を意味して居る、努力の完成を意味して居る、生存の複雑な滋味を意味して居る、彼れは其所に一種不可思議な情味を味はふのである、惟ふに吾人は生活の情味を餘り簡単に解釋し過ぎる、吾人の情生活は極めて複雑である、生活そのもの、複雑なるより更に複雑である、苦と樂とが互ひに錯綜し融和するのは言はずもあれ、些末な日常の事件に於てすら、容易に分析解剖許さざる複雑な情調が、一個の情趣に聯合し融和するのが普通である、蓋し情生活の聯合作用が、智識生活の夫れよりも微妙であるだけ、夫れだけ吾人は些末の事件にも複雑な微妙な情趣を味はふが普通である、斯かる生活の複雑な情調を傳へるは詩人小説家の役目で、ところが現實生活に於ては詩人小説家さへ容易に見出だす能はざる複雑微妙な情趣が吾人に味はひ得られる、此の複雑微妙な情趣をひとへに快樂一邊のもの、又は苦痛一邊のもの、如く解するのは、初めから生活の情趣そのものを誤解し、延

いては人生全體を誤解するに至る、素より人生の半面は、此の複雑微妙な情趣に包まれて居る、デ有りの儘を言へば、吾人は餘りに生活の情味に慣れ過ぎて居る、吾人の情の感受性は、有らゆる生活の情味を味はふには餘り鈍り過ぎて居る、加ふるに情生活が甚だしく荒んで、何等か異常な刺戟を俟つにあらずんば、容易に強い感興を覺えないのは、なかんづく近代人の通弊であると言つてよい、さりながら吾人は如何にもして、再び生活の情味を正當に味はふやうに心がけねばならぬ、要するに生活の情味を除いては、生活とは何であるかは考へられない、故に複雑微妙な情趣を除き去つた人生は、畢竟無意義で空虚であり荒寥たるものである、しかも猶ほ生活から情味を取れば、吾人は遂に人生に對して背を向けねばならぬ、従つて生活の情味を度外しては、とても人間の幸福は求め得られないのである、そして又た生活の情味は、苦にもあり樂にもあり、貧にもあれば富にもあるので、蓋し人間世界の階級差別を問はないのである、併し安樂であり富貴であるものは、動やもすれば生活の情味を簡単に物質的に

のみ解釋して、眞の情味を知らぬものが多く、随つて又た眞の幸福を享受し得られないのである。

然しながら茲にひとつの疑問が起こつて來るので、夫れは生活の情味を味はふことが、なせ人間の幸福であるかと言ふことである。即ち生活の情味は生活全體に於て、何れ程の價値を占めるものであらうか、ところで吾人が日常生活を見るに、吾人は必ずしも情味そのものを目的として生存はして居ないらしい、猶ほ且つ吾人が日常の行動は、唯だ何となく或る行動そのものを遂げるので、必ずしも之れに伴ふ情味を標的として居ないやうである、しかも三度の食事は、之れに伴ふ複雑な情趣が全然豫想されて居ない譯ではないが、必ずしも情趣そのものが目的ではなく、寧ろ食はんが爲めに食ふので、味はんが爲めに食ふのでは無いやうに見える、即ち自づと胃が食慾を促すところから三度の食事を欲するやうに見える、生活に關しても同じ道理である、吾人は唯だ何となく生活を欲するので、必ずしも其の之れに伴ふ複雑な情味を味はん

が爲めにのみ生活するのではない、一方から見れば生活は如何にもブラインドに見える、唯だ生の爲めに生々欲するやうに見える、之れに伴ふ情味の如きは眞に隨生物に過ぎないで何等重要なものでは無いやうに見える、唯だ譯もなくブラインドリーに働きたいから働く、遊びたいから遊ぶ、食ひたいから食ふ、寝たいから寝る、开は必ずしも労働や遊戯の情味の爲めでは無いやうである、だからして事實、生活の目的が其の情味ばかりであるとは言ひ難い、たとひ情味は如何に複雑で微妙であつても、それが生活の唯一目的で無いことは明白である、故に吾人は唯だ情味の爲めにのみ生活するとは思はぬ、然らば生活の情味の價値は何所にあるか、生活全體に取つて其の情味は何等重大の價値の無いものであらうか、吾等は決して然うは思はない、寧ろ生活全體に取つて、其の情味は一種深い重大な關係あることを認めざるを得ない、テ吾人が日常生活の行動を見れば一見いかにもブラインドに見える、何等の根據もない盲目的動作のやうに見える、併し一歩進んで考へれば斯様な盲目的動作も畢竟は吾人が情

意の要求に根ざして居る、既に情意の要求に根ざして居る限りは、斯かる動作が如何に不明瞭であらうとも、全然これに伴ふ情味を豫想しないとは言はれない、勿論場合に依つては殆んど全くブラインドリーに生活の情味を豫想しない折もあるが、普通の場合に於てはたとひ漠然ながらも、知らず識らずの間に斯かる情味の豫想は必然的に混入して居るものである、ところで若し假りに、吾人の生活には何等の情味も伴はぬと決める、吾人が一切の行爲に何等吾人の感興を惹くに足るの情趣も纏綿しないとする、斯かる場合にも吾人は依然として生を樂しむであらうか、ますます生活の範圍を擴張するであらうか、そして且つ又た、食物が極め 不味無感であると假定する、生活が全く無味乾燥で殆んど吾人に冷淡たるものがあるを假定する、斯かる場合にも吾人は尙ほ且つ食ひ又た生活することを欲するであらうか、蓋し甚だ疑はしいのである、斯く考へ來たれば、生活の情味が生活全體に取つて、如何に重大なる位置を占めるものであるかは明白である、素より生活の情味は、生活の刺戟者であると同時に、其の

完成者である、だから开は、吾人の生活を刺戟するものであると同時に、又た吾人をして生活を樂しませるものである、即ち开は吾々に幸福を享受させるものである、故に情味を離しては生活を考へる譯には行かぬ、勿論情味は生活の全部ではない、併し生活を成就して人間を幸福に導くものは情味である、情味なき生活は人間に取つて如何に荒寥寂寞たるものであらうか、生活の情味は無論生活の唯一目的では無いが少なくとも生活の目的を完成に導くものである、複雑微妙な情味を知らずして吾人は完全に生活の目的を遂げたとは言はれない、幸福を享受して人生を樂しみ快適の生を送るには必ず生活の情味を味はふことを條件とする、斯の如く生活の情味は、生活の刺戟者であると同時に、其の完成者であるとするれば、吾人は及ぶべき限り廣く且つ深く、此の情味を経験するのが本懐であり至願である、斯様な情味を経験が、廣く且つ深くなればなる程、吾人の生活の範圍はますます擴張され、其の内容はいよいよ豊富になつて行くのである、従つて幸福を享受することも、又たますます廣くいよ

／＼深くなる譯である、其の間には素より階級差別や、必ずしも貧富貴賤の異は無い筈である、否な寧ろ貧しく賤しい者ほど深刻な、嚴肅な、眞實な、快適な幸福を體現し得られるのであると思ふ、之れが人間生活の妙諦であり、又た人生の本願である。

蓋し尋常の苦樂以上に、強く吾人を引きつける一種不可思議な力、現世に執着し飽くまで生の情味を味はんとするもの、それが幸福であり、しかも生活の目的を完成するものである、然しながら在來吾人が經驗した生活の情味は、果して吾人をして現世に執着せしむるに足るほど大なる價值を備へたものであらうか、現に吾人が現世に執着する以上、生活の情味が不思議な影響と感化とを吾人に與へて居るのは事實である、又た生活の情味が、吾人に取つて捨て難いものであることも事實である、併し此等生活の情味が、果して五十年の生を托するに足るだけの價值あるものであらうか、即ち人生は現に吾人が體驗しつゝある味はひだけの物に過ぎずして、それ以上には何等の價值も無いものであらうか、人間の一生は蜉蝣の生活に勝ること、唯だ一步に過

ぎざるものであらうか、斯かる疑問は、やがて當然の結論として生せざるを得ない、惟ふに人間の一生は矢張り人間の一生である、それより少なくも無く多くもない、吾人は此の一生のうちに安心を求めなければならぬ、従つて又た吾人は現世が與ふる様々の情趣のうちに衷心の満足を求めなければならぬ、朝に道を聞いて夕べに死すとも悔ゆるなき大情味を求めなければならぬ、吾人の一生はゲーテのファウストの一生の如く、死すとも悔ゆるなき大情味の追求であらねばならぬ、幾度か蹉躓し、幾度か失敗し、幾度か邪路に踏み入り、幾度か深淵に沈む努力の旅路であらねばならぬ、素より生活の情味に何等の感興も覺えぬものは吾人の關するところではない、苟くも其の不可思議な生活の情趣に生を戀ふるものは、其の不可思議な情味の中から、吾人の一生を托し生命を委するの大情味を求めねばならぬ、斯様な大情趣を求むること至つて深ければ、ます／＼深く人生を解する所以であつて、いよ／＼人生を解することは、やがて人間の本願であり、人生の歸趣であらねばならぬ。

惟ふに人間五十年の生活が、爾かく價值あるものであらうか、苦痛をも悲哀をも一種の情味として味はつて、其のうちには幸福を見出だして行くほど價值あるものであらうか、現世の生活をさへも、然うした解釋のもとに生きねばならぬものであらうか、肉體の死滅以後に人間は何うなるものであらうかは、蓋し人間共有の疑惑である、開は三千年の昔から今日に至るまで、否なアダムとイヴ以來與へられ、そして地球の死滅までも續く疑惑である、然り、何と言つても今は廣い意味に於ける懷疑時代である、表面から見れば所謂進取、活動、新思想、大事業が社會の各方面に溢れて居ながら、裏面に立ち入つて見れば有らゆる疑惑が智識ある階級の人々を支配して居るのである、素より人間の心には、凡人的方面と、凡人には堪え切れない智慧の兩方面とが備へられてある、ところで人が、果てしの無い懷疑に見切りをつけて凡人生活に戻り、實際上の業務に全心を打ち込んで居る間は、姑らくは懷疑の惡夢にも襲はれないが、智慧の方面が頭を擡ち上げると、吾々は限りの無い疑惑に苦しめられる、人生が

疑問と不可思議とに満ちて居る限り、懷疑は免がれ難い人間の運命である、併し其の懷疑の理由を以て人生を疑惑の塊りと斷じ、永久に懷疑的狀態に浮沈するのは人類生活の本意ではない、人生はたゞひ疑惑の塊りであるにしても、多少にても之れを解かうともしないで、懷疑は到底人生の全部であるかの如く見做して生涯を疑惑の翻弄に委ねるのは、決して生活の本意ではない、古來の極端な懷疑家の例に徴して見ても、初めは現實に立脚した懷疑も中頃から現實を離れた空想に傾き、次第に疑惑の深みに沈んで遂に絶望と死とに終つたものも少なくはない、懷疑が吾人に免がれ難い運命であるとしても、唯だ仕方がない、止むを得ない、何うすることも出来ないとのみ思ひ込み、運命の前に呆然一身を投げ出して、積極的には何等の努力を試みることも無用であるかの如く悲觀するのは誤まつて居る、在來の努力の失敗に懲りて、人間の智慧や努力も人生の懷疑に對しては、到底空である如く諦らめなければならぬと言ふ筈はない、若し其の様なことであつたら、歴史も人生も或は空なものと思ねばなるまい、

勿論この種の疑惑は容易に打ち消されない、事實の上に疑惑が解かれない限り、相當の智識を備へたものは、絶えず此の種類の疑惑に苦しめられる、吾々は之れに對して殆んど爲すところを知らない、蓋し之れには十分の理由もあれば根據もある、しかも翻つて惟ふに、果して永久不斷の懷疑が全人生であるとするれば、人生はもはや吾々人間に失はれたものである、生活の意味は遂に死に過ぎ無いものになつてしまふ、斯の如き人生觀は如何にしても人間の堪え得るところではない、人類の過去の努力が何うならうとも、又た縱し吾々人間の努力が失敗に終らうとも、永久不斷の懷疑に安んじて居られないのが人間の本性である、吾々は如何にもして此の全懷疑の不安状態から脱しようとする努力する、又た爾かく努力せざるを得なくなるのである。

人生の懷疑に對する人間の努力は、初めから必然失敗を豫想すべき、素より無益な行爲では決してない、日常生活の事實から言へば、深い疑惑に包まれながらも、吾々は尙ほ一種の希望に生きて居る、意志は飽くまで其の努力を続けようとする、此の立

脚地から振り返つて見ると、懷疑者の態度にも缺點があり、其の不安状態から脱しようとする努力にも、正當の理由があるやうである、懷疑の不安から脱する爲め、一切の疑惑の前に目をつぶつて、再び無智の動物生活に返ることは、今日の人間には無理な注文である、又た或る一派の學者の主張する如く人類を總べて凡人視し、甚だしきは無智の動物と同一視し、吾々にはもはや何等の深甚な疑惑もないやうに裝ふのは、之れも又た正しい説とは思はれない、人間が複雑な慾望に満ち、且つ智識を備へた限り、複雑な懷疑は遂に人生に免がれ難い運命である、されば強いてもろくの懷疑に目をつぶつたとて何の利益もない、古來の哲學者や宗教家は、正當に人類の疑惑とすべからざるものを疑惑とした傾きがあるにもせよ、慾望の發展には限りがなく、慾望が複雑になればなる程、實生活上ますます複雑な懷疑が発生し來たるべきは自然の道理である、斯様な懷疑に對する人類の有らゆる努力は、果して全然效の無いものであらうか、全懷疑論者は一概に之れを無效のやうに思つて居るが、吾々は猶ほ熟考すべ

き點があると思ふ、過去人類の歴史は一概に之れを空と言へば夫れ迄であるが、觀察點を換へて考ふれば、少なくとも人類に取つては其の努力は決して全然無効であつたとは言はれない、之れを全然無効である如く疑ふのは、吾人の眼識を以て古人の努力の結果を推測した誇張的獨斷ではあるまいか、過去の文明はたゞ粗末であるにしても、吾人の祖先が苦心に苦心を重ねた努力の産物である、無智の動物生活から、今日の文化生活に至るまでの徑路は、皆な悉く人類自身の努力ではないか、此等の努力が全然無効であるとは言はれない、懷疑論者は動やもすれば在來の哲學も宗教も空であつた如くに放言する、然しながら昔の哲學や宗教が近代人に架空と見え、現代人の懷疑を解くに足りないのは寧ろ當然である、精しく當時一般の文明を考察して、さて歴代の哲學史または宗教史を味はへば、古代の哲學または宗教は、今日から見ては如何ばかり粗雑であるにしても、其の當時の時代々々には多分の貢獻を致したものに相違ない、此の時を全然空である如く言ふのは、眞に哲學史または宗教史を解して居る

ものとは言はれぬ、勿論過去の哲學や宗教が、過去の人類が苦しんだ全體の疑惑を解き得たか何うかは疑はしいが、少なくとも其の懷疑の一部分は、それに依つて解かれたには相違ない、懷疑は大にして努力の結果は小さい、小さいけれども少なくとも人類に取つて其の努力は決して無効であつたとは言はれない、たとへば過去人類の努力が全く無効であつたとしても、吾々には猶ほ一縷の希望がある、過去の努力の無効は必ずしも將來の努力を豫言するものではない、懷疑論者と雖も斷然かやうな豫言は敢てなし得ないであらう、事實に於て吾々は知らず識らずの間に此の種の努力を重ねて居る、斯の如き努力は懷疑論者に取つては潜越至極のものであらうけれども、終生懷疑に包まれた不安の生活と比較して、其の得失が果して何所に有るかは考へるまでもない、素より吾人が情意的生物である限り、又た吾人が絶対虛無觀に陥らない限り、事實上日常生活に處する吾々は、絶えず多少の努力を重ねて居るのである、蓋し人類の性質から考へて見ても、吾々人間は到底かく努力せざるを得ないのである、そして

少しでも懷疑から免がれ不安の境を脱した生活を送らうとするものである、よし夫れが他から不安に見えやうが自分自身に平安であるだけのことでも悪くはない。

從來人間が、人生と言ふことを考へる態度を見ると、大方は其の自然的、物質的方面にのみ重きを置いて、却つて其の意識的、精神的方面を疎外して居る、蓋し自然的方面は、無論人生の土臺であり半面であるから、之れを疎外するの不可なることは言ふまでもないが、多少深く人生を考へるものに取つては、意識生活が、人類生活の特色である、素より人生と言へば主として其の複雑な精神的現象を意味する、されば人生の進歩も退歩も疑惑も努力も、主としては主觀の精神的_的生活内のことであり、しかも人生一切の開展は、自然現象的方面に求むるよりは、主として其の精神的方面に求むべきものである、だから精神生活の分野は吾々に取つては限りなく廣く限りなく深いものと感ぜられる、吾々はその所に自然界よりも更に廣大無邊な別天地が存すると思ふ、人類の爲めに運命づけられた天地が此處に存在すると思ふ、然るに此の世界は初

めから永久不變な形ちに於て靜止して居る世界ではない、或る決つた永久不變の法則と實相とを備へた世界ではない、开は素より人類が創造し、人類が改築し、人類が自由意志を以て經綸し來たつた人類の世界である、_テ人生が將來いかに開展すべきかは、ひとり人類の努力如何に依つてのみ定まるべきもので、決して之れに決まつた未來の運命はないと思ふ、人生を^{サイン}とせずして^{エルデン}と觀るも之れが爲めではあるまいか、ところで懷疑論者の態度を見ると、動_もすれば或る一定不變の眞理が客觀的に存在するものと思ひ込み、消極的態度のまゝ斯かる眞理に遭遇し難きを悲しむと言ふ傾向がある、人生の秘密が何所かに隠れて居るやうに思惟する氣味がある、之れがそもゝ誤解である、人生は人類が作つて行くものとするれば吾々の疑問とするものは何所にも隠れては居ない、吾人は吾人の意志を以て人生を如何に作るべきか、そこに眞の疑惑が存するのである、蓋し人生を如何に作るべきか、我れを如何に作るべきか、之れが實際上の最も眞率な又た最も切實な懷疑である、斯の如き懷疑は切實な

る生存肯定の懐疑である、开は懐疑の爲めの懐疑では無くして、素より生存の爲めの實際的懐疑である。勿論吾々は斯かる懐疑の爲めに苦しい思ひをする、されど如何なる手段を取つても又た如何に失敗しても、結局いつれかの方面へ自己を作つて行かない譯にはゆかぬ、しかも何れの方面へか努力せずには居られない、彼の空想的懐疑論者は何所にか客觀的に潜んで居る秘密の暴露を消極的に待つて居る、併し何時まで待つても夫れは無効である、言ふまでもなく努力の伴はない懐疑は永久に解決せらるべきものではない、然るに實際的懐疑論者は、自分の努力の爲めに疑惑し、努力の結果の上に懐疑を解決しようとするのである、しかも現代に於ける懐疑は大きく深い、吾々は如何に人生を作るべきかに惑はざるを得ない、何故ならば吾々の努力は失敗があり間違ひがある、开が有終の美を濟すものは極めて少數である、蓋し夫れが人生の常態であらうかも知れない、吾々は然う考へるより外に致し方はない、或る程度まで自然の力（或は神と言ふ）に依り、そこに自分自身の積極的努力を加へて疑惑の解決を

心がけねばならぬ、素より懐疑の努力は空想ではない、空想の實現は人間の歴史である、しかも吾々が永遠の生命にまで生くべき此の空想を、實際化すべく努力するところに、眞の人生の實相があり、蓋し人生の至福、人間の價値は、此の自覺から生ずるのではあるまいか。

第二章 社會學上より見たる人間論

社會は之れを單なる個人の集合體と見ることが出来ようか、換言すれば個人あつて然る後これを本位として社會が成立したものと見ることが出来ようか、詳しく言へば個人として單獨に生活し得べきものが、何等かの事情によつて、偶然的に社會なる團體を組織したもので、本來から言へば社會などは無くとも個人は存し得るものであらうか、英國のホップスは、之れに對して然りと答へて居る、其の説に従へば、人は天

性極めて個人的、利己的のものであつて、決して他の爲めを顧みるものではない、利己心の存在を言ふなどは、事の真相を充分に解せざる妄説である、太古の人類には、決して社會なるものを見ることが出来なかつた、人は唯だ徹頭徹尾獨立生活を營み、自己以外の者は、凡べて之れを敵として迎へた、即ち全く人々相戦ふの状態にあつたのである、然るに人智漸く進歩するに及んで、斯く互ひに争闘これ事として居たのは、各自が其の生を増し、心を安んずることが出来ないと云ふ事を悟つて、茲に人類は互ひに相契約して、國家なるものを組織するに至つたと言ふのである、故に彼れの説から言ふと、人の自然性は飽くまで非社會的のものであるのだが、併しお互ひが唯だ争つてばかり居たのでは、自己の幸福そのものを得られなくなると言ふ事實を悟つて、茲に止むを得ず社會的生活を營むに至つたと解するのである、然しながら之れは凡べての事實に合はざる謬説に過ぎない、アリストートルが早く喝破したやうに吾人は天性社會的動物である、なるほど太古に於ては、今日見るやうな完備した大仕掛け

な社會組織は無かつたらう、併し吾人は如何に歴史を溯つても、各人まつたく相敵視し、そして其の間に全く何等の結合も無かつたと言ふやうな事實を認めることが出来ない、假りに然うした事實があつたとしても、少なくとも母子の同棲、及び二者の愛情的結合と言ふ事を否むことは出来まい、否な夫れ以上に、相當の團結的生活を營んで居つたことは事實である、しかも動物の社會にさへ、多少團體的生活の事實はある、まして人類の孤立的生活と言ふやうなことは、素より想像出来ないことである、故に社會なるものは、人が便宜上組織したと言ふやうなものでは無くて、實は人性の自然に具はつて居るところの社會的感情が、實現せられた結果なのである、人は社會的感情、又は社會心を自然に具へて居る、併し之れは始めから完全したものではなく、一定の刺戟を待つて、漸次に養成せられ、助長せらるゝものである、蓋し之れが充分に發揮實現せらるゝことは、他の諸性能に於けると均しく、無限の未來に望まざるを得ない。

さて人類が、其の社會心を養成せらるゝ最重要の場所は、即ち家庭的な生活である、謂はゞ赤兒が母胎を出で、間もなく其の母を認め、之れを慕ふやうになる、之れが抑も社會心發現の第一歩である、やがて其の父を知り、其の兄弟姉妹、其の乳母を知り、其の他自分の家庭に於ける凡べての人を知つて、之れを慕ひ、是れを愛するやうになつて來て、社會心はいよいよ明らかである、蓋し母の姿見えざれば泣き、父の姿見えざれば悲しみ、兄弟の姿見えざれば寂しさを感ずる、凡べて之れ社會心に基くのである、やがて自己の家庭に屢々往來する人を愛し、四圍の同輩と睦び、更に進んでは、同郷人を愛し、同州人を愛し、同邦人を愛し、廣く人類一般に對する同情を生ずるに至つて、社會心は充分に發揮せられたものと言ひ得る、實に社會心を養ふ基礎となるものは家庭であつて、此處で充分に社會心の養成が出来て居ないと、將來その發達を望むことは餘程むづかしい、だから其の生ひ立ちに於て、充分に家庭的な生活の情味を味は、すにしまつた人は、他日社會に出で、多くの人に接するやうになつても、矢張

り主我感情が強く、剛情我慢で人と相容れることが出来ない、どこかに一種陰險なところがあつて、邪推深いところがあり、しかも卑屈ならざれば狷介と言ふやうな具合で、甚だ社交的でない、時としては極端な憎人主義、憎社會主義の人となつて、爲めに甚だ有害にして危険なる行爲を敢てするやうになる、故に法律上に於ける犯罪者などは、おほかた家庭生活の情味を充分に味は、なかつた者に多い、たとへば孤兒であるとか、或は兩親の何れか一方が缺けて居たとか言ふ人には、一般に非社會的の性質が多く、従つて犯罪傾向が強い、されば社會心養成の上に、家庭的な生活は非常に大切なものである、元來家庭は、謂はゞ社會の小なるものであり、また社會は家庭の大なるものであつて、畢竟社會は、家庭と言ふ小社會を細胞として組織せられた一個の有機體である、以て如何に家庭なるものが、社會と重大な關係を保つて居るかを知ることが出来よう、蓋し家庭的な生活が社會的生活の基礎であることは素より其の所であるが、更に進んで家庭的な生活が、人生に對して如何に重大なる意義を有するものである

かを考へて見ようと思ふ、即ち家庭的生活の如何が、如何に吾人の思想を支配し、其の運命を左右するものであるかを察して見ようと思ふ。

家庭的な生活が、理想的に行はれて居ると否などは、やがて其の人の運命が、理想的に開展するか何うかを決定するものである、先づ子としての點から言つて見ると、幼い時に兩親を失つて、全く他人の手で育つたとか、または片親を失つた爲めに、繼母或は養父の手にかゝつたとか言ふ場合には、しみじみと親の愛情を味はふことが出来ない爲めに、何うしても性質がひねくれて来る、意地が悪くなる、しかも嫉妬、猜疑、陰險、邪推、卑屈、傲慢などの非社會的感情が發達して、爲めに世間に出てからは世の嫌はれ者となり、従つて益々意地になり、反抗心を昂め、不都合の行爲多く、一生を不平不満の中に送つてしまふことになる、併し兩親がチャンと存命で居ても、若し無情の親である場合には、同一の結果を其の子に與へるものである、デ獨逸の哲學者シヨーベンハウエルが、大いに婦人を憎んだのは、幼時非常に其の母の虐待を受

けた結果であると言ふ、彼れは極端に婦人を憎み、従つて結婚もせず、婦人の愛情に接することが出来なかつた爲めに、或は大いに其の厭世主義を培かひ、加へて個人的、主我的性質を養つたとも言ひ得るかも知れない、また昔に兩親の愛情如何に拘はらず、其の思想人格如何、教育の方法如何によりても、其の子に種々な影響を與へる、即ち兩親が放縱であれば其の子も放縱になり、兩親が嚴肅であれば其の子も亦た嚴肅になる、たとへば詩人バイロンが不羈放縱であつたのも、又た哲學者カントが謹嚴正直であつたのも、主として其の兩親の性質や薰陶に基くところが頗る多かつたのである、即ち彼等が其の一生を如何に送つたか、其の運命を如何に開拓したかは、おそろくは過半その家庭生活によつて決定せられたのである、并は必ずしも實例を、遠きに求めずとも、吾等が日常聞睹の事實、皆な之れを證して居る、言ふまでもなく贅澤三昧、我儘放題に育つた金持の子などには、一生家のお飾り物、一種の偶像として一生を終る外、自分の力では到底生存の出来ないやうな者が往々ある、這んな人間は、一

朝家が破産でもすると、乞食でもするか、死ぬ外には道が無くなる、彼れをして斯の如く無能ならしめた所以のものは、素より誤まれる家庭生活である、蓋し其の他、寺に育てば、飽くまで僧侶くさくなり、又た農家に育てば、何となく農家くさくなり、それから山の手の家庭に人となれば、ごことなく山の手風となり、且つ下町の家庭に人となれば、自然と下町風となり、猶ほ又た深川の兄哥の家庭に人となれば、言動や服装の凡べてが兄哥風になる、昔から「氏より育ち」と言ふが、確かに然うである、故に如何なる家庭に育つたかと言ふことは、大體に於て如何なる人間かを決定し、其の如何なる人間かは、やがて人生に於て彼れは如何なる役目を務め、如何なる運命を築くかを決定する、されば學者の子が學問を尊重し、商人の子が金を有り難いと感ずるのは、何も天性の相異では無く、寧ろ育ちの相異である、さて前者は、矢張り教育者となるか、著述家となるか、兎に角餘り其の範圍を脱し得ないのが常であり、後者は商業家になるか、銀行會社員になるか、何れにしても一定のサークル内に止ごま

るを常とする、いろ／＼と此等の事を考へて見たならば、如何に家庭的な生活が偉大なる人生的意義を有つて居るかを察し得るであらう。

以上は主として子の立場から言つたのであるが、之れを良人として妻としての方面から見ても、又た頗る注意すべきものがある、世には好ましからぬ妻を持つて、爲めに名譽を失墜し、事業に失敗し、其の一生を過まる良人が幾らもあると同時に、また好ましからぬ良人を持つて、爲めに冷酷無愛に泣き、其の一生を暗黒と苦痛とに終る妻が澤山ある、蓋し夫れが兩者ともに尋常の人々であつても、其の思想或は氣質等の甚だ適合しない爲めに、思はず悲劇に陥る場合も多い、ところで長谷川二葉亭の傑作「其の面影」などは、其の適例とも見るべきものであらう、即ち本篇の主人公哲也が、相當の學才を懐きながら一生を棒に振つてしまつたのは、或る點から見ると、夫妻の性格の不一致に基く、家庭の不和に基因するものとも言へよう、哲也と其の妻とは、全然その性格が合はなかつた爲めに、夫婦の間は、極めて冷淡であつた、折しも妻の

異母妹に當る小夜子といふ、極めて温良愛すべき婦人が、良人に死に別れて、義兄哲也の家に厄介になつて居た、彼の女は姉とは違つて極く氣立てが柔さしく、且つよく義兄の世話をした、一方不貞腐れの妻の虐待に堪へ得ざる哲也は、小夜子の親切な心盡しに、少なからず情を動かした、小夜子も素より心やさしき女とて、姉の哲也に對する冷淡な態度を見て、哲也を氣の毒とも思ひ、一種の同情を持つて居た、之れが素となり、それに種々なる縁が錯綜して、二人は遂に不義の愛に陥つてしまつた、哲也の運命は、斯くて全く破壊し去らるゝ事になつたのである、其の素はと言へば、家庭の不和が主なる原因である、又たハウプトマンの名作「寂しき人々」の主人公が、ひと夏、自分の家に寄寓して居た一女子大學生に戀したのも、やがて失戀や、妻に對する不満や、自己を解する者の無き不平やの爲めに、遂に自殺するに至つたのも、其の主因は家庭の不愉快にあつた、妻が自分の事業や思想に對して、何等の同情も理解も無い點にあつた、實際世間を見ると、輕佻浮薄で虛榮心が強く、貞淑の徳を缺いて居

る妻を持つて、良人は唯だ其の御奉公に努め、其の贅澤費を給する一機關たるの外、遂に何等の意義なきものとなり終つて、不平不満の中に年を重ね、一生何も出來ずに終る男子も、世には決して少なくない、また妻が病身であるとか、ヒステリーであるとか、何等の温い情も無いとか言ふ事の爲めに、家庭が不愉快で堪まらず、始終家を外に、酒色に耽り、爲めに業を怠り、人格の低劣を曝露すると言ふやうな男子も澤山ある、また婦人の方から言つて見れば、良人が遊蕩者である爲めに苦勞するとか、働きが無い爲めに餘計な心配をするとか、猶ほ且つ冷酷鐵の如き無情漢であつて、妻の上などは微塵も思はないと言ふやうな有様で、始終不安の日を送ると言ふやうな事は、世間に随分あることであるが、婦人に取つては這んな不幸なことはない、ところが男子ならば、外に出て家庭の不愉快を忘れることも出來ようが、然るに婦人に取つては、家庭的な生活が全然その幸不幸を決定するものであるから、一朝それが逆行する段になると、もはや彼の女は何處にも光りを認めることが出來ないのである、されば

之れが爲めに、敢て自殺を計つた婦人は、古來いくら有つたか知れぬ、斯様な次第で、家庭生活が愉快に行くか不愉快に行くかと言ふことは、實に吾人の運命を左右し、一生の幸不幸を支配し、事業の成敗を決定すると言ふ程、爾かく重大なものであるから、人は何うしても其の家庭を圓滿にし生活を快適ならしむるやうに心せねばならぬ、素より生活を楽しく愉快ならしむると言ふことが、斯く人生に對して重大な意義を有するは、蓋し其の人間價値の偉大なるが爲めである。

惟ふに宇宙の始めを玄と稱し、漸やく天地が形ち造られ、其の間に人間が生じて、萬有が悉く出現したと言ふ、支那哲學の思想から、男を以て天になぞらへ、女を以て地に譬へるやうに、夫唱婦隨と言ひ、婦人は男子に服従すべきものとされたのである、我が國に於ては、此の様な思想が旺んになつた爲めに、家族主義が行はれ、一家の首長が、自分よりも弱い家族を支配するに至つたのである、西洋では夙に平等思想が旺んであつた爲めに、従つて個人主義となつたのである、其の結果、男子も女子も

同等の地位にあるものと見られ、更に男子は弱い婦人を愛憐し、之れを保護しなければならぬと言ふ譯で、遂には男子が婦人の御機嫌を取らねばならぬに至つたものであるから、洋の東西によつて全然相反した思想が兩立して居るやうな次第である、ところで西洋では家庭なるものは、夫婦が中心となつて組織されてあるが、東洋では父子が中心となつて居るから、愛の形を變へた恩と言ふものが本位で、夫婦の愛など、言ふものは、殆んど度外視せられて居る爲め、西洋と東洋とでは思想上からして衝突を免がれぬのである、歐米各國ではX⁷、ミリー即ち家族なるものは、夫婦と親子より外にはないが、東洋否な日本では夫婦と親子との外に、姑舅とか小姑とか種々なものが家庭の中に加へられ、其の組織と言ふものが、極めて複雑であるから、常に家庭は和平が保てず、何時も紛擾が絶えないのである、抑も家庭なるもの、見方に就て二様あり、唯心的すなはち精神上、修養の方面と、唯物的すなはち家庭とか庭園とか服裝とか家具とかの方面である、素より唯心的の根源たる幸福とか快樂とか平和とか言ふものと、

唯物的の生活状態たる家屋とか庭園とか服装とか家具とか言ふものが、おのづと総合せられて家庭の要素となるのである、先づ唯物的の方面としては、开が住居の内に、たとひ半坪でも庭が作られ、草花などが咲いて居り、空氣の流通がよく、しかも主婦の優さしい真心から、唯だ掛け物が朝の夕の異なり、花の活け方が昨日のと違ひ、室内が綺麗に潔められ、細心の注意を拂つた手製の料理を供されたと言ふ事だけでも、家長として、之れに過ぎた慰めはないのである、次に唯心的家庭の要素としては、ラブ即ち愛すなはち徳の範圍に過ぎぬのである、此の愛なるものは、普通世間で一般に唱導される男女間の戀と言ふものとは餘程その趣きを異にして居る、言ふまでもなく日本古來の家庭に行はれた父母の恩といふ愛の形を變へたものも含んで居るのであらうし、蓋し修養を積んだ人の成熟した情と言ふものを指すのであつて、彼の野性的本能とは違ひ、教育主義に依つて純化せられた道德的のものである、毫も不淨の分子を含まず、子が親を慕ふやうに、親が子を慈しむやうに、雲の行くが如く、水の流れるが如く、至つて自然的な、且つ崇高なものである、謂はゞ其の人の人格を信じ、其の心を慕ひ合ふのに外ならぬ、デ男女間の戀といふ野性的なるものは、純潔の愛ではなく、動物的の愛であるから、假りに之れを動物愛と名づけ、しかも真正なる愛は、便宜上これを徳と稱したいと思ふ、ところが歐米ではラブなるものは、唯だ夫婦間のみ限られて居るやうである、然しながら人間は、そんな抽象的のものでは無いから、愛の範圍を擴めなければならぬが、此の愛なるもの、性質は狭ければ狭いだけ、却つて強くなるものである、素より組織が複雑である日本の家庭を調和するには、何うしても人情と言ふものに依る外はないと思ふ、此の人情なるものは、言ふまでもなく野性的で無く、まつたく修養を積んだ成熟したるもので、所謂アイデアルオールドでなければならぬのである、要するに家庭の主婦たるものは、人情即ち情即ち愛即ち徳を解し、平和を主として忍耐精勵事に當り、専ら常識を念頭に置き、以て一家を處理すべく心掛けねばならぬのである、蓋し「家庭は世間的煩累よりの安全なる隠れ家なり」

とは西人の諺である、且つ「神我れと共にあるの時、妻子我れと共にあるの時、吾人の福樂は其所にあり」とは米國の一批評家の言である、素より社會的生活は、戦ひの生活である、競争の生活である、努力の生活である、そして其の居るところは、義理の世界であり、拘束の世界である、だから社會的生活に於ては、一刻の油斷をも許さない、其の神經は常に興奮せられ、其の心は常に緊張の状態にあらねばならぬ、泣き度い時に笑はねばならぬ、可笑しい時に泣かねばならぬ、迷惑な時に御禮を陳べねばならぬ、有り難い時に澁面を作らねばならぬ、之れ吾人に取りて、甚だ苦しい生活ではないか、斯うした世界から一步を轉じて、家庭生活に入らんか、其所には慈愛に充てる父母が、茶を入れて待つて居る、最愛の妻が、美酒佳肴を用意して迎へて呉れる、可憐なる兒女は周圍から飛び付く、そして其所には偽りと言ふものがない、自己の隙を窺ふ敵がない、しかも堅くらしい義理や、煩はしいお世辭がない、そして温かい空氣と、甘い情味とがある、何事も打ち解けて話すことが出来る、何處にも障壁なく蟠

かまりが無い、言ふまでもなく邪推、嫉妬、陰險、狡猾、虚偽、讒誣、誹謗など、凡そ社會的生活に於て見るところの一切の邪惡は、茲に其の影を收めて、代ふるに慈愛、同情、親密、愛慕、自由、安慰、希望、光明等の美德を以てする、素より社會は智と意志との世界であるが、家庭は全く情の世界である、前者の生活は努力奮闘の生活であるが、後者の生活は安慰休息の生活である、前者の生活を、白日塵中の勞役にも譬へば、後者の生活は、月夜林間の逍遙にも比すべきものである、實に楽しくも美はしきは、快適なる家庭生活である。

家庭生活は、常に安慰と光明とを與へるばかりでは無く、吾人に一種の活力と元氣とを與へる、たとへば吾々の家庭は、恰も沙漠に於けるオーシスの如きものである、茫茫たる沙漠を旅する人は、オーシスありて始めて其の疲れを癒し、新たなる元氣を振るひ起こして、再び旅行を續けることが出来る、それと同じく匆々役々たる社會生活の間に、家庭なるオーシスありて、此處に甘き泉を掬み取ることが出来るのである、

しかも家庭生活は、更に吾人に着實なる考へを起こさせるものである、世の戦ひに強たか手傷を負ひて、勇氣挫け、心狂ひ、情亂れて、將さに自暴自棄せんとするの時、又は種々の誘惑に接して、心動き、智慮鈍りて、遂に墮落の淵に陥らんとするの時、一たび、我が家の門を入りて、慈愛深き父母の笑顔に接し愛しき妻子の喜ぶ様を見れば、今迄の思ひは煙の如く消え失せて、あゝ我れ自重せねばならぬ、我れ奮はねばならぬてふ一種勇ましき感じと、着實な考へとが起こるであらう、そして假りにも自暴自棄の心を起こし、墮落の心を起こしたことを後悔するであらう、此等の點にも、家庭生活の大なる價值はある、殊に吾人の愛情と言ひ、温情と言ひ、同情と言ふ、此等一類のテングダーハート、或はヒューマンバツションを養ふ上に於て、家庭生活の效果は實に偉大なものである、外に在りては、冷酷氷の如き無情漢と雖も、内に入りて父母の慈顔に接し、妻子の精愛に觸るゝ時は、心自から解け、情自から柔がざるを得ないであらう、蓋し家庭生活は、斯く吾人に慰安を與へ、活力を與へ、着實の心を與へ、

温情を與へるものである、だけ夫れだけ、家庭生活の眞味を味はゝざるものは、何處か其の性格に缺點あるを免がれない、其の生ひ立ちに於て、家庭の情味を経験せざりしものは勿論、相當の年配に達して、しかも家庭を作らざる獨身者には、何處となく一種の圭角がある、一種厭ふべき意地がある、陰險にして且つ残忍なところがある、無責任且つ放縱なところがある、殊に婦人の獨身者にありては、其の缺點を曝露すること男子の比ではない、之れは所謂オールドミスなるものゝ、忌むべき氣質を想像して見れば直ぐ分る、彼の女は概して、不自然極まる畸形兒である、何事に對しても、物を正面から感じ、正面から理解し、正面から味はふことの出来ない偏頗な神経を持つて居る、と同時に、眼には凄き光りを宿し、口元には嶮を帯び、顔色蒼白にして、形容は衰へ、一種のゴストリー、ファイチュワーを現はして來る、彼の女は自己本來の生命たる愛に對してさへ、之れを不見識にして耻づべき事と思ふやうになる、彼の女の胸は、秋風そよぐ荒塚の如く、朔風吼ゆる寒林の如く、潤澤なく、光輝なく、色彩

なく、温味がない、されば島崎藤村氏は「老嬢」の中に其の戀を描いて、「愛せずには、一日も居られない程の情熱と、絶えず情人を批評したり、解剖したりする程の冷酷さと、——その矛盾を一つの胸に集めて居るのです、どうして此の女が苦しまずに戀するやうな、そんな譯もないことで承知しませう、ですから男に物を思はせて、もうもう拜むばかりに煩悶させて、烈しく苦しむ様を見て居ながら、それで言ひ度いことを言はせない、自分も亦、決して胸の秘密を打ち明けない、——緑陰を彷徨ひながら、乳房を押さへて懊惱する筈でせう」と評して居る、之れ婦人の獨身者の戀を描いたものであるが、此の氣分と、此の態度とは、嘗に戀の場合に止ごまらず、凡べての場合に現はれるのである、之れ實に恐るべく思ふべきことではないか、畢竟は之れ家庭生活の恩恵に接し得ざることが、婦人天性の柔和なる性情を殺してしまつたのである、故に人間は、逆に家庭生活の缺如或は不満が、吾人に偉大なる悪影響を與へるものであるだけ、夫れ自身の人間價値は偉大であると言ふことが出来る。

第三章 心理學上より見たる人間論

快適の生活をなすには、一家の平和を保つのが、何より緊急必要なことである、されば一家の人々が互ひに相愛し、心情を同じくし、精神を等しくして、各自が努めて感情を害し合はないやうにする、しかも相互に他を満足せしむる爲めに自己の慾望を犠牲にし、他の趣味に投合すべく我が嗜好を棄て、且つ倦怠なく、不平なく和氣霽々裡に暮すのが素より快適生活の根本である、たとひ金殿玉樓に座して、美食に飽き、綾羅錦繡を身に纏つて居ても、其の家族が互ひに相愛し、相ゆづり、相助け合ふことを知らない家庭は、決して快適であり、平和であり、幸福であり得ない、だから英國人は、其の家庭は各人の城廓であると言つて誇つて居る、然う言ふ風に彼等の家庭は鞏固であり、しかく健であり、従つて嫉妬、反目、不信、暗闘、不義、不善あらゆる罪惡の敵をして一步をだも踏み込ませず、且つ一指をだも染めさせないほど健全な

るものである、故に斯かる健全なる家庭には不安がない、悲哀がない、不信がない、疑惑がない、反目がない、不義がない、おのづから従つて快適である、幸福である、困難の避難所である、苦痛の隠れ家である、悲哀の慰藉場である、あらゆる悪徳の治療院である。

ところで家庭を組織するものは、言ふまでもなく愛であり、同情であり、信任であり、犠牲であり、しかも然うした有らゆる美德である、そして此の有らゆる美德の第一の要件は愛の充實である、されば健全なる家庭は愛の充實した家庭であらねばならぬ、愛は家庭の生命である、愛は家庭の活力である、然るに愛なき家庭は、唯だ人間の集合したに過ぎないもので、本當の家庭と言ふことは出来ず、謂はゞ同じ家庭に共に生活を營むが如きものであるから、并は取りも直さず下宿屋の下宿人相互の關係に同じである、だから愛のない家庭は、靈魂のない人間のやうなもので、彼の箴言に「蔬菜を食ひて互ひに相愛するは肥えたる牛を食ふて相恨むに優る、陸まじうして

一塊の乾けるパンあるは争闘ありて家畜の満ちたる家に優る」とあるが如き、實に此の意味に外ならないのである、テ吾々が家庭を重んじ、家庭を尊敬するのは、眞に愛のある家庭が、謂はゞ人生の憂患苦悶、艱難辛勞に對して慰藉を得べき唯一の休息所だからである、たとへば處世の船が、浮世の海に於て免がれ難き暴風怒濤を避くべき唯一の港灣だからである、之れ實に愛の充實した家庭のみが克く爲し能ふところなのである、されば家庭は人生の逆旅の休息所、處世の航路の港灣であるばかりでなく、眞に人間の孤立を許さざる自然的必然的の組織から出来上がるものである、人は獨居すべく造られたものではない、彼の神話にも、神が初めてアダムを創造した時、彼れ一人にして置くは宜しからずと言つて、更にイヴを作つて之れに與へたとある、洵に獨居は天理に背くものであるから、何人も然るべき伉儷を得て、家庭を作ると言ふことが自然であらねばならぬ、しかも家庭は社會國家の基礎であると同時に、文明の根源であり、また進歩の動力である、ところで家庭は凡べての美德を教へる真正なる學

校であるが、有らゆる人生の美德は愛の上に建設されるもので、此の愛は素より家庭に於て養成されるものであらねばならぬ、そして純眞の感情、優良の性質、高邁の人格など、一として家庭で發育養成せられぬものはない、されば彼の天の使ひの爲すところも、また家庭の上には出ないのである、故に父母の慈愛や兄弟の同情や姉妹の親切などは言ふに及ばず、人々の幼少より壯年の有らゆる時代を通じて、人生に行路難を嘆ずる者を慰め、苦痛煩悶に堪へざる者を救ひ癒やし、且つ悲觀失意の人等を助け勞はるものは、實に此の愛の充實した真正なる家庭であらう。

天に輝やく日光も、觀る者の胸中に光明がなければ、何等の力も生命もないのである、また自然の美は永遠に朽らないが、之れに浴する者の腦裡に美の觀念がなければ、決して美しくも佳くもないのである、眞に家庭をして愛あらしめ、美德の源泉たらしめ、且つ艱苦の安慰たらしめるのは、素より家庭を形成する家族相互の心懸けに依るものである、若し吾々の家庭が醜惡であり、冷淡であり、薄情であつて、夫れが爲め

荒廢落莫の觀を呈して居るならば、开は取りも直さず吾々相互に於て自ら招くところであらねばならぬ、そして斯の如き家庭に在る者が如何に人生を悲觀するか、开が奮闘努力や艱難辛苦は何に依つて慰められるか、蓋し又た其の人生が何の様に趣味のないものとなるであらう、猶ほ且つ其の生活が如何ばかりか力のないものとなるであらう、否な夫ればかりではない、やがて社會の基礎は搖るぐ、文明の根本は崩れる、從つて進化の動力は止まつてしまふ、故に吾々は全力を注いで相愛し合ふと同時に、また努めて其の家庭を愉快にしなければならぬ、斯く愛のある愉快な家庭が、どれほど人生に幸福を與へ、更に社會の安寧を補翼し、且つ文化の開發の上に如何に大なる貢獻をなすかは、實に思ひ半ばに過ぎぬものがあるではないか、开は言ふまでもなく吾々相互の責任であり、家族相互の心懸け一つに依るものであらねばならぬ。

然らば快適の生を送る爲めに、如何にして愛の家庭を作るべきか、また幸福に日を暮すべく、どうしたら愉快な空氣の充ちた家庭が作り得られるか、夫れに就て一つの

挿話がある、或る處に隣り合つた二軒の家があつた、デ其の一軒は家族同士が極く仲がよい家である、即ち嫁は姑を勞はり、姑は嫁を慈しみ、親は子を、子は親を、夫は妻を、妻は夫を、姉は妹を、妹は姉を、お互ひに相愛し、相信じ且つ相譲り合つて、大きな聲で物言ひ一つしたことがない、まことに和氣霽々、何時も春風吹き春水流れ、眞の幸福は有らゆる世界を通じて此の家へ集つて居るやうに見える、ところが其の隣家は何うかと言ふと、之れは又た甚しく家族同士の間が睦まじからぬ家である、先づ姑は嫁を苛じめ、嫁は姑に逆らひ、夫は妻と、妻は夫と、親は子と、子は親と、兄は弟と、弟は兄と、常に折り合ひが悪く、疑ひ憎み、何れも皆な我を通し合ひ、口論を敢てして争闘が續行される、斯くて親子喧嘩、夫婦喧嘩、兄弟喧嘩などの絶え間がなく、地上中の不幸と不平と不満とが殆んど悉く群がり來たつたかと思ふ程である、しかも同じ日の下に生き、同じ社會に棲み、同じ衣を纏ひ、同じ食を攝り、そして同じ人間でありながら、一方は斯の如く不和で、また一方が爾かく平和なのは何故であ

らうか、そこで不和な家庭を作つて居る人が隣家へ行つて、「お宅様では何うしてマアそんなに仲よく口論一つしないで暮して居るのでせう」と聞いたところ、平和な家庭を作つて居る人が微笑しながら答へるには、「手前共は皆な悪人ばかりですから夫れで仲よく暮して行けるのです」と答へたとある、之れは實に不思議な話で、悪人ばかりならば、何時も反目し、争闘し、喧嘩口論に日を送つて居る筈であり、不平不満の生活をして居る道理である、然るに悪人揃ひだから、家庭が圓滿であり平和であり、快適であり幸福であると言ふのは、ちと受け取りかねる理窟である、然しながら开を深く考へて見れば、其の言葉の中に深長な意味が含まれて居ることが分る、茲に悪人と言ふのは、世の所謂不良者の意味ではない、たとへば彼の基督が「世の中に義人一人もあるなし」と言つた様な意味のもので、即ち自分は缺點だらけの人間であるから何事にまれ深く戒慎して悪いところを改めねばならぬと言ふ謙讓の精神を有する所のものである、自省の心である、互ひに自から相顧みて我が足りないところ悪いところを見

る心である、斯く自分が宜しくないと思へばこそ、人を咎めたり恨んだり妬んだりする様なことがなくなる、且つ又た不平不満も、自分が悪いからだと思へば何所かへ引ッ込んでしまふ、だから従つて喧嘩もせず、口論もしない、何所までも平和に、圓滿に、幸福に、快適に生活して行けるのである。故に自から省みると言ふことは、家庭内に在つても、社會上に於ても、人間相互の平和を維持し、幸福を得る最良の手段である、然う言ふ風に考へて見ると、彼の「手前共は皆な悪人ばかりですから夫れで仲よく暮して行けるのです」と言ふ話の意味がよく分る、しかも开は素より眞に意義のある味ふべき言葉であるから、吾々は本當に惹から此の言葉の意味を能く考へて、日常生活上の標的としたならば、おそろしく快適に幸福に世を渡ることが出来るであらう、夫れなら又た一方の家庭は何故いつも不和で、不愉快で、喧嘩口論に日を送つて居たのであらうか、开は言ふまでもなく家族相互が自から善人を以て許して居るからである、何も善人ばかりならば、然う口論も喧嘩もなくして済みさうなものであるが、とこ

ろが善人揃ひだから争闘が絶えぬ、そして又た荒廢な、不純な、醜陋な、俗惡な家庭が、何れも善人の多い家にもみ發見せられると言ふのは實に不思議な話である、併し之れも前述の「悪人ばかりの家」と同じ意味で、考へて見れば不思議でも不道理でもないのである、开は言ふまでもなく家族相互が「自分は正しい、自分に悪いところはない」と妄信して居るから、反省がない、自から顧みない、自分は善いと思ふから人は悪いと信する、自分は正しいと信するから非は人にあると思ふ、だから従つて人を攻める、人を咎める、人に對して不平がある、また人に對して不満が生ずる、斯の如き人々が、相互に幸福であり、平和であり、愉快であり得る道理はない、げに善人ばかりの家庭が、いつも荒廢、不純、醜陋、俗惡を極めるのは此の故である、されば不幸な不和な不愉快な生活を送る人々は、多くは他を皆な不善となして自から一人だけ善人を以て任じて居るものであり、概して又た自から省みることのないところのものである、然しながら世には悪人の多い家庭は尠なく、善人の多い家庭は澤山ある、

デ吾々の取るべき道は、自から悪むと思ふ心であり、他を皆な善しと認める心である、猶ほ世上幾多の例に見ても、偉なる人は、いつも我が不徳を耻ぢて之れを矯むべく努力して居たやうで、しかも他を攻むるに寛に、我れを攻むるに嚴であつたやうである、斯の如きものこそ本當の義なる人で、そして快適の生を送り得られるものである、彼の孔子が「君子は人の美をなして、人の悪をなさず、小人は之れに反す」と説いたのは、まことに此の意味を簡明に喝破したものである、ところで人々が快適の生を送り得られるやうに、家庭生活を理想的ならしめんとせば、吾人は左の數項を之れが必要條件として擧げざるを得ないのである。

第一、充分なる愛情を以て結合せられ居ること——吾人が家庭に於て感ずる親愛の情が、社會に於て感ずる夫れに比して、一種特絶の趣を有するのは、家庭に於ける各員の關係が、社會に於ける各員の關係と、大いに其の性質を異にして居るからである、社會に於ける各員の關係は、單に同一人類であり、同一の目的を達する爲めに、

同一の機關を用ひて協同的の生活をなして居ると言ふだけであるが、家庭に於ける各員の關係は、直接血を分けて居ると言ふ一種特別の關係を基礎として、春風秋雨常に同じ家根の下に、同じ財布によりて同じ釜の飯を食ひ、常に起居を共にして居ると言ふ、極めて密接な關係である、従つて夫れは又、社會各員の關係よりも、一層自然的であり、一層愛情本位である、社會に於ては、何等血縁關係もなく、また極めて思想境遇の異なつた多數者が、雜居してゐるのであるから、自然その結合は、制度的法規的に傾くを免がれないが、家庭に於ては、各員皆な血縁關係に於て存し、且つ思想や境遇や性格等の凡べてに於て、殆んど何等の隔たりも無いと言ふ有様であるから、其の結合は規則づくや義理づくでは無くして、愛情的である、愛情は實に家庭結合の基礎であり、其の幸福の源である、若し一家各員の間、愛情が無かつたとすれば、家庭は唯だ其の形骸を止むのみであつて、畢竟は無意義のものたらざるを得ない、貧乏暮しの小家庭に、却つて掬すべき情味があつて、上流社會の大家庭に、寧ろ秋風

の吹いて居ると言ふ事實のあるのは、前者の家庭は愛情本位であり、後者の家庭は義理本位に傾く結果である、(其の故は今説明しない) 故に家庭問題で苦しめらるゝことは、比較的上流の社會に多い、之れを要するに愛情の第一義が缺けて居る結果である、家庭が實に人生のオーシスとも言はるべき所以は、畢竟これが愛情の世界であるからである、若し家庭に愛情なるものが缺けて居るならば、寧ろ之れ程厭ふべく且つ煩はしきものはない、實に堪へ難く苦痛なものである、家門を潜るは、恰も墳墓に入るが如きものである、此の故に愛情は家庭生活の第一義であると言はざるを得ない。

第二、一定の禮儀及び規律あること——家庭は愛情を以て第一義とはするが、併し唯だ夫れだけで、相互の間に、相當の禮儀、一定の愛情と言ふものがなければ、お互ひに氣儘放縱に流れて、矢張り一家がウマク行かない、夫妻親子等が皆な愛情の海に溶けてしまつて、其の間彼我の差別なきに至れば、夫は妻の愛に溺れ、妻は夫の愛に馴れ、親は子の愛に流れ、子は親の愛に乗じて、各々我が儘勝手を出だし、却つて不

和の基いとなるものである、世間には餘り仲が好過ぎて争ひの絶へざる夫婦もあり、また溺愛の爲めに其の子の教育を過まる親もある、茲に至つては愛情も其の弊に堪へぬ、故に夫婦の間にも親子の間にも相當の禮儀が無ければならぬ、夫は妻を道具扱ひにしてはならぬ、妻は夫を情人視してはならぬ、また親は子を玩具となし、子は親の愛に馴れてはならぬ、各々相敬ひ、相重んずることが大切である、そして所謂「だらしない態度はお互ひに慎しむべきである、家庭も唯だ愛情のみで行くと、兎角不規律放縱に流れて、一家の中に締りが無くなる、故にお互ひ相當な禮儀は盡し、戒むべき時には戒めもし、諫むべき時には諫めもし、叱るべき時には叱りもする、また離床すべき時には起き、臥床すべき時には寝ね、事に従ふべき時には事に隨ふと言ふやうに、整然たる秩序が無ければならぬ、此の一面が缺けると家庭は治まりがつかなくなる。

第三、統一あること——家庭に統一あるとは、家庭各員の思想行動及び家庭の組織

が、凡べて一定の目的に依つて支配せられ居ることである、各家庭には、各家庭特有の目的がある筈である、商家ならば商家としての繁榮を計ること、醫家ならば醫家としての繁榮を計ること、農家ならば農家としての繁榮を計ること、工家ならば工家としての繁榮を計ることは、各々その目的である、故に家族は、皆な此の目的に對して協力するところがなければならぬ、夫は勤務の爲めに奮闘し居るも、妻は文事に耽り、小説読みや作詩に浮き身をやつして居ると言ふやうではいけない、或は夫は學事に心を碎いて居るが、妻は之れを顧みずして、社交と言ふ名の下にダンスに熱狂して居るやうでは困る、こんな風に家庭内に對立が出来ては、一國に二君あると同じく、家の治まる筈もなく、幸福に日を暮し得らるべきものではない、其の結果は子供や婢僕等に對する命令迄が一々齟齬して來る、下の者は何うして可いか分らなくなる、世間には随分この種の家庭が少なくない、夫は外に出て職業に従事して居る間に、妻は良からぬ者を集めて賭博的遊戯をやつて居る、同時に子は親の目を盗んで、専ら色道の研

究を試みて居ると言ふやうな事もある、また妻が一家の權力を壟斷して、勝手に采配を振つて居る間に、夫は外に在りて、妾狂ひをやつて居ると言ふやうな事もある、これでは家庭が圓滿に行くべき筈はない、一家は主人を中心として、凡べて一定の目的を體認し、一致協力、相助けなければならぬ、斯くする事に依りて、家運の隆盛と幸福とが得らるゝのである。

第四、家族各員の分掌明かなること——家族の各員は、皆な同一目的に向つて一致協力することが必要であると同時に、また各々その位置によりて、掌る所が一定して居なければならぬ、夫が妻の役目をしたり、妻が夫の役目をしたり、子供や召仕などが主人の役目をしたりすることは、最も有害なことである、各々その處に於て、其の分を守らねばならぬ、即ち夫は夫らしく、妻は妻らしく、子は子らしく、婢僕は婢僕らしき行動を取らねばならぬ、之れが亂れると、家庭は到底圓滿に行くことが出来なくなる。

第五、家族の身體健康なること——身體の健康不健康は、著しく吾人の氣分を支配し、そして氣分の是非は亦た著しく思想を支配する、殊に現代の人間は、神経が過敏であるから、氣分の支配を受くること非常である、現代の人間は天氣模様で其の主義主張が變る、井は兎に角として一家の中に氣分の悪い人が居ると、それが皆な一同に感染して、家内の空氣が濕つて來る、之れに反し皆な一同が健康で氣分が好いと、家内中が元氣づいて來て、愉快になる、光彩を放つて來る、斯く氣分の如何は、一家の空氣を或は濕らし、或は晴れやかにするものであるが、さて其の氣分なるものは、元來身體内部の調子に基くものであるから、畢竟は健康の如何に依るものと言ひ得る、身體が健康であれば従つて氣分も好く、身體が不健康であれば従つて氣分が悪く、家庭の中に一人でも蒼白い生氣の脱けた顔をして、始終醫者通ひでもして居るものがあるれば、決して家庭が面白く行くものではない、病人などの有る家は、たま／＼訪づれてさへ餘り愉快なものではない、まして同じ家に起居を共にする人の愉快なる

べき道理がない、故に一家擧つて健康であることは、又た快適生活の一條件である。

人生の生活は家庭を根柢とし、家庭の出發點は結婚にある、嫁して後、妻は如何にして夫に仕へねばならぬか、夫は如何にして妻を遇さねばならぬか、ミルトンは「其の理否に論なく男子と争ふとき女は常に否である」と言ひ、シェレーは「婦人の幸福は服從の中に存す」と誠め、シンゲールスは「婦人の裝飾は其の禮讓に在り」となし、リフトルトンは「大ならんことを求むる勿れ、善ならんことを求めよ、婦人の美德は謙遜にあり」と教へて居る、此等の多くの訓誡のうち、吾々は妻としての婦人の立場を考へることが出来る、然らば夫は如何に妻を遇すべきか、ビーコン、スキールドは「人間萬事婦人に依る」と稱へ、ムーアは「熱帶の太陽の下も、北極の寒冷の地も、婦人あれば幸福なり」と讚し、ジエー、ホワートンは「山海の珍味ありとも婦人なくんば如何せんや」と嘆じて居る、ビーコン、スキールドは更に重ねて「吾人は婦人に一步を譲るべし、然らば婦人は我れに二歩を譲るものなり」と説いて居る、さり

ながらテニソンの言つたやうに婦人は小人である、孔子の誡めた如く養ひ難きもの、近づくれば不遜、遠ざくれば怨むものである、其の面に注意するに至つて益々その家を等閑にするものである、些少の進物に心を左右されるものである、ソクラテスの見る所に依れば、女の涙は信すべからざるものである、しかも意に充たぬ時に泣くのが女の天性である、そして男子よりも早く怒り、速やかに悲しみ、定見なく變化極まりなく、善を爲すよりも惡を爲すに容易なるものである、昔の聖哲等の女に對する諸説は、或る場合ある人に取つて悉く眞實である、宜しく取捨して以て婦人相遇するの道を誤まらないやうにするがよい、斯の如くんば相愛し、相敬ひ、バブリアス、サイラスの言つたやうに「良人の命に従つて、しかも良人を左右し得る有徳の婦人」もなれば、またスコットの稱讚するが如く「苦痛悲哀交々到る時に、我れを助くる唯一の天使」ともなるのである、ところで親は子に對して如何に臨むべきか、子は親に對して如何に努むべきか、孔子が「父は子の爲めに隠し、子は父の爲めに隠す、直きこ

と其の中にあり」と説いたのは、親子の關係を剴切に直截に喝破したものである、テ親の子に對する心得から言へば、「世を救ふ三世の佛の心にも似たるは親の心なりけり」で、子は父母の行爲を映寫する鏡であるから、心して誤まりなきやうに養育せねばならぬ、大學に「子の惡を知らず」と言ふ事があるが、それではならない、またタールは「母の愛は犬の愛なり」と言つて居るが、斯の如きは、子を愛するの結果、溺愛的に陥つて、却つて子の一生を誤まるものと言はねばならぬ、それから親な對する子の努むべき道に就て、曾子は「身は父母の遺體なり、父母の遺體を行ふ、敢て敬せざらんや」と言つて居るが、希臘の哲學者プラトーンも「父母は最も之れを敬ひ、これが恩に報ひなければならぬ、子は父母に對して最大の、且つ最も古い負債がある、何事を措いても先づ其の負債を償はねばならぬ、父母は子を生み、子を養育して其の厚恩は譬へやうもない、財産上からも、精神上からも、力の限りを盡して之れに報ひねばならぬ、父母に對しては毫も不敬の言を發してはならぬ、父母もし怒る時は其の意に

逆らつてはならぬ、言語、動作、其の感情を満足せしむるやうに努めねばならぬ」と説いて居る、プラトリーの師たるソクラテスの言葉は一層痛切で「我が子よ、汝もし父母の恩を感せずんば、汝の友人となる者なかるべし、何となれば父母の恩に感せざるものは、親切を盡すとも無益なればなり」とある、ソクラテスの此の言葉を、もつと具體的に説明したのは、「親を愛する者は敢て人を憎まず、親を敬する者は敢て人を侮らず」と言ふ孔子の教へで、彼れが孝は徳の本なりと言つたのも、實に此の意味でなければならぬ、蓋し大學に、一家仁あれば一國仁を興し、一家讓あれば一國讓を興すと書いてある、开は家庭が社會進歩の基礎であり、國運發展の原動力であることを説明したものである、素より一家の仁、一家の讓は、先づ兄弟姉妹の關係から興る、胡馬は北風に依り、越鳥は南枝に巢をつくる、越人は越に安んじ、楚人は楚に安んづる、吾々の家庭は吾々の城廓である、我が家の粗菜は、他の家の牛肉よりも價値がある、他人と親しむよりは、先づ兄弟姉妹相親しむべきである、同胞の道は、五本の指と等

しく相離るべからざるものである、されば顔氏家訓に「兄弟は形を分ち、氣を連ぬるの人なり、其の幼なるに當つてや、父母左提右契し、前襟後裾、食すれば即ち案を同じくし、衣すれば即ち服を傳ふ、學べば即ち方を共にす、悖亂の人なりと雖も、相愛せざる能はず」とあるは、實に兄弟姉妹の相愛し、相敬すべき所以を教へたものである、或は兄弟、他人の始まりであるかも知れぬ、然しながら又た、孔子が「兄弟内に攻むとも他その侮りを防ぐ」と言つたやうに、血は水よりも濃く、互ひに相結合し、相一致する所以は、實に此の友愛の情の發露である、ソクラテスは「兄弟は富に優る、何となれば、兄弟は天賦の道理を以て居るが、富は無情である、兄弟は相互に保護するが、富は却つて保護せらるべきものである、人は獨居するよりも、寧ろ他人と共に生活する方がよい、況んや兄弟に於てをやである、兄弟は同一の父母から生れて、同一の家に成長した者であるから、互ひに相愛するは素より當然である、鳥獸でさへも相共に成長する者の間には、親密な關係があるのである、たとひ我が兄弟性質悪くし

て、生活を共にし難き時でも、努めて其の性質を矯正して、我れに近づかしめるやうに心懸けねばならぬ、兄弟を敬ひ、悌道を守るのは、弟妹の當然の義務である」と説いて居る、且つシルビオペリコも「人間お互ひの間に圓滿な、平和な、幸福な關係を續けて、楽しく愉快に生活しようとするには、先づ第一に家庭に於て學ばなければならぬ、兄弟姉妹は同腹の子である、故に其の親愛の情は言語の盡し能はぬところである、兄弟姉妹に對する各自の義務は、私慾を慎み、お互ひに相思ふこと自分の如くし、一人過まちあらば之れを寛恕し、一人功あれば是れを稱讚して夫れに倣らへ」と教へて居る、また陶淵明の言に「兄弟の情、話を喜び、琴書を樂んで以て憂ひを消す」とある、憂ひを消すとは、即ち快適の生を送る事である、げにクーパーの言ふが如く互ひに和合するは眞に愉快である、純潔なる愛情の充滿する家は、四邊到る所歡樂ならぬはない、笑ふ門には福來たる、快適生活は先づ第一に家庭から始まるべきものである。

第四章 有機感覺より見たる人間論

一家内の單位は精神的存在であつて、其の結合は精神的の夫れである、精神的存在者たる人が、二人以上集つて組織する團體に於ては、夫れが順行すると逆行することは、各員の精神の用ひ方一つにある、各員の精神の用ひ方が良ければ甚だ愉快に幸福にゆくし、各員の精神の用ひ方が悪るれば甚だ不愉快に不幸に陥る、即ち一家内の幸不幸、快不快は、飽くまで團體の上に働く精神作用の支配を蒙らざるを得ない、そこで家庭内に於ては何んな風に人の精神が働くか、どんな風に精神が働いたならば家庭が平和にゆかか、どんな風に働いたならば家庭が不愉快になるか、其所を研究するのが家庭心理である、然しながら家庭心理と稱するものが、心理學の一分科として存するのではない、家庭に於ける各種の現象を、ほと普通心理學の體系に由つて、幾分組織的に研究すると言ふことから、假りに此の名を用ひた迄で、所詮は普通心理學の

理論を、唯だ家庭的事件の上に應用した迄である、さて然らば斯の如き企てが抑も何等の効果を有するものであるかとは、先づ人々の胸に浮ぶ疑問であらう、今簡単に夫れに答へて置く。

唯だ事實を事實として研究し、其の理法を明かにするを以て本領となすもの、之れ所謂科學である、科學は其の本領から言へば、實際上に何程の効果があるか、其の理論を實際上に應用することが出来るか何うかと言ふやうなことは敢て問はない、實際上に益があらうが無からうが、應用が出来やうが出来まいが、別に然う言ふ事は純正科學の間ふところではない、唯だ事實の根柢に横たはる若干の理法を明かにして、事實の由つて來たるところを説明し得れば足るのである、之れ飽くまで知的欲求 満足を求むる科學の、唯一の職能である、科學は唯だ夫れだけで任務を果せる譯である、科學それ自身は夫れでよいのである、然しながら人は知識一偏の動物で無い限り、唯だ夫れだけで満足するものではない、純粹知的研究によりて知り得たるところを、更

に實際生活の上に應用して、それから何等かの實際的利益を得て、情意の満足、肉體の満足をも計りたいと求むるのが自然である。

心理學と言ふものも、夫れ自身の職能から言ふと、單に心の働きを研究して、それを支配する法則を明かにするのみのものである、併し單に夫れだけでは、吾人は充分の満足を得ることが出来ない、一方に於ては其の教ふる所を取つて、出來得るだけ廣い範圍に應用し、以て其の實效を收めたい、故に吾人が今家庭問題を心理的に説明しようとする試みは、單に家庭問題の根本には斯くかく然かじかの理法が横たはつて居ると言ふことを知るのみではなく、更に進んで故に斯くかくすることが望ましい、然かじかすべきであると言ふ事に就て、若干の指示を與へたいのである、そして家庭の理想的に保ち行く心懸け——即ち快適の生を送り得べき考察までも述べたいのである、斯くする以上、生理學の應用學たる衛生學が實際上に多大の効果あると同じく、心理學の應用學たる家庭心理學にも、より以上の効果があるものと信せざるを得ない、

之れを要するに家庭學の效果は、家庭的現象の心理學的意義を明かにし、そして理想的生活を實現するには、如何に其の現象を取り扱ふべきかを表明する點にあると言ひ得るのである。

氣分とは、心理學上所謂一般感覺または有機感覺の事で、内臓器官の状態や血液循環の關係等によりて惹き起こさるゝ感覺である、「けふは氣分が好い」「何さなく愉快だ」「何だか不愉快な日だ」「どうも面白くなって困る」「氣が鬱いで困る」など言ふのは、皆な此の有機感覺すなはち氣分を言ひ表はす言葉である、斯の如き氣分が、吾人の思想を支配する事は實に著しい現象で、古來の文學者、哲學者、宗教家などが、或は歌ひ、或は描き、或は論じ、或は述べたところが、如何に其の氣分の影響を受けて居つたかを考へて見ると、實に驚くべきものがある、否な夫れ等は氣分の影響を脱することは殆んど出来なかつたのである、ショーペンハウエルが厭世主義を唱へたのは、彼れの氣分が常に不愉快であつた爲めであり、ハイネの毒舌的文學は、彼れの氣分が

常にいらいして居た爲めであり、アーピングの文章が花やかで、温かで、氣持の好いのは、彼れの氣分が常に愉快であつた爲めであるとも言ひ得よう、殊に現代の間は神経が過敏で、暗示感性が強いだけに、氣分の支配を受くることが一層著しい、其の人生觀でも主張でも行動でも、其の日その日の氣分で随分と變る、プラグマチズムとか、印象主義とか、瞬間主義とか、刹那主義とか言ふ類の、氣分本位的の思想が現はれて來るのも無理はない、氣分が思想行動の一切を支配すること、換言すれば氣分が萬事を自己化する作用を氣分の類化と呼ぶ。

實際吾人の日常生活を見ても、氣分の支配と言ふことが強く感ぜられる、氣分の好い時には、見るもの聞くもの皆な愉快の種子となつて、少々不都合なことや不愉快なことがあつても、それを打ち消してしまふ、之れに反して氣分の惡い時には、觸るところの事々物々みな不愉快の種子とならざるはない、たとへば微妙なる音楽を聞いても唯だ八釜しいとのみ感ずるとか、さなくば無闇に哀感を覺えたりする、人の愉

快に話すのを見ては小癢に觸はる、親や妻などが機嫌を取れば煩さいと感ずる、書を讀めば、其の記事が詰まらぬとか、小八釜しいとか思ふ、何をしても何を見ても凡べてが不愉快で堪まらぬ、世の中が暗くなつて、灰色の雲が自分を押し付けて居るやうに感ずる、之れ決して外界が灰色なのでは無くして、曇り勝ちな氣分が、外界を一やう灰色に染めてしまふ結果である、即ち惡氣分の惡類化なのである、斯う言ふ譯であるから、氣分が惡いといふ、人生のオーシヌたる家庭の空氣をも濕らしてしまふ、愉快であるべき家庭が、不愉快で堪へ得られ無くなる、即ち氣分の類化は應て他の人を夫れに應化せしむる、自己の氣分が不愉快であれば、それは唯だ家庭内が自分に不愉快であるのみではなく、他をして實際不愉快にしてしまふ、斯く他の人が氣分に類化するゝこと、之れを氣分の應化と言ふのである、氣分の快不快は、常に周圍を快或は不快に見せしむるばかりではなく、實際他人をも快或は不快ならしむることに依りて、其の快不快を二倍にする、即ち人までも快或は不快にしてしまふ、吾人は病家を訪づ

るゝ時、其の家の空氣が非常に濕つて居ることを感ずる、然う感ずると共に、自分も不愉快を覺える、また吾人は家長や主婦の甚だ快活な家を訪づれた時には、家中の空氣が一般に晴れ／＼して居ることを感ずる、然う感ずると共に、自分も愉快を覺える、之れ即ち先きの氣分に應化した結果である。

氣分が人の心を支配することは斯く著しいものであるから、吾人は之れに就ては大いに注意するところが無ければならぬ、氣分が愉快である場合には、兎もすれば樂觀的になり過ぎて事を投げやりにし、或は締めくゝりが無くなる虞れがある、何事に對しても「マア宜い」とか「ウムよしよし」とか言ふやうな具合で、軽く事を引き受けたり、好い加減に事を決めたりして、あとで後悔する、妻子が不當の要求をしても迂濶に夫れを聞き容れたり、自分に爲すべき事があつても、「マア後でも出来るなど、放擲して置いて事を仕損ずる、だから餘り氣分の好過ぎるのも考へもので、哲學などをやる人は、餘り氣分が好過ぎたり、愉快過ぎたりしては駄目だと言ふのも、畢竟これ

が爲めである、故に氣分が好過ぎるくらゐの時には、なるべく心を弛めないやうに努めることが大切である、併し氣分の愉快なのは先づ結構であるが、氣分の不愉快なのは、其の害の及ぶところ一層大である、自分一人が不愉快であると、家内中を不愉快にしてしまふ、之れ家庭の幸福を傷つくること大なるものである、主人公の氣分が不愉快だと、皆な家族が危ぶなくて傍に寄れなくなる、妻君の氣分が不愉快だと、戸障子がガタついたり、鐵瓶が轉がつたり、客が迷惑をしたりする、女中の氣分が不愉快だと、御飯が焦げたり、皿や井が躍つたりする、斯うなつて來ると、家庭内の一方には罵聲が聞えたり、他方には泣き聲が聞えたりする、夫れでは家庭の面白かるべき筈がない、されば氣分の面白く無いとき程、其の言語舉動を慎まねばならぬ、いろ／＼不快に感ずること、氣に觸はることがあつても、それは向ふが悪るいのでは無く、自分の心柄だと言ふやうに考へて、大いに心を制することが必要である、のみならず出來得るだけ心持ちを愉快に安靜に持たうと努めなくてはならぬ。

また家族の中、誰れかト浮はツついで居たり鬱いで居たりする場合には、自分が夫れに應化してしまはないで、出來るだけ彼れを平常の心に恢復せしむることに努めなくてはならない、殊に相手が氣分の勝れない場合には最も注意を要する、なるべく愉快な話や愉快な態度を以て、彼れの氣を引き立てようとするのも宜からうし、またなるべく其の氣に觸はらないやうにすることが大切である、向ふが不愉快な顔をして居る時には、こつちも不愉快な顔をして見せると言ふやうでは、所詮うまく行く筈がない、それかと言つて、無闇にわざとらしい御機嫌を取るのも宜しくない、或る程度までは放任して置くのも宜い、殊に子供などに對しては、放任して置くことが一番よい、召仕などの場合には、出來得るだけの親切を以て慰めてやるべきである。

妻たる人は一家の主婦であるのだから、殊によく自己及び他人の氣分に注意する必要がある、家庭に於て夫を不愉快ならしむる妻、夫に慰めて貰ふやうな妻は、妻たり主婦たるの價値が無いものである、一家の空氣を支配するものは妻である、一家内を愉

快ならしむると不愉快ならしむるとは、懸かつて妻の態度一つにある、彼の女は家庭の花であり慰藉であらねばならぬ、若し其の人にして、不愉快なる空氣の張本人となつたり、夫や子供に御機嫌を取つて貰つたりするやうでは困る、天氣でも悪くして何となく不愉快な日だと思ふやうな時には、自から先づ大いに警戒すると共に、他の者に就ても又大いに警戒せねばいかぬ、然う言ふ時分には、夫の世話をするにしても、よく其の機嫌に注意して手落ちの無いやうにせねばならぬ、且つ機嫌の悪い時には、誰れしも神経が過敏になつて居て、ちよつとした事にも角が立つたり、叱言が出たりするものであるが、それだからと言つて直ぐ自分まで癩癩を起すやうでは仕方がない、妻たる者は斯かる場合に出来るだけ讓歩しなければならぬ、之れ決して奴隸的態度ではない、戦はずして勝つ勇者の態度である、無手勝流の奥義である、無手勝流を最も能く應用することは、一家の主宰者たり女王たる者の神聖にして至上なる天職である。

主として吾人の氣分を支配するものは、天候の如何と健康の如何とである、併し天候に關するものは一時的であるから、まだ取り扱ひ易いが、健康に關するものは永續的であるから、特に注意を要する、不健康な人の不愉快な陰氣な氣分は、單に氣分と言ふに止まらずして、其の人の氣質その者のやうになつてしまふ、故に甚だ仕末が悪るい、身體が不健康で、何時も蒼い顔をして居るやうな人は、常に其の氣分が鬱結して、沈み勝ちであるとか、またはイライラして居るとか、何れにしても人に不愉快を與ふることが一通りではない、蒼い顔をして居る人間は、唯だ夫れだけでも周圍の空氣を曇らせる、吾々は其の顔を見た丈けでさへ一種不愉快な感じを覺える、家庭内に斯うした人が一人でもあると、大いに家庭の幸福を殺ぐのである、主人公が持病でもあるやうな場合は勿論のこと、妻君が病身で毎日醫者通ひをして居るやうだと、家庭内が陰鬱になつて到底堪へ得るものでない、だからして家庭を愉快にする爲めに、吾人は大いに身體の健康に心懸けねばならぬ、また不健康な者をして出來得るだけ元

氣ならしめ、快活ならしめ、以て他人に不愉快を與へないやうにすることが大切である、人の顔さへ見ると、「何處が痛い」とか「此所が惡るい」とか言つて、病苦や不愉快を人に訴へるやうでは仕方がない、婦人は快活優美なところに價値があるのだから、特に注意を要する、單に蒼い顔をして居るだけでも傍の人達が弱らされ、元氣の無いと言ふことのみでさへ厄介なところへ、其の上に「身體の具合が惡くて何をやる氣もない」など言つて、寢衣を着て居たり、髪を亂して居たり、拭き掃除もせず周りを不潔にして居たりすることは最も宜しくない、之れ自分に對しても、他に對しても、徒らに不愉快を増す所である、然しながら不健康で氣分の勝れない夫や子供などを取り扱ふには、よく手ぬかりの無いやうに注意してやると同時に、猶ほなるべく自から氣を快活にして相手の心を引き立てるやうに努めねばならぬ、そして詰まらない相談をかけたり、くだらん事で氣を揉ましたりせぬことも大切である、要は家族の氣分の如何が、大いに家庭の幸不幸に影響するものであるから、吾々は自からも又た他に對しても、之れに就て充分警戒するところがなくてはならない。

第五章 人生問題より見たる人間論

注意作用には、有意注意、無意注意、非意注意の三通りがある、有意注意と言ふのは、狹義に於ける注意で、眞の注意である、自から意志を用ひて、故意に任意の對象に向つて心を専注するものである、無意注意と言ふのは、別段注意しようと試みなくとも、或る對象に自然興味が湧いて來て、知らず識らず心を傾むける作用で、たとへば名手の演説などを聞く場合に、何時の間にか夫れに心を奪はれてしまふ様なのは之れである、非意注意と言ふのは、自からは注意することを甚だ欲しないにも拘はらず、強迫的に注意せしめらるゝものである、假りに熱心に勉強などして居る場合に、隣りから三味線の音でも起こると遂ひ夫れに注意が奪はれて、いくら書物の上に注意しようとしても出來なくなる、之れ非意注意である、今この一々が家庭に及ぼす影響を述べて

見よう。

第一、有意注意——これ通常の所謂注意であつて、何事に對しても充分に心を止めることである、人に若し此の作用が無かつたならば、何事も理解出来ないし、何事も上達しないし、進歩も向上も全く無くなつてしまふ、萬事を能く理解し、よく取り扱ふには、第一に注意すると言ふ事が何より大切である、家庭を治めるにも然うである、何事にも能く注意して充分に心を配ることが無かつたならば、家庭は幸福にゆかぬ、たとへば一家の經濟を執るにしても、収入の如何をも考へず、唯だ漫然と金を取り扱つたひには、月末になつて困るのは當然である、或は客の來に場合に、無暗に氣前を見せて不相應な御馳走をするとか、或は大切な米屋の拂ひはそツちのけにして、詰まらぬ裝飾品や骨董品などを買ふとか言ふやうに不注意に金を取り扱へば、やがて負債を醸して一家の財政が順當に行かなくなる、また食物の上に注意を缺くの結果は、身體の虚弱な人に不消化物を食べさせるとか、高價な割合に滋養分の少ない食物を選ぶ

とか、または何時も同じ食物ばかり用ひるとか言ふやうな事になつて、爲めに健康を害したり、人に不愉快を興へたりするやうになる、それから衣服の事に不注意であれば、着物が幾ら汚れても洗濯もしないとか、着物が破れて居ても平氣で居るとか、單物を着るべき時に裕を着て居るとか、羽織袴を要する時に之れを缺くとか言ふ事になつて、爲めに種々の不都合を招くことになる、凡べて注意の行き届かない亂雑な家庭は、人に對して非常に不愉快を興ふるものである、家によつては人が行つても、煙草盆に火を取るでも無ければ、暑い時に團扇を出すでもなければ、履物を直して置く事もしないと言ふところもある、甚だ不都合なことだ、併し夫れで客を疎んじて居るのかと言ふと強がら然うでもない、否な大いに歓迎はして居るのであるが、唯だ客を遇する上に不注意なのである、綿密に心を用ひて居ないのである、男世帯の獨身者でもあれば兎に角、夫婦ぞろひで立派に家庭を作つて居ながら、萬事に不行届きであり、不注意であるのは、他の見る目も苦がしいものである、それから客として人

の家に宿つた場合、床に就いたとき枕もとへ煙草を呑むべきマッチも置いてなければ、湯を醫すべき水も置かれてない、朝起きて見れば洗面の水も取つて呉れなければ、何處で顔を洗つて宜いのだか夫れも分らないでまご／＼する、さて顔は洗つても今度は座るべき場所に困る、茶の間を見ても主人公は居ない、座敷は掃除をしたまゝ、何等の用意も無くがらんぼうになつて居る、仕方が無しに椽にでも立つて庭を眺めて居ると、今度は女中が椽の雑巾がけを始めて人を追ひ立てる、實に途方にくれてしまふ、夫れは實に忌やなものである、此の様な事は凡べて主人公なり主婦なりの不注意に基因すること、甚だ家庭の品位を落すものである、されば何事に就け、不注意と言ふことは宜しくない、殊に婦人の不注意なのは甚だ宜しくない、婦人は極く細かな點に能く注意が行き届くと言ふところに、男子の何うしても及ばない點があるのである、故に家事上の些末の事柄に就て、一々家長の注意を煩はしたり、指示を受けたりすると言ふことは、一家の主婦たる者に取つて大なる耻辱である、夫が家事上のことに細かく

注意を煩はしたり、妻君が外部のことに手を出したりするやうな家庭は、決して理想的のものと言ふことが出来ぬ、男子の餘りに細心なのは稱すべきことで無いと同時に、また婦人の大ざつばなのは賞むべきでない、婦人は飽くまで些末の事に注意が行き届いて、男子をして後顧の憂ひなからしむるのが本領である、細心の注意と言ふことは家政の一大要義である。

第二、無意注意——無意注意は有意注意の完成として考へられた時に非常の價値がある、家事上の些細の點に迄よく注意が行き届くと言ふことは、一々の事に有意的に注意を働かして居るやうでは出来ないのである、有意注意は努力的の意である、注意も努力的に行はれる中は、萬事に能く行き届くことは六ヶ敷い、わざ／＼注意作用を働かさうとしなくとも、何事にもひとりによく氣が付くやうに、注意力が訓練されて居なければいかぬ、何事かを見、或は思ふと、知らず識らず注意作用が働いて、ぬかり無く事の始末を付けるやうになつて來なければならぬ、そして之れは有意注意を

能く働かした永年の修養の結果達せらるゝものである、二十代の妻君と三十代の妻君とでは、注意の行き届き方が大分違つて居ることは、皆な人の経験する事實である、随分惻恰な妻君でも二十代では未だ何處かにぬかりがある、充分に注意が行き届きかねる、併し三十を越して、所謂中年増大年増の域に達すると、非常に注意が行き届つて来る、之れ畢竟永い間有意注意を働かした結果、習慣的に無意識的に注意作用が活動するやうになつたのである、故に無意注意が充分行はるゝ迄に有意注意を働かせねばならぬ。

第三、非意注意——非意注意は一般に甚だ有害なものである、非意注意は有意注意の反對に立つものだから其の敵である、一口に言へば有意注意と非意注意とは反比例するものである、有意注意の作用が充分に能く行けば、非意注意は従つて減する譯で、非意注意に多く煩はさるゝと言ふのは、有意注意が充分でないからのことである、有意注意の働かさへ確かりとして居れば、非意注意の累は自然少なくなる、針の手を頻

りに運ばす場合、いつしか注意は横に外れて、芝居のことなどを考へる、考へまいと思つても何うしても注意が其の方向へ向ふ、やがて、ふと氣がついて、あら此の着物は今夜の中に仕上げないと明日差し支へる、だから一生懸命にやらねばならぬと思ひ返して再び熱心に針の歩を進める、が暫くすると又た心は芝居の事に飛んで、けふ帝劇の初日の狂言は何であつたか知ら、誰れが出るのだつたらう、今日の新聞に出て居た筈だ、なご考へて何時しか仕事は開ツちのけに、新聞を引き寄せて演藝だよりを見る、見ると煩惱は益々高まる、觀劇の欲望は火の手を上げる、はて行つて見ようか知ら、併し之れを縫ひ上げてしまはないと明日困るし、さア何うしようなご、考へつゝ忌や厭やながら又た針を持つては見るが、心は何うしても仕事に乗らない、え、儘よ着物は明日の間に合はなくとも構はない、けふは之れから帝劇へ行つて見よう、遊ぶ時には遊んでも、やる時にやれば同じことだわなご、勝手な理屈をつけて、とうとう仕事の方はおぢやんになつて、芝居見物と出かけるやうになる、人々は果して此の様

な妻君に敬意を拂ふことが出来ようか、これでも能く一家の主婦としての任務を果すことが出来ようか、夫の話すことを口先きだけで返事をしながら心では夜會の事を考へて居たり、客に應對をしながら心では隣家の尺八に調子を合はせて居たりするやうであつたならば、それは甚だ不都合な妻君である、御飯を炊きながら口三味線に調子が乗つて遂に御飯を焦がしたり、料理をしながらお花見のことを考へて居て酔と酒とを間違へたりする様な事があつたならば、之れ一家の主婦として實に無責任極まるものである、或は子供の守をしながら飴屋の囃しなどに氣を奪はれて居て子供の危険に氣が付かなかつたり、或は小説讀みに魂ひが這入つて夫の歸宅に氣が付かずに居るやうでは、賢母と言ひ良妻と言ふことは出来ぬ、要するに注意すべきことに注意せず、いらざる事に心を奪はれると言ふことは甚だ宜しくない、勿論これは主婦たる人へのみ限つたものではない、主人公でも然うである、子供でも然うである、召仕でも然うである、家長が業務を處理する際に宴會のことを思つたり、番頭が帳場にあつて遊廓

のことを考へて居たり、女中が臺所の始末をしながらお芋を食べたいなご、考へたりするやうでは、萬事が不始末になるのは當然である、斯の如く非意注意が働くのは有意注意の足らん結果でもあり、また注意力の訓練されてない結果でもあるのだから、眞に快適の生を送りたく、其の生活を愉快ならしめやうと思ふたら、大いに之れを馴らして一事に注意を傾倒し得る習慣を養はなければならぬ、併し餘り一事に注意を凝らし過ぎて、他の要務を忘れてしまふやうでも困るから、其所は充分氣を付けねばならぬ。

第六章 精神分析學上より見たる人間論

感覺は心象の本源であり、單位である、吾人の精神中に最も早く入り來たるものは感覺で、然る後に知覺も記憶も概念も想像も判斷も推理も起つて來るのである、心の

本は實に感覺である、故に感覺の利鈍は大いに他の精神活動に影響する譯である、感覺が鋭敏であれば従つて他の精神活動も活潑明瞭となり、感覺が遅鈍であれば他の精神活動も従つて曖昧不活潑となる譯である、故に感覺は心理學上甚だ重要な事項の一つである、之れを最も普通に解釋すれば、學問上に於て外感覺と名づくる視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺、溫覺、筋覺及び一般感覺を意味するので、吾々の五官（耳目口鼻皮膚）に影響する外物の刺戟を感じる單純なる心の働きを言ふのである、即ち吾人の經驗の第一歩、意識の最終點で、今その理を左に碎いて詳言すれば、凡そ人は内部と外部の二つの世界を持つて居る、此の二つの世界は、吾々が現世に生れ來たる直ちに接觸を始め、其の接觸の度が重なるに隨ひ、精神の内容は漸次複雑となり、豊富となり、明瞭となり、博達となり、以て吾人の意義ある精神を形ち造るのである、然るに此の内外兩世界の間には介在し、直接に、また眞ツ先きがけに外部の世界を吾人に傳へる作用をなすものは何ぞやと言ふに、即ち五官と外部と

の接觸によつて起る物質的現象を、何の理解もなしに吾人が持つて生れた儘の作用で其の儘心に認むることを言ふのである、猶ほ又た心理學上感覺と言へば、以上の外部感覺と、吾人の内部感覺すなはち有機感覺との總稱で、有機感覺とは、骨、筋肉、腱、營養管、肺、血管、膀胱等の内部の機關に依つて感ずる感覺を言ふのである、ところで今その主なるものに就て、少しく語つて見よう。

第一、視學——視學の如何と言ふやうな事は、さまで家庭問題の上に關係があらうとは思へないやうだが、必ずしも然うでない、種々の事に相當の關係を持つて居る、たとへば衣服が汚れて居るとか、破れ目が出来て居るとか言ふ場合にも、若し視覺が鈍かつたならば氣が付かないであらう、また室内に塵があつても、器具に埃が掛かつて居ても、視覺が鈍ければ分りかねるであらう、之れ甚だ些細な事の様ではあるが、主人公が非常に潔癖の人でもあると、隨分その感情を害さないとはいへない、甚だ些細の事でも、時に依つては大いに癩癪の種となるものである、併し此等は未だ宜い

が、食器の汚れて居るのに気が付かなかつたり、食物の中に塵や髪の毛などの這入つて居るのに気が付かなかつたりして、平氣で之れを家長や客に進めるやうな事でもあると、夫れ等の感情を害すること決して少々ではない、人に依つては、茶碗に埃が付いて居たり、食物に塵が這入つて居たりすると、何うしても夫れに手を着ける氣になれないものがある、よし夫れ程では無くとも、餘り氣持の好いものではない、如何に山海の珍味を並べられても、一向御馳走で無くなつてしまふ、食物は單に食つて美味であると言ふばかりではなく、眼に見て美味さうであることが必要である、此等の點に就て充分注意を與へるには、第一視覺が不完全だと困る、客が來た際に、客の顔を見誤まつて、見當違ひの挨拶をして、大いに耻ぢ入るやうなことがある、さればと言つて、客の顔を何時もちろ／＼と睨め付けて、さて漸く其の何人たるかを認むると言ふやうでは困る、第一客に對して失禮なことでもあり、また往々にして客の感情を害する虞れがある、且つ居室の掃除とか裝飾とか言ふことにしても、視覺が鈍ければ

完全に行くものでない、何處かに抜かりを生じ易い、或は人の家を訪問した時に、下駄や傘などを間違へて、飛んだ失態を演ずることもあらう、斯うした譯であるから、視覺の利鈍と言ふことが家庭の上に及ぼす影響は、必ずしも小なりとは言ひ得ない、故に吾人は大いに視覺を損傷しないやうに注意する必要がある、また視覺の鈍いものがある時は、側から充分に注意してやる必要がある、女中などを選ぶ場合にも、眼の悪い者は避けるやうにしなければならぬ。

第二、聽覺——聽覺の如何も亦た家庭の上に重大な影響を與へる、人が呼んだ場合に、直ぐ返事をせぬとか、此方で言ふことが早速向ふへ通じないで、何度も答へ返されたり、言ひ返したりしなければならぬと言ふことは、皆な聽覺の遲鈍から來ることであるが、之れほど不愉快極まるものはない、甚だ癢に觸はるものである、女中などを呼んだ場合に早速返事がないと、實際それが聞えないのであつても、何うやら故意に返事をせぬのでは無いかと言ふやうな誤解を起し易い、のみならず何度も呼び返

して居る中には、自然聲が高くなる、家庭内に於て聲が高くなると言ふことは、よし夫れが必要上より起こつたものであつても、餘り結構なものではない、悪意で無くとも、何だか悪意らしく感ぜられる、それに高い聲を出すと、高い聲を出す其の事によつて、吾人の精神が多少昂奮せられる、何となく怒氣が催發せられる、之れは妙なもので、人が笑つて居るのを聞くと、唯だ譯もなく可笑しくなるし、人の泣いて居るのを見ると、何となく悲しくなるものである、开は人には暗示感性なるもの、存するにも依り、また表出作用と感情との間に強い聯合の存するにも依るのである、兎に角さう言ふ譯であるから、聽覺の鈍いと言ふことは、家庭の幸福を増す上に甚だ有害なものである、且つ物を言ふに、二度も三度も繰り返さなければ駄目だと言ふやうでは、急な場合に用事が間に合はない、従つて大きな聲が出るとか、面倒だから自分がやると言つたやうな具合で、何うも事が圓滿に行かない、相互に感情を害するやうになる、猶ほ聽覺の鈍い結果は、兎角邪推深くなる、人が笑ひながら話でもして居ると、

何か自分の悪口でも言つて居るのでは無いかと思ふことになる、また實際耳が遠いからと思つて油断して其の噂などをすると、存外つんぼの早耳で、悪いことだけが能く聞へたりして、いよ／＼面白くない結果を來たすことがある、此の様なことは、凡べて一家の幸福を傷つけるものである、其の他事を聞き誤まつて、間違ひを仕出かすことがある、或は主人の命令を聞き誤まるとか、或は主人の留守などに客の言ひ置くことを聞き誤まるとか言ふことの爲めに、あらぬ失態を招くことがある、また客に應對などをする場合にも、客の言ふことを始終幾度も問ひ返したりなどして、客の感情を害したりするやうなことがある、或は餘り問ひ返すのも悪るいなど、遠慮する結果、分らぬことに宜い加減の返事をして、相手に奇異の感を抱かせたりすることがある、或は人の實際言つたことも、自分には聞へなかつた爲めに、言はないと争つて見たり、言はないことを、言つたと主張して見たりして、争論を惹き起こすこともあらう、何れにしても聽覺の遲鈍と言ふことは、甚だ不便なものである、故に耳の病氣があつた

場合には直ちに醫者に見せて、相當の治療を加へることを忘れてはならぬ、また耳の遠い人は、なるべく能く氣を付けて人の話を聞くようにし、且つ詰まらぬ邪推などはせぬやうに心掛けねばならない、猶ほ又た周圍のものは、耳の遠い人に對して、徒らに高い聲を張り揚げるよりも、なるべくはつきりした物の言ひ振りをするやうに努めることが肝腎である、そして又た漫りに彼れの缺點を罵つたり、或は其の邪推を招き、誤解を惹き起すやうな態度に出でないやうに、充分警戒せねばならない、殊に來客の際などに、聞えぬからと言つて、妻や女中などに餘り大きな聲で物を言ふことは、なるべく差し控へた方が良しと思ふ、然うでないも、何うやら客に不平でもあつて、家人に當り散らすのではないかと言ふやうな誤解を與へる虞れがある。

第三、味覺——凡べて食物の味は、味覺によつて判斷せらるゝ譯であるから、料理は主として、此の感覺の力に待つのである、食物が吾人の氣分を支配することは非常なものである、デ不味い物を食はさるゝと、甚だしく不愉快になる、のみならず何だ

か物足らぬやうな氣持ちがして、落ち付いて仕事が出来ないことさへある、終日の勞苦に心身綿の如く疲れて歸宅し、夕餉の食膳に向つたとき、若し其の食物が頗る美味であつたならば、其の愉快や如何であらう、之れに反して若し其の食物が不味かつたならば、其の不愉快や如何であらう、苦がい顔をして無理に詰め込んで、遂に充分食ふことが出来ない、何だか物足らなくて、此の儘寝ることは出来ないと言ふやうな感じがする、そこで夜中に外出して、何處かの料理屋にでも飛び込むと言ふことになる、其の場合若し痲癢持ちの人でともあれば、こんな物は食へないと言つて、妻君を怒鳴り付けるかも知れない、斯うした事から、随分夫婦喧嘩の起こる事が世間には少なくない、食物の如何は單に氣分を支配するばかりではなく、實際吾人の健康に偉大なる關係を持つて居る、食物の材料そのものは好くとも、若し料理の仕方が下手で、食つて見て美味でないと言ふ場合には、矢張り生理的缺乏を癒やすだけの量を攝ることが出来ない、また不味いと思つて食へば、従つて消化機關の働きが鈍るから、無理

に腹へ詰め込んでも夫れだけの効果がない、食物不消化の結果、却つて健康を害する、故に食物の材料その物は同一であつても、それを美味に食ふと不味く食ふことでは、生理上に頗る違つた影響を與へるのである、食物の材料は別段に精選されて無くとも、料理が巧みに出来て、それを美味しく食ふことが出来さへすれば、従つて多量に攝ることも出来、消化作用も活潑に働くから、身體の健康に非常の効果がある、だから一家の主婦たるものは、大いに此の點に注意して、同じ食物をもなるべく美味しくして食はせることを心懸けねばならぬ、然るに食物の料理は、第一吾人の味覺に負ふものである、若し味覺が不完全である場合には、食物の本當の味を出すことが出来ない、之れは勿論分りきつた事である、別に味覺が不完全と言ふのでは無くとも、其の人の體質に依つて、鹹口（からくち）であるとか甘口（あまくち）であるとか言ふ事もある、それ故に家事の當局者たる主婦は、常に注意して味覺の練習をなし、甘口の人には此の邊が適するとか、鹹口の人には此の邊が適するとか言ふ呼吸を、よく吞み込んで置く必要がある、また自分は甘口の方だから普通の人には此の邊が宜からうとか、自分は鹹口の方だから何の邊が萬人向きであるとか言ふ點も、常に充分注意して研究して置くことが大切であると思ふ。

第四、嗅覺——嗅覺も亦た料理の上に偉大な關係がある、味覺と相待つて食物の良否を判断する、殊に食物が腐敗して居るか何うかを判断するには大切な機關である、嗅覺が鈍つて居ると、食物の腐敗し掛かつて居るのも知らないで、誤まつて人に進めるやうなことがある、また御飯の焦げ付くことや、其の他煮物の焦げ付くなどが一向に分らぬ、夫れから何か爐や火鉢にくばつて居るのなども分らないで、甚だ危険なことがある、或は又た何か惡臭を放つ物があつても分らなかつたり、蒲團などが汗臭くなつたり、かび臭くなつたりして居ても、一向に氣が付かなかつたりすると言ふやうな譯で、衛生上甚だ有害である、故に嗅覺が鈍つて居る場合には、鼻に何か病氣があるから、早速治療を加へる必要がある、それに鼻が惡いど、腦に非常な惡

影響を與へて、記憶力が鈍つたり、理解力が鈍つたりする、また之れが氣分を支配することも非常である、故に子供などに就て、鼻の悪るいことや、嗅覺の鈍つて居ることを發見したやうな場合には、早速充分の注意を加へなければならぬ。

第五、觸覺——觸覺は價值の上から言へば最も劣等なものであるが、併し必要の上から言へば頗る重要缺くべからざるものである、視覺及び聽覺は、所謂高等感官に屬するもので、價值から言へば高いが、併し必要上から言へば觸覺ほどに切實なものではない、吾人は視覺を失つても亦た聽覺を失つても生存は出来る、併し觸覺を失つては生存が出来なくなる、自分の足が何處に觸はつて居るか、身體が何處に倚り掛かつて居るか、手が何處に觸れて居るか、或は地上に寢て居ても、蒲團の上に寢て居ても、少しも夫れ等が分らないとしたならば、到底生存を全うすることは出来ない、だから觸覺は吾人の生存に取りて頗る大切なものである、けれども都合の好いことには、全然觸覺の無いと言ふやうな人は、先づ世の中に無い、病氣の爲めに或る局部だけが觸

覺を失ふやうな事があつても、全身の觸覺を失ふやうな事はないから、まあ心配はない、併し觸覺の利鈍は人によつて多少ある、ちよつとは分らんが相當にある、デ觸覺の鋭敏な人は、事物を眼で見たり、耳で聞いたりするよりも、手足を事物に觸れることに依つて、それに就ての眞認識を得る、また觸覺の鈍い人は觸はつて見たのでは能く分らぬ、何うしても眼で見なければ分らぬと言ふ人もある、故に觸覺の鈍い人は、器物などに塵埃が付いて居ても、一向それを苦しめない、或は自分の着物が汚れて、垢が澤山に着いて居ても、存外平氣である、少しも氣にしない、こんな人は、木綿の着物を着ても、絹の着物を着ても、別に異なつた感じもしないと言ふ手合で、甚だしいパンカラ黨である、蚤が居ても虱が居ても平氣の平三といふ先生方である、斯う言ふ手合は、漆の剝げた椀でも平氣で物が食へる、茶碗の外側に何か付いてねば、くして居ても、少しも氣に止めない、従つて客に對する場合にも、夫れ等の事に就て甚だ無頓着である、嘗に夫れ等の事はかりではなく、何事に就ても一向に注意しない、自

分は敷居の上に坐つて居ても荒蕪の上に坐つて居ても平氣であると言ふところから、自然客に對しても、座蒲團を出さうともしなければ、客が疊の縁りに坐つて居ても、「こちらへ御寄りなさい」と一言いふ氣にもならぬと言ふやうな有様である、勿論中流以上の社會には、之れ程の鈍物はあるまいが、少なくとも夫れに近い人が、必ずしも無いとは言へぬ、此等は主として觸覺の遲鈍に基くのである、此の様な人が居たのでは、家庭の締りが付かない、そして又た觸覺の鈍い人は兎角不潔になり易くて困る、椽などに砂塵がごつさり上がつて、歩く時にぢりぢり言つても一向苦にせぬ、苦にせぬから掃除する氣にもならんと、然う言つた譯である、従つて衛生上にも甚だ宜しくない、若し一家の主婦がこんな風であれば、其の家は不潔で仕方が無くなる、不潔と言ふことは、吾人の氣分を不愉快にするものであり、また衛生上甚だ有害なものである、従つて家庭から、スキートな、コンフラーダブルな空氣を、追ひのけてしまふ、大いに注意を要することである。

第六、溫覺及び筋覺——此等に就ては、さまで言ふべき程のこともないから、述べて置く、そして又た内部感覺すなはち有機感覺に就ても、別に言ふべき程の必要もな、(イ)筋肉には壓覺及び痛覺を感じ、(ロ)關節——骨の繼ぎ合せ目——或は骨窩——骨の凹んだ所——には又た壓覺の感を生じ、(ハ)腱には緊めるやうな又た引ツ張るやうな感覺を有し、(ニ)營養管には、咽喉の頭部より渴の感覺を、胃よりは饑餓の感覺を、口より胃に通ずる部分からは嘔吐の感覺を得、(ホ)肺には、閉塞と緊縮の感覺あり、(ヘ)血管には、耳鳴り、痒感——かゆい感じ——刺疼——ちく／＼痛むが如き——の感覺あり、(ト)膀胱には、恐怖の感、腹中を攪亂せらるゝが如き感覺あり、素より开は唯だ大體に於て其の一般を指示せるに過ぎぬ。

元來外部の感覺たる五官は、有機的身體の一部で、即ち物質より結構組織せらるゝものであるから、外部の世界が之れに接觸すれば自然その物質に原子の變換、分子の震動と言ふが如き化學的乃至、物理的變化を惹起し、其の變化の影響は、直ちに精神

に傳達の機能を以て身體全部に張り渡せる神経纖維（神経纖維とは通俗に言へば物の接觸を電氣的に感應する作用を以て身體内部至る處に蜘蛛の巣の如く張り渡せる纖維を稱し、更に亦た斯の如く外物の接觸が神経纖維に感應することを刺戟と言ふ）に傳はり、神経纖維は更に之れを吾人の精神の本部とも言ふべき神経中樞に傳ふのである、併し單に之れだけでは、唯だ神経が昂奮したと言ふ迄にて、未だ吾人の所謂感覺と稱するものはならぬ、然らば如何にして之れが感覺と稱するものになるかと言ふに、即ち其の傳達されたる外部の刺戟を、吾人の精神が認むると言ふ一事である、之れを要するに感覺は、吾人が一切知識の單位となるものであり、また吾人の日常生活に重大な關係を持つて居るものであるから、其の不完全は家庭生活の上にも、甚だ有害な結果を齎すものである、故に吾々は出來得る限り感官を練磨し、また感覺の一部の短は之れを他部の長に依つて、充分に補つて行くやうに努めねばならぬ。

第七章 文學上より見たる人間論

聯想作用と言ふのは、觀念相互の間に一つの聯合を形成して、一方の觀念が識域に現はるゝや、之れに伴つて忽ち他方の觀念の現はるゝやう、常習的傾向の生じたものを言ふのである、たとへば吾人が月の事を考へると、夫れに連れて忽ち太陽とか星とか言ふものを念頭に思ひ浮べる、煙りを見れば、直ちに火を念頭に思ひ浮べる、嬋妍たる花を見れば、直ちに婉嫺たる美人を念頭に思ひ浮べる、故郷のことを思へば、夫れに次いで父母のこと、村の小學校のこと、其の小學校の教師のこと、自分の小學校時代のこと、友達と螢狩りに行つた時のこと、其の折り過まつて川に落ち込んだこと等とそれから夫れへは絲の如く聯想は走つて、殆んど盡くるところを知らない、之れ凡べて觀念聯合に基く所謂聯想作用である、吾人の觀念は、皆な斯かる聯想作用に依

つて働いて居るのである。

斯かる聯想作用は、人によつて活潑な者と、遲鈍な者がある、聯想の活潑な人は、何事に對しても思ひ付きが早い、人の言ふ事など、一々細かに聞かなくとも、其の顔色を見た丈で、早くも其の意を悟ると言ふやうなところがある、然るに聯想の遲鈍なものになると、人から細かに一々話されても、なかなか會得が出来ない、即ち悟りが遅い、「一を聞いて十を知る」と言ひ、「眼光紙背に徹す」と言ふ、皆な聯想の活潑な者に見るところである、之れに反して十を聞いて一しか知らぬと言ふやうな人間は、凡べて聯想の遲鈍な人である、デ聯想にも種々ある、文學者とか詩人とか言ふ者の聯想は奇抜なもので、或る意味に於ては常規を逸して居るものであり、且つ非實際的のものである、また科學者とか、哲學者とか、大發見家とか、大發明家とか言ふ人々は、皆な異常の聯想力を持つて居るものである、たとへば林檎の落ちるのを見て、引力法の大事實にまで聯想が走つたり、鐵瓶の蓋が湯氣の爲めに動くのを見て、蒸汽機關の

運用を考へ出したり、蜘蛛の張つた巢を見て、吊り橋の工夫を思ひ付いたりすると言ふやうな事は、常人には到底出来ないことである、今吾人は此等異常なる聯想作用に就ては語らない、極く日常卑近の事柄に就て、或は實際的業務の上に就て、聯想作用を見、それが家庭生活の上に何んな影響を與へるかを見れば足りる。

常人に向つて非凡な聯想を求むることは出来ない、また求むる必要もない、併し自分の關係して居る實際の業務に就て、吾人が日常接觸するところの卑近なる事柄に就て、活潑なる聯想力を有することは、甚だ望ましいことである、之れの無い人は機敏な働きが出来ぬ、他と競争する場合に必ず負けてしまふ、此の種の聯想力の乏しい人は、所謂氣の利かない人で、實際の仕事をさせて一向役に立たぬ、へまな事ばかりやつて居る、家庭に於ても然うである、妻君の氣の利かないのは以ての外のものである、良人の前で良人の忌やがることをやる、愚にも付かぬことを言ふ、良人は忌やな顔をする、忌やな顔をされても御本人は一向に氣が付かぬ、平氣で良人の忌やがる事をや

つたり或は口にしたります、良人が堪えかねて廢せとか止めろとか言ふまでは一向氣が付かずに居る、良人の惡るい顔をして居るのは何の故だか、なか／＼夫れが合點ゆかない、之れ甚だ氣の利かない妻君である、其の結果は、良人の不機嫌を醸して、家中を不愉快にしてしまふ、甚だ宜くないことである、たとへば良人が頻りに讀書をして居る折、偶々子供が烈しく泣き出す、すると妻君は書齋の隣室邊で、憚りも無く大聲を出して、子供を叱つたり、子守唄を歌つたりする、子供の泣き聲だけでも充分であるのに、妻君までが手傳つて、一層八釜しくする、實に溜まつたものではない、然うした事が良人の勉強の妨げになるとは、一向に氣が付かないのである、それどころか「ちよいと貴郎、そこの竿に掛かつて居るおしめを持つて来て頂戴」など、遠慮もなく言ふ、自分では別に惡るい氣は無いのであるが、斯う言ふ事が、良人の學究の何れ程邪魔になるかと言ふことに、聯想が至らないのである、そして良人に不快な思ひをさせる、之れ又た氣の利かない妻君である、假りに又た子供が腹痛などの爲めに

泣き出したりするやうな事があると、母は乳が呑みたいのだらうと思つて、頻りに乳を與へようとする、子供はかぶりを振つて、いつかな承知をせぬ、母は故なくして駄々をこねるものと思つて、しまひには之れを無暗に叱り付けたり、果ては子供を打ち抛擲したりする、之れ迂濶な母である、同時に又た無慈悲な母である、猶ほ又た假りに客と話をして居て、思はず何か客の氣に障はることを迂濶に言ふ、客が忌やな顔をして、口をつぐんでしまつても一向氣が付かずに、客の厭やがることを平氣で語り續ける、遂には客の機嫌を、全く損じてしまつて、漸くにして之れはしまつたと氣が付く、之れ人と交際するの資格なき婦人である、其の他、人の前で迂濶に良人の秘密を語つたり、相手の友人の惡口を言つたりするが如き、何れも皆な聯想の鈍い結果である、夫れが爲め時として恐るべきことがある、取り返しが付かぬことがある、たとひ惡るい氣でやつた事では無くとも、後に全く申譯の無いことがある。

聯想の活潑でない人は、兎角一事に没頭し易くて困る、現前の事柄に逆せ易くて困

る、蓋し一事に接しては唯だ一事を考へる外、他を聯想することが出来ないからである、婦人が一般に逆セツばいと言ふのは、聯想が縦横でないからである、もつとも逆セツばいから、聯想が不活潑になるとも言ひ得よう、何れにしても一事に逆せてしまつて、聯想が働かなくなると言ふことは、危険なことである、其の著しい例が近松の作「堀川波の鼓」にある、ちと穏やかで無いかも知れないが、理論を説明する爲めの一例として、別に差し支へもあるまいから、茲に其の一齣を引用する、——女あるじの年若き、良人は永の吾妻の留守、心慥かに持つ爲めと、一つ過ごする酒好み、亂れぬ顔もほかつきて、重たき頭り撫で櫛や、向ふ鏡に餘情あり、殿待ち顔の夕べかな、同じ家中の合ひ役人、磯邊床右衛門は病氣とて、江戸供ゆるされ在國せしが、下人も連れず潜り戸あけ、「御見舞ひ申す」とフツと入る、お種はハツと鏡をのけ、「忠太夫は今朝ほどより出られ、留守にて候」と、言ひ捨て、入る所を抱き留めて、「コレ申し、お留守を存じて參るからは、御親父に用は無し、そもじ様ゆる惚れ舟、人目の岩に波

せきて、碎くる磯邊床右衛門、今年お江戸を勤むれば、御加増あるは知れた事、武士の立身振り捨て、虚病を構へ願をあげ、御國に止まるも皆な君ゆると思し召せ、病氣も嘘で嘘ならず、戀が病ひのお種様——「え、嫌やらしや面倒や」と、振り放して退きけれども、身の毛も立つて怖ろしく、はぢく、慄うて居たりしが、「こりや侍畜生め、彦九郎殿とは懇ろなり、人間の道に反くと言ひ、御家中の後ろ指、殿様のお耳に立たば、身體の破滅となるが知らぬかや、小倉彦九郎が女房ぞ、侍の妻なるぞ、推參な事をして、必ず我れを恨みやるな、沙汰はせまい、サア歸りや」と、苦がくしくも言ひければ、「イヤ——、人の譏りも身の耻辱も、思うて仕舞ふて上の事、よし御承知なきからは、こなたと茲で刺し違へ、上方に流行る心中と、國中に沙汰をさせ、俱に耻を晒さんと、覺悟を極め來たりしよ」と、刀を抜いて胸倉とり、「どうぞ——」と威しける、女心の誠と思ひ、犬死にと言ひ無き名を取るも口惜し、誑ぶらさばやと分別して、「ム、これは眞實か」オ、殿様の御勘當うけ、歩に首打たる、法もあれ、

偽りはない」と言ふ、「さても嬉しき御心底、何しに無下に致すべき、されども茲は親の家、今戻られては如何なり、明日の夜にても我れ等が内へ、そつと忍んで下されなば、打ち解け思ひ晴らさう」と、しど、打つてぞ誑ぶらかしける、——襖の彼方に源右衛門、鼓を打つて聲をあげ——謠——邪淫の悪鬼は身を攻めてく、劍の山の上に戀しき人は見えたり、嬉しやとて攀ち登れば、劍は身をそほす、磐石は骨を碎く、こは开も如何に恐ろしや、なう怖ろしやく——「人が聞いた、そりやく」と、脅されて床右衛門、「今のは何も皆なぢやれぢや、嘘ぢやく」と言ひ捨て、走つて表へ逃げてけり、無慘やお種は氣も据はらず、「羞かしや京の客」、今の荒まし聞き給ひ、欺して言ふとは开も知らず、心の蔑しみばかりかは、家中一ぱいする人の、世間の沙汰を如何せん、胸のたくつき堪へかねて、下女呼び起こし酒の裏、表も閉めてもう寝よと、獨り酒汲み憂さつらさ、忘るゝ内も忘れぬは、江戸の良人の事ばかり、涙にいと臙夜の、月さす椽に人音す、「ヤアこれは源右衛門様、お前は那處へお越し」と言

へば、「イヤ女中ばかりは遠慮に存じ、罷り歸る」と立ち出づる、袖をひかへて、「さてはお前は今の事、お耳に入れたるかや、勿體なや恐ろしや、彦九郎と言ふ男を持ち、眞實に言ふべきやうは無し、當座の難を逃れんため、欺して申した分の事、御沙汰なされて下されな、ひとへに頼み参らす」と、手を合せて泣きければ、源右衛門も詮方なく、「いや聞いたでもなく聴かぬでもなく、餘り傍から聞きにく、謠ひをうたひ紛らしたり、申しても安大事、拙者は他言いたすまいが、雖は袋と外よりの、取り沙汰は存せぬ」と、振り切り出づるを縄りとめ、「さりとは酷い御詞、御身様も若い殿、我れも若い女の身、實の斯うした事きいても、隠しかくすは世の情け、此の分で行なせては、私心おちつかず、言ふまいとある固めの盃、取り換はして」と銚子を取り、濃い茶茶碗に丁とつぎ、つツと干して又た引き受け、半分呑んで酌しければ、「こはめづらしいつけざし」と、押し戴いて呑んだりけり、お種も餘程酔ひは來る、男の手をしつかと取り、「コレこな様、とても主ある者のつけざしを、参るからは罪は同罪、何事

も沙汰する事はなるまいぞ」と詰めければ、「いやはや斯かる迷惑」と、飛んで出づるを抱きとめ、「え、餘んまり戀ひ知らず、扱もしんきな男や」と、——思はず誠戀となり、「サア此の上は今の事、沙汰はならぬが合點か」「お、く、餘所かと思へば我が身の上、此の事を隠さいで、なんと……」——稍や更け渡る時しもあれ、父の成山忠太夫、下人も連れず立ち歸り、門の戸あらく叩いたり、お種はつゝ耳に入り、酒の酔ひ醒め目も覺めて、——南無三寶淺ましや、床右衛門めが不義の沙汰、世間の口ごめせん爲めに、わざと戯むれ仕懸けしまで、慥かにそれは覺えしが、其の後は酒に酔ひ、夢うつゝとも辨まへず、酒を禁まれと常々に、妹が異見を聽き容れず、——身を汚したか淺ましや、女の罪の第一にて、未來は愚か此の世の耻、親兄弟まで名を捨つる、身を如何にせん悲しやな、夢になつても呉れよかすと、咽せび上げてぞ泣き居たる、(以下略)——これは女房お種が良人の留守を預りながらの失態、勿論彼の女は女の道も心得、又た平素は決して不貞の妻ではなかつたのであるが、女心の淺ましさに、ふとし

た事より不義の棲かさねをしてしまふ、併し其の行き方を見ると、一時のばせて、恐るべき結果に對する聯想の鈍つて居た爲めである、之れが爲めに彼の女は、遂に开が良人の手に懸かつて、悲惨なる最後を遂ぐるに至つた、同じく近松の作「鎗野權三重帷子」の女主人公おさゐの憐れむべき末路も、悋氣の爲めとは言ひながら、又た自己の位置、境遇、行爲等に就て、適當に聯想の働かなかつた結果である、聯想の鈍いと言ふことは、實に恐るべきことである。

聯想が活潑だと、思ひ付きと言ふことがある、ちよつと客が來ても、手不足であり、何等の用意も無くて、御馳走が充分に出來ないと言ふやうな場合にも、思ひ付きのよい人は、ちよつとした材料で、風の變つた珍らしい料理をして、客を喜ばせる、或は又た客を待遇する場合にも、ちよつと面白い話を仕出すとか、面白い遊戯を考へ出すとかして、對手を飽かしめない、猶ほ又た室内裝飾などをやるにしても然りて、思ひ付きのよい人は、さう別に凝つた道具を用ひずとも、ちよつと風の變つた飾り方をす

る、何處か氣の利いた、面白味のある行き方をする、凡べて此等は思ひ付きの悪い人には出来ないことである、故に思ひ付きのよいと言ふことは、家庭を愉快ならしむる上に、且つ快適の生を送る上に、甚だ必要なことである、然るに思ひ付きの無いと言ふことは、兎角事柄を單調にし、無味乾燥ならしむるものである、されば一家の主婦が、思ひ付きのよい人であると、悪い人であるとは、家庭内の様子が大いに變つて来る、何時見ても床の間に同じ軸物が掛かつて居たり、同じ花が挿してあつたりするのは、餘り結構なものでない、四季折々の思ひ付きを出して、適當な軸を掛け、適當な花を選んで、そこに一種の趣向を現はすことが望ましい。

殊に病人などを取り扱ふ場合には、餘程思ひ付きのよい人でないと、病人に充分の満足を與ふことが出来ない、病人だの子供だのと言ふものは、いづれ勝手氣儘なものであり、自分の事ばかり考へて、人の事などは考へて居る餘裕の無いものであるから、彼等に對しては、はたから餘程注意をしてやらぬと、其の機嫌を損するものであ

る、誰れでも病氣をした事のある人は、經驗するところであらうが、病氣で身體の不自由である場合に、傍に付き添つて居る看護人の氣の利かぬ程、不愉快でもあり癩癩の起こるものはない、之れに反して看護人が、非常に能く氣が利いて、こつちの思ふ様にして呉れるのみならず、いろ／＼と思ひ付きを出して、病人の喜ぶやうな事をし、て呉れると言ふとき程、眞に愉快で又た有りがたく感ずることはない、故に一家の主婦たる者は能く斯う言ふ點に注意して、其の聯想を活潑に働かし得るだけの、資格を具へて居ることが切要である、併し餘り聯想の活潑すぎる所謂才華煥發と言ふやうな婦人は、また一家の主婦たるに適しない、彼の女は往々傲慢にして、人を輕侮し易く、虛榮心強く、そして所謂平凡ざらひである、何でも一つ奇抜なことをやつて、人の意表に出でようなどゝのみ考へる、其の結果かへつて一家の爲めに面白く無いことを招くやうになる、我が清少納言の如きは、即ち聯想の餘りに活潑すぎる所謂才女であつた、それと同時に又た甚だ婦徳を缺いて居た、家庭的には最も不適當な婦人であつた、

だからして、男子が妻を選ぶ場合にも、此の種の婦人は、断じて之れを避けなければならぬ。

第八章 善の研究より見たる人間論

記憶には把住、再現、再認の三條件が具はつて居る、把住と言ふのは、一旦経験したことを、頭腦の中に永く保留して置くことである、再現と言ふのは、其の保留せるところを、再び識域上に喚起することである、再認と言ふのは、其の再現せるところを以て、過去に経験したものである、過去に経験せるところを、今再現したのである、と認めることを言ふのである、此の三つが具はつて、始めて記憶と言ふことが出来る、普通の人は、唯だ把住だけ、或は之れに再現が加はつたものだけを以て、記憶と思つて居るが、それは誤まりであつて、記憶と呼ぶるには、再現せるところを、之れは

嘗て経験せるところを、今また経験して居るのであると言ふ、再認の感が伴はねばならぬ、それでなければ單に想像に止まらることになる。

さて記憶は、人生に甚だ重大な關係を持つて居るもので、他の動物に比して、實に異常なる記憶力を持つて居ることが、人類をして爾かく進歩發達せしめ、優勝の地位を得せしめた所以の一つである、記憶は過去の一切経験を保留せしむると同時に、また將來の行路を決定するものである、僧侶の子は僧侶になるとか、商人の子は商人になるとか、大工の子は大工になるとか、農家の子は農家になるとか言ふやうなことは、皆な過去の僧侶的経験、商人的経験、大工的経験、農家的経験の記憶が、遂に人をして、其の將來を同一の方向に決定せしむるものだ、職業を始終變化することの悪いと稱せらるゝ所以は、將來活動の基礎となるべき一團の記憶群を、始終棒に振つてしまふ事になるからである、寺に生れて育つた者は、僧侶として種々なる経験の記憶が、長い間かゝつて、頭腦の間に堆積して居る、それが聽て僧侶としての生涯を送る爲め

の基礎となるのである、然るに若し中途で商人にでもならうと企てると、今度は新たに、商業に關する記憶を堆積せねばならぬ、さて苦心の結果、夫れが相當に出來か、つた頃に、今度は又た醫者にならうと企てる、すると又た新たに醫者としての記憶を堆積せねばならぬと言ふ具合で、何事も中途はんばになつてしまふ、それが爲めに、何事にも成功が出來ないと言ふことになる、だから職業を漫りに替へることは甚だ不利である、そして記憶は又た人格一致を説明する唯一のものであり、其の他凡べて自己の行動を機敏ならしむるものであり、また老年期に達しては追憶の種子となるものであり、何れにしても重大なる人生的意義を持つて居るものである、今記憶が家庭の上は何んな關係を持つて居るかを述べて見よう。

家庭を整理するには、夫れに必要な知識を相當に持つて居なければならぬが、併し實際に家庭を作つて見ない前から、其の細目に亘つての、綿密な知識を具へて居ることとは、何人にも六ヶ敷い、細かなことに就ては、實際に家庭を整理して見て、相當の

經驗を積まなくては分らぬ、が併し夫れ等の細目に關する知識を得るの遲速は、大いに記憶力の如何に關係する、一度その局に當つて見て覺えた事は、永く忘れずに居て、後日同一の事に再會した時に、早速應用し、或は參考と爲すと言ふ様に出來れば、家事を處理する上に非常に便宜である、故に先例を記憶して居ると言ふことが大切である、始終同一の事に接して、しかも其の度び毎に人の助言を仰いで居ながら、猶ほ自分の記憶を得ることが出來ないで、又た同一の事にぶつ、かるとマゴつくと言ふやうでは困る、たとへば他家に何等かの御祝ひがあるとする、其の御祝ひには、或る一定の品を、一定の法式に據りて送るが常であるとする、併し始めての經驗には、何うして宜いか分らないから、人に聞いて見る必要がある、けれども一度び聞いた以上は、もはや再び聞く必要の無いやうに、記憶を充分確かにして置く必要がある、其の様なきのある度び毎に、同じ事を始終聞いて居るやうでは困る、また或る物を料理するが如き場合にも、斯くかくする事が最も良いと言ふやうなことを、人から聞く事でもあ

つたならば、夫れを忘れずに居て、必要の場合に早速用ひることが大切である。

また良人が交際して居る人で、屢々自分の家を訪づれた事のある人の顔を忘れたり、名を忘れたりすると言ふやうな事も、甚だ宜しくない、訪ねるたびに、「お見それ申しましたが、どなたで御座いましたか」など、言はれるのは、訪ねる方に取つて、餘り氣持ちの好いものではない、人の顔を忘れたり、名を忘れたりすると言ふ事は、一面から言へば其の人の存在を認めぬことで、甚だしき侮辱である、たゞひ一度ぐらゐしか會つたことが無くとも、馴れ／＼しく其の名を呼び掛けられるのは愉快なものである、(但し相手が自分よりも目下の者である場合は別であるが、それにしても自分から見れば身分の下の者に對して恭謙讓である事は人格者として奥ゆかしい)そして交際上これは甚だ必要なことである、されば彼の支那の張巡は、自己の部下數萬人の姓名を一々よく記憶して居て、部下に物を言ひ、事を命ずる場合に、一々その名を呼びかゝるを常とした、部下の者は、大將が自分のやうな者を知つて居られると言ふところ

から、非常に夫れを有りがたき事に思ひ、よく大將の爲めに全力を捧げたので、張巡は大いに手腕を振るふことが出来たと言ふことである、名を記憶して居ると言ふことは、幾分相手を念頭に留むることで、素より其の人に取つては氣持ちの好いことである、故に自分の家へ一度でも足踏みをした様な人の顔や名は、よく之れを記憶して居なくてはならない。

猶ほ又た良人の言ひ付けを忘れたり、良人の留守に客の言ひ置いて行つたことを忘れたりしては宜しくない、それが爲めに、飛んだ間違ひを仕出かすことがある、其の他年中行事なども、忘れないやうにしなければいかぬ、たとへば子供が遊びから歸つて来て、「おかあさん、お隣りの花ちゃんの内では、お節句だと言つて、お雛様を飾つたわ、内ではなせお雛様を飾らないの」など、不審がるのを聞き、「あゝさう／＼」など、始めてお節句なのに氣が付くやうでは困る、もつともお節句を忘れて居る程のうつけもマサカあるまいが、ちよつとした事になると、随分忘れぬとも限らぬ、それか

ら父の死んだ日とか、母の亡くなつた日とかを忘れて居ると言ふやうな事も、甚だ宜しくない、祖先に對して不敬である、殊に氣を付けねばならぬことは約束ごとである、約束を忘れるのは以ての外である、けふ午後には誰れが来る約束であるとか、人と何處へ行く約束であるとか、或は何日まで之れ／＼の事をしてやる約束であるとか言ふ場合に、それを忘れてしまつて、心ならずも破約すると言ふやうなことは、大いに戒しめねばならない、約束を破ることは、他人に取つても自己に取つても、非常な迷惑を醸すものであると同時に、また甚だ自己の信用を落す所以である、いつ幾日に訪ねて行くとか、幾日何時に訪ねて來るとか言ふやうな約束をして置いて、其の日になつて萬障繰り合せて行つて見ると、先きが居なかつたり、また此方で待つて居ると其の日に來なかつたりすることは、人の感情を害すること甚だしいものである、常に感情を害するばかりではなく、それが爲めに他の用事を後へ廻したり、料理の準備などをした場合には、迷惑を蒙ること一通りではない、後になつてから、「つい忘れて」な

どの申譯は何の役にも立たぬものである、デ細かな事に關して記憶を助ける爲めには、日誌をつけて置くことが一番よい、年中行事のやうなものは日誌によつて分るし、命日とか誕生とか言ふ類のものは、一年の始めに於て日誌に書き込んで置くとか、或は表にして室へ貼り付けて置けばよいことである、其の他自分の學び得たこと、行つたこと、思ひ付いたことなどは、凡べて之れを日誌に書き込んで置けば、記憶を助ける上に、非常に便利である。

次に考へなければならぬのは、子供の記憶に就てある、子供を立派な人間に仕立て上げようとするには、第一子供に惡い記憶を與へないことが大切である、素より子供は是非善惡の差別なく、何でも能く覺えて夫れを眞似するものである、女中や書生などが詰まらない事をして見せると、直ぐに夫れを眞似する、活動寫眞を見て來れば映畫の人物の動作や辯士の説明振りなどを眞似する、芝居に行けば役者のしぐさを覺えて來て直ぐに眞似する、動物園に行けば猿や熊などの奇異な習慣を覺えて來て之

れを真似する、これが子供の本能である、門前の小僧習はぬ經を讀むと言ふが、實際その居る境地によりて、子供の覺えることは大いに變つて來る、お寺の傍に居れば僧侶のやることを覺える、學校の側に居れば學校のことを覺える、花柳界の近くに住めば花柳界のことを覺える、孟母三遷の教へも、げに這般の事實に基いて居つたのである、故に親達は、其の子を教育するに就て、子供に惡い記憶を與へないやうな場所を選ぶ必要がある。

周圍に就て言つてさへ然うなのであるから、まして家庭に於て、子供に良くない記憶を與へる時には、其の害の及ぶところ甚だ少なくない、殊に母は、常に家庭に在りて、最も多く其の子に接するものであるから、別段の注意を要する、たとへば「人が來たら、内の人は皆な留守だとお言ひ」など、女中に命じて置く、子供は傍に居て夫れを聞き込んで置いて、客が來ると、女中よりも先きに玄關に飛び出して「おかあさんは居ますの、けれども人が來たら、みんな留守だつて、さうお言ひつておつしやつ

たのなど、言ふことがあつたならば、甚だ赤面の至りではないか、或は母が父のことを、子供や召仕などの前で、「うちの愚圖が」など、惡口を言ふ、子供は夫れを覺えて居て、父が歸宅すと、「おとうさん、お父さんの事をね、おかあさんは愚圖だつて言つたよ」など、告げ口をする、父とても餘り面白くはない、不愉快な感じがする、家庭が従つて不和になる、或は子供が外に行つて、自分の父の名を問はれた時に「おとうさんの名は良雄と言ふのだけど、おかあさんは何時も、お父さんの事を愚圖々々ツて呼ぶの」など、言つて、家庭内の耻を外へ晒すことになる、何に限らず良くないことを子供の前で言つたり又た仕て見せたりすと、子供は夫れを他人の前で言つたり行つたりする、だから子供に然う言ふことを知らせるのは甚だいけない、殊に子供の前で秘密に屬することを話すのは宜しくない、子供には分るまいなど、思つて居ると、存外よく覺えて居て、妙な場で妙な時に夫れを言ひ出したり、行ひに現はしたりする、甚だ危険である、夫ればかりではなく、凡べて惡い記憶を子供に與へて置くと言ふ

ことは、子供の將來の爲めに甚だ宜しくない、彼れは他日成長の後も、猶ほ其の悪事を覚えて居て、其の悪影響を脱することが出来ない、父母が日常の行動は、凡べて子供の心に一定の印象を與へて居て、それが積り積つて、子供の第二の天性を形ち造る、即ち其の思想その行動を支配する力となるのである、故に子供の頭腦に、悪い記憶を澤山注入して置けば、成長の後矢張り悪い人になる、夫れと同様に、良い記憶を澤山注入して置けば、成長の後矢張り良い人になるのである、だからして親たる者は、平素充分に注意して、子供の頭腦に悪い記憶を残さないやうに心懸けることが大切である。

第九章 宗教上より見たる人間論

想像と言ふことは、最も廣く解すれば、現在自分が直接に感觸しつゝある實際物以

外の觀念を凡べて意味する、換言すれば現に感覺を刺戟されて認知しつゝあらざるものを、吾人の心意作用（または神経作用）で思ひ浮ぶることを言ふ、故に此の意味を嚴密に解すれば、感官が想像と實想との境界線で、吾人が目を開いて見たる事物は實想、直ぐと目を閉ちて思ひ見れば其の事物（即ち今見たばかりの其の事物）は想像、手に觸れつゝある間の認識は實想、手から離せば、如何に速やかに、イヤ殆んど連續して居ても早や夫れは想像、現に耳底に觸れつゝある音響は實想、如何に餘韻嫋々ど、殆んど其の儘耳に残るも、樂器が既に止んで居ては夫れは想像と言ふことになる、即ち知覺せしものを其のまゝ再現するも、或は又た夫れ等の知覺の殘像、または記憶中の心像を種々に分解乃至結合して、即ち變化を加へて再現するも同じく想像と廣く稱することになる、そして想像には、再生想像と構成想像とある、再生想像と言ふのは、自己の嘗て經驗せるところを、其のまゝ意識に再現するに止まるものであるが、其の記憶と異なる點は、再認の感を伴はざること、及び記憶よりは、多少心像の變化せ

られ居ること等であらう、また構成想像と言ふのは、過去に経験せるところを材料として、一種異なる形式を之れに與ふるものである、前者は甚だ單純なもので、一般普通の人は、之れを想像とは言はない、眞に謂ふところの想像は、心理學上狹義に言ふ想像で、即ち後者を指すのである、今は後者の想像に就てのみ述べる、しかも此の構成想像を分つて、科學的想像、藝術的想像、實踐的想像、宗教的想像の四種とする。

第一、科學的想像——所謂發見、發明、學說の建設など言ふことは、其の始めはすべて想像によるのである、コロンブスが亞米利加を發見するに至つたのは、彼れがゼノアの海岸に於て西風の吹く日に、見馴れぬ器物の漂着するを見て、西方おそらくは歐人未踏の地あらんことを想像した爲めであつた、ワットが蒸汽機關の發明をやつたのは、一日鐵瓶の湯の沸騰して、其の蓋を動かすのを見て、此の力を應用せば、おそらくは偉大なる機關を運轉せしめ得んと想像したことによるのである、ニュートンの引力法を發見したのも亦た同様であらう、此等一類の想像は凡べて之れ科學的想像で

ある、斯の如き著しき科學的想像力は、之れを常人に見ることは難い、併し何人とも、多少この種の想像力を具へて居る、ちよつと手拭掛けを工夫するのも、雨の漏るのを修すのも、一種科學的（或は知的）想像力の力に待つのである、デ家庭を處理する上に於ても、多少矢張り此の種の想像力が無いと不便である、物は其の特殊の方面に應用せらるればせられる程、普通のものでは役に立たなくなる、専門家の造つた道具でも、極めて特殊の點に應用する段になると、間に合はないことが往々ある、斯う言ふ場合には、使用者の工夫を要し、細工を待たなければならぬ、そこで吾人には、其の境、其の折りに觸れて、物を適當に改造し、按排する能力が相當に必要である、即ち發明工夫の才が必要である、其の他物體に限らず、何事に就ても、發明の才、發見の才、或は創造の才が多少ないと、凡べて物事が單調になり、無味になつて困る、素より各自の家庭には、夫れぞれ特殊の性質があるのであるから、それに應じて益々その特色を發揮して行かねばならぬ、何等の特色も無い家庭は尊敬するに足らない、

そして特色と言ふやうなことは、總じて其の家の主人公なり主婦なりが、一種特殊の想像力、案出力を持つて居ることに由るものである、此の點に於て、科學的想像力は、他の想像力と共に、家庭に一種の光彩を添ふる機關である。

第二、藝術的想像——藝術的想像と言ふのは、凡べて音樂、文學、演劇、美術等に關するもので、繪畫彫刻上の創作、詩歌小説上の創作、音曲樂譜上の創作、舞踊科白上の創作等いづれも此の想像力の所産である、デ藝術的想像は、萬人に普遍なもので、何んな人にも多少はある、苟くも藝術品に對して多少なりとも趣味を持つて居るものは、必ず又た多少の藝術的想像力を持つて居る、もつとも藝術的想像力を持つて居たからとて、必ずしも夫れだけで藝術的創作が出来ると言ふ譯のものではない、之れには又た特殊の才能を要することであつて、凡べての人に望むことは出来ない、創作と言ふことには藝術的想像力以外に、一種の技術的才能を要する、併し藝術的想像力そのものは、如何なる人にも多少はあるものでまた之れは非常に其の人の品位を高め、

人格の潤ほひを増す點に於て、甚だ大切なものである、蓋し藝術的想像力は、吾人を驅つて紛々たる現實の世界、利慾の世界を超越せしめ、美はしき理想の天地に遊ばしめるからである、従つて心は現實的煩惱の羈絆を脱して、悠々たる美神の靈光に接することが出来るからである、されば故福澤翁は其の修身要領の二十一に、「文藝の嗜みは人の品性を高くし、精神を娛しませしめ、これを大にすれば社會の平和を助け、人生の幸福を増すものなれば、亦た是れ人間要務の一なりと知るべし」と言つて居る、洵に然り、藝術は吾人をして實を脱して假に遊ばしめ、個を離れて遍に就かしむるものである、しかも藝術は大いに吾人が徳性の涵養に資し、社會の平和を助くるものである、故に人にして藝術の趣味なく、國にして藝術の榮え無きは、恰も四季に花咲かず、鳥啼かざる大沙漠の如く、荒寥として見るもいぶせきものである、斯く惟ふと、藝術的想像力乏しく、藝術的趣味薄き人々より成る家庭は、甚だ無味乾燥の家庭たらざるを得ない、西洋の中流以上の家庭では、晚餐後一家團欒して、文學や美術や音樂や演

劇等に關する話をして楽しむと言ふことである、併し日本の家庭には、此の趣味といふ點が缺乏して居る、早い話が、日本の家庭では、主人が金儲けの事を話すと、妻君は米味噌の話をすると言ふやうな譯で、實に殺風景を極めて居る、之れでは甚だ面白くない、家庭にはモ少し趣味があつて欲しいものである、一家の主人なり主婦なりが、藝術的趣味に富んだ人であると、おのづから家庭内の趣きが大いに變つて來る、勢ひ錦上に花の光彩を放つて來る、たとへば床の間の軸でも、其の下の置物でも、花瓶に挿してある花でも、或は座敷の額でも、或は立てゝある屏風でも、皆な夫れぞれに言ひ知れぬ趣きを表はして來る、甞に一々の材料に趣味があるばかりでは無く、夫れ等の配置の上に何んさなく奥ゆかしい風情が現はれて來る、また庭を造つても、草花一つ植えても、一種掬すべき風韻が窺はれる、いくら材料がよく共、其の配置や取り扱ひが拙ついと、却つて厭や味になる、無趣味なる實業家などが、數十萬金を投じて、頻りに贅を盡し、數寄を凝らしても、それが益々厭や味になるばかりで、徒らに俗臭

を増すに止どまるは、畢竟御當人の藝術的趣味、藝術的想像力の乏しい結果である、其の他藝術的趣向と言ふものは、凡べての點に必要なもので、たとへば食膳を客に進むるにしても、其の食品の配置、食品の盛り方などに就て、美術的の頭腦が無からねばならぬ、即ち眼で見た上で、夫れ等が美しくあることが大切である、食つては美味なものでも、目に見た上の感じが惡いこと、充分客に満足を與へることが出來ない、だから目に見た上で、美しくて感じが良いと言ふことが是非必要である、高等の料理が割合に高價であるのも、食物そのものが高價であるよりは、用ひるところの器具や凝つた趣向の上に價値があるからである、何れにしても殺風景とか、無體裁とか言ふことは、甚だ人の品位を落すもので、好ましからぬことである、其の他音樂美術の嗜み、或は詩歌小説の趣味と言ふやうな、凡べて高尚優美なものは、一方には吾人の品位を高め、また一方には俗惡なる娛樂を排除し、以て家庭をして、眞に人生の樂園たらしむるものである、併し音樂美術とか詩歌小説とか言ふものに就ては、大いに注意を

要する點がある、即ち若し其の音楽が俗悪で、其の詩歌が野鄙である場合には、これほど有害なものはない、寧ろ何等の趣味なきに劣る萬々である、婦人とか小兒とか言ふものは、一般に暗示感性に富み、頗る應化性に富んで居るものであるから、特に悪詩歌悪文學などの悪感化を被むり易い、近來に至つて無識見の野合的戀愛や赤裸々の動物性的性慾を取り扱つたところの、悪文學駄小説が續々現はれて、家庭の平和を破つたことは少々でない、だからして此等に就ては充分に嚴密なる選擇を遂げて、健全にして且つ高尚なものを取らねばならぬ、餘りに空想的のものや、また餘りに現實の醜惡面を描いたものなどは宜しくない、音楽にしても然うである、野鄙なものは人の品性を墮落せしむる、一家の主婦ともあらうものが、俗悪なる歌曲を口にするは勿論宜しくないに決つて居るが、其の子供達に、忌まはしき俗歌など唄はして、知らん顔して居るが如きは、子女の徳育上甚だ有害なことである、中流の家庭に住ひながら、子供と一緒になつて、如何はしき流行唄や俗謡などを、平氣な顔で歌つて居るやうな奥

さん達も、世間にはなかく、尠なくないことである、けれども此の様な心得で、其の子女を立派な人間に仕立て上げるなどは、思ひも寄らぬことである、こんな事は一見些細の事のやうではあるが、併し其の悪影響は存外偉大なものである、知らず識らずの間に子供の品性を墮落させてしまふ、大いに慎しまねばならぬ。

第三、實踐的想像——之れは前二者とは違つて、まづたく實踐を指導するものであるから、それが如何に美はしくあつても、どの様に高尚なものであつても、即ち以て實行の出來ないやうな事であつては役に立たぬ、唯だ要するところは、實行の出來ると言ふことが第一に大切な條件である、且つ又た此の實踐的想像にも二種類あつて、一は事業的想像と稱し、一は道德的想像と呼ぶものである、デ事業的想像と言ふのは、所謂計圖、豫算、成案、胸積り等を言ふので、或る一定の事を成さうと企てた場合に、それを完全に果たすべき、充分なる手段方法に就て、一定の考へを抱くことである、たとひ如何なる仕事と雖も、夫れに就て何等手段方法の考へ即ち計圖と言ふものが無

かつたならば、到底成功する筈がない、世間には始終種々の事を企て、ばかり居て、しかも何一つ満足に爲し遂げた例しが無いと言ふやうな人がある、斯う言ふ人は、唯だ企てるばかりで、夫れに就て何等の劃策も成案も無く、漫然として手を下だす人なのである、之れを稱して事業的才能の無い人、或は實際的手腕の無い人と言ふのである、とこゝで家庭を整理すると言ふことは、一見譯の無い事のやうに見えるが、夫れは家庭整理と言ふもの、眞實の意味を解して居ないからの事なのであつて、實際は決して然う容易なものではない、平凡らしくして、しかも最も六ヶ敷いもの、一つなのである、デ一家の經濟を執るにしても、人を使ふにしても、皆な一定の計劃、或は豫算、或は成案と言ふものが要る、何等の豫算も成案も無くして、いゝ加減にやつて事が旨く行くべき筈はない、一家の經濟を執るに、収入のことも考へなければ、支出のことも考へずして、無鐵砲にやつて居れば、必ず經濟が立たなくなる、人を使ふにしても、誰れには何仕事が適して居るかと言ふことを考へ、あれには何う言ふことを

させ、彼れには斯う言ふ仕事を任せると言ふ事もよく究め、又たあの様な人間を使ふには斯う言ふ注意が要るとか、此の様な人間を使ふには斯うせぬと可かぬと言ふことも考へねばならぬ、且つ仕事をやる場合にも、其の順序とか切り廻はしの具合に就て、一定の考へを要する、それが無くては何事も出来ぬ、殊に家庭整理の主任者たる主婦は、此等の點に大いによく、頭腦が働かねばならぬ、されば一家のやりくりを爲すに、一々良人の指圖を待つたり、他人の助言を求めたりして居るやうでは困る、其の他家庭の上に、多少變つた事件が起つて來ても、夫れに對して如何なる態度を取つてよいやら、一向目當てが付かぬと言ふやうでは仕方がない、之れでは主婦たるの價値がない、故に事業的想像は、單に男子にのみ必要なばかりではなくて、女子に於ても甚だ必要なものである、また道德的想像と言ふのは、一定の行爲をなすに當つて、其の行爲の結果を豫想し、此の結果を實現すべき方法を豫想し、以て开が行爲に出づる所以のものである、婦人の道德的失敗は、主として此の想像力の缺乏から來ることが多い、

婦人は概して其の性質が感情的である爲めに、何等かの行ひを爲すに當つて、兎角思慮分別を缺き易い、唯だ只だ感情的に流れ易い、従つて充分に道徳的想像力が働かない、爲めに考へは大層よくとも、結果に於て面白くない現象を惹き起こす事が屢々ある、たとへば子供を唯だ無暗に可愛がると言ふ一偏で、其の可愛い子供を立派な者に仕立て上げるには、何うすれば良いかと言ふことの考へが充分ない、それが爲めに子供の我が儘を許し、子供の悪行を見ても一向に構はない、或は子供に不相應の金を與へたり、不相應の身なりをさせたりする、そして自分では得意がつて居る、自分では大いに子供を可愛がるつもりであらうが、却つて夫れが我が子の仇となつて、他日或は放蕩者が出来たり、或は柔弱にして、自活するに堪へざる者が出来る、其の時になつても、自分の教育の間違つて居た事には氣が付かないで、あれほど手を掛けて育てたのに、何故あんな馬鹿が出来たらうなど、言つて子供を恨む、子供の方では又、母が餘り自分を氣儘に育てたから、こんな意氣地なしに成つたのだなど、言つて母を恨

む、ごつちで恨むのが本當かは蓋し疑問である、こんな事になるのも、母たるものが、何うすることが最も良く子女を愛する所以であるかに就て、何等の考案も、何等の手段方法の考へも無かつたからである、唯だ只だ柔順でさへあれば良いものと思つて、充分に世人の非難に値ひするやうな良人の行爲に對しても、諫言一つ爲さないと言ふやうな妻がある、之れ貞婦の如くにして實は不貞の妻である、如何なる場合には如何に處することが、眞に貞たる所以かを辨へない妻である、斯う言ふやうな次第であるから、婦人は自己の行爲に就て、特に道徳的想像を働かす必要がある、凡そ事を行ふに當つて、唯だ感情の動くまに妄に妄動するほど危険なことはない、如何に美はしい感情の指示に従つて行動しても、單に感情一片でやつた事には必ず缺陷が伴つて来る、デ婦人は往々に間違つた事をしたが、其の失敗や悪結果を以て、人の所爲にしたり、命運にかこつてたりする、そして若し他から非難を受ければ、徒らに人を恨む、即ち自分は何處までも良い事をしたつもりで居る、結果の失敗に終つたのは、自分以外の

原因に基くのだと思つて居る、之れ道德的想像力の足らぬ結果である、……より自分の行為の動機は良くとも、其の手段方法や、其の結果等に對する充分の豫想が、足らなかつたと言ふことに氣が付かないのである、これでは何事も旨く行くものではない、手段方法の考へを離れて企てられた事は、如何に立派な事でも決して完全に行くものでない、されば子供の教育に就ても、良人の爲めに盡すにも、奉公人を使ふにも、又た客に應對するにも、凡べて自分の行為に就て、よく／＼其の手段とか其の結果とか、其の影響とかを考へてやる事が最も必要である、それでないで、後になつて意外の失敗を招くことになる。

第四、宗教的想像——吾人は自己の理想とする完全圓滿なるものに對して、一種の人格性を賦し、之れに歸依し信賴せんとする所の本能を持つて居る、斯く吾々が完全圓滿なるものとして理想するところの、超絶的人格は、之れ即ち宗教的想像の所産であつて、神と名づくるところのものである、神は決して無意味なる空想では無くして、

人性深根の要求に基く嚴然たる事實である、吾人は常に抽象的なる概念や理法だけで、満足の出來るものではない、人は有限に住すると同時に、また無限を追ふものである、そして此の種の要求は、學問や道德だけでは何うしても充たされない、そこに何等か神祕的な、超自然的な力、或は人格を信じ、吾人の能力の及ばざること、凡べて其の攝理その思召に依るものと感じて、絶對的に信賴するにあらざれば、不安で堪まらないものである、宗教の永く人生に絶たざる所以は此處にある、ところで宗教と言ふことは、之れを主觀的に解釋すれば、或る超絶的の神と吾人の意識との關係から生起して來たる所の經驗であつて、此の神は唯一なることもあれば、また數多なることもあるが、何れにしても神が人間に對する態度如何によつて、人間の吉凶禍福が分るゝものであるとせられる、猶ほ宗教と言ふことを客觀的に解釋すれば、以上の如き經驗から起こつて來るところの信仰及び信仰に基いたところの實行であつて、此等の信仰及び實行と言ふものは、或る制度に依りて維持せられて居るものである、たとへば彼

の寺院とか教會とか言ふ組織の如き即ち是れである、さて宗教と言ふことに就て最も重要な問題は、其の起源、發達、分類、異種宗教の比較研究より生ずる諸問題、宗教の終局的根柢に關する哲學上の問題等である、そして此の最後の問題を解釋するものは、實に宗教哲學の職分である、デ宗教の起源に關しては、并は外部から添加せられた結果であるのか、或は人心の内部に根源を持つて居るものであるかと言ふ二個の問題を解釋しなければならぬ、然るに又た他方に於ては、超自然論と自然論との争ひがあつて、自然論の中には、スベンサーの夢想説、タイロルの幽霊説、マックス、ミューラーの無限感覺の説などがある、次に宗教の發達に關しては、多神教と一神教とは何れが早く發達したか、木石或は禽獸を崇拜するところの凡物教は、マイルが主張するが如く原始的靈魂説の一形式であるか、或はスベンサーやミューレルが主張するが如く宗教的信仰の退化であるか何うかと言ふ問題を解釋せねばならぬ、また宗教の分類に關しては、自然的と倫理的との二つがあるが、自然的なのは人間の禍福吉凶みな悉

く偶然であり必然であり、其の有るが如くにあるのみで、毫末も動かされはせぬものとされ、且つ倫理的なのは人間が盛徳圓滿の境に達し、正氣發して天地に塞がり、主觀客觀を超越して金剛不壞の本我に安んじたものである、しかも宗教の眞趣とするところは素より此の本我の境地に存するのであつて、人生に在りながら人生を超越し命運に縛せられながら命運を逸出して、綽々たる大自在に逍遙するところの神人合一であり是身即佛であらねばならぬ、蓋し惟ふに、吾人の生活が、宗教的信仰の如何に依つて、大いに支配せらるゝことは事實である、そして宗教的信仰の性質は、神の觀念の如何によりて決定せられる、さて神の觀念の如何と言ふことは、宗教的想像の如何に基くことである、故に若し宗教的想像が偉大であり、深遠であれば、従つて其の人の宗教的生活は偉大ともなり、且つ深遠ともなる、之れに反して宗教的想像が非常に淺薄な野鄙なものであれば、また従つて其の人の宗教的生活も、矢張り淺薄なものとなり、同じく野鄙なものとなる、そこで家庭に於ても此の點が大切である、所謂迷信と言ふ

のは、凡べて宗教的想像の不充分である結果なので、其の害毒たるや實に恐るべきものがある、デ家庭内に誰れか病人などが出来た場合に、當然醫者へ行くべきところを、御祈禱や御題目などの效驗で夫れを癒やさうとし、且つ醫藥の代はりに、其の歸敬の標的たる神佛の前に供へた水を飲んだり、また怪我などをした場合に、適當の治療を加へずして、御守札で負傷した局部の上を摩擦するとか、如何はしき砂などを塗付することに依つて治癒するものと信じたりする、夫れが爲めに、あとで取り返しのかぬことになつてしまふ、猶ほ又た相當の原因によつて起こつた事をも、神の祟たりであるとか、佛の罰であるとか考へ、御祈禱や御題目などを上げて済まして居る、何んぞ知らん事の原因は、自分のやり方の間違つて居る所に存するのである、夫れを自覺しない中は、いくら其の神佛に祈願を籠めても無効である、其の他神や佛に對して、願ふまじき事を希求して見たり、或は詰まらぬ斷食などをやつて見たり、種々の物忌みをやつたりする、たとへば縁結びや戀愛の成就を祈願したり、相場や無盡などが當

るやうに日參したり、親や姑の病氣平癒の爲め寒中に水を浴びたり、家族の健康を恢復せしむべく茶だち鹽だちをしたりする、皆な百の害あつて一の利なきものである、それから妙に偏屈な信仰を抱いて居て、交際上人に不愉快の感を與へるなども甚だ宜しく無いことである、大いに注意しなければならぬ、然しながら正しき眞の信仰は是非必要である、人力の及ぶ限りに於ては、全力を致す必要があるが、同時に其の力の及ばぬことに就ては、之れを天意に任せ、神意に委ねて、失敗するも敢て恨まず、成功するも敢て傲らざる、悠々たる大信念が無ければならぬ、一家の主婦たる者は、自から此の覺悟あると同時に、また其の子女に對しても歸敬の心を起こさせ、且つ安立を得せしめ、天地の眞意を覺らしめて、常に行ひ修め獨り慎しむの習慣を養はねばならぬ、苟くも祖先に對し神佛に向つて、敬虔の心を持たない様なものは、親に對しても師に對しても恩人に對しても、亦た尊敬の一念を缺き、他人に對しては素より謙讓ならざる傲慢である、人は自分の力が何のくらゐの物であるかを知つて居ねばならぬ、

人の力の微弱で憫むべきものなることを知つて居ねばならぬ、そして不遜倨傲の一念を取り去つて、常に絶大無限なるものに對する敬虔の誠を持つて居ねばならぬ、之れ即ち宗教心であつて、人々の人格にゆかしき光彩を添ふるものである、此の故に正當な意味に於ける宗教的信仰は、吾人に取つて眞に望ましいものである、デ我が國人は、由來この方面に就て甚だ冷淡であるが、併し學校に於ける所謂德育も、此の土臺の上に行はれて、始めて吾人の意思を支配する力となることが出来るのである、さて今時に於て、謂ふところの教育なるものが、著しく弛緩の状態にあると言ふことは、遺憾ながら否定されぬ事實である、成る程教育の中でも、智育すなはち科學の方面に屬するものは、頗る旺盛の状態にあつて、寧ろ張り切れさうな緊張味を有して居るから、此の方面は姑らく別問題として、之れを德育の側に見ると、實に邦家のため寒心に堪へぬものがある、嚴格に言ふと、今日では教育萬能の時代は去つて、明らかに教育批判の時代に突き進んで居る、素より舊宗教や舊道德が既に現代人の満足を沾ふことが

出來ぬと同様に、在來の保守的教育は、もはや何等の効果をも收むることが出來ない新時代が劃されたのである、しかも全然宗教味を取り去つてしまつた教育は、何所までも現實的であり現世的であるところから、唯だ人間としての本能のまゝに動き、惡徳であれ非行であれ、苟くも現世の法網に罹らぬ限りは、之れを爲すに躊躇しないと云ふ現狀に陥つたのである、德育教育の弛緩と言ふことは、やがて國民の道德思想の弛緩と言ふことを意味するものでなくてはならぬ、道德思想の弛緩と言ふのは、つまり現代人の人格衰微を招徠したもので、此等の例證は社會に於ける饒多なる出來事が臆面もなく事實の上に表白して居るのである、まったく今日に於ける教育の實際に見て、人々は何等人格上の教養は打ち込まれて居らぬ、と言つて何も倫理道德の教養が皆無であると云ふのではないが、今時の青年子女としては、事實上これら德育の方面に心を運んで居る暇がないのである、義務教育としての小學時代から、早くも上級學校への入學準備に忙殺されて、なか／＼德育などの問題を考へて居る餘裕は有たせ

られて居ない、そして同時に宗教などの教養は猶ほさら與へられて居ないのであるから、彼等は科學教育すなはち智育一點張りの外に、何等の精神教育は受けて居ないと言つて宜しいのである、實用的の教育、智育偏重の教育を受けた彼等は、其のまゝ何等の修養もなしに、物質的欲望の境界に放り出されるのであるから、當然の結果として彼等は滔々として其の欲望性に左右され、开が放縱性を統御すべき何等の統一もない世界に浮游するに至るのである、考へて見れば人間に取つて之れ程の危険は無いではないか、然るに基督教は、徒らに形式に拘泥し、古い理論に囚はれ、時代から遠ざかつて、其の第一義たる根本精神を喪つてしまつた、佛教は、單に殿堂を管理し、葬儀を本業のやうに心得、世界の進歩から遅れて、开が本來の目的なる自信教人信の大事を忘れて居る、儒教は、唯だ其の倫理思想の上に於てのみ其の特長を認め得べきものであつて、宗教に取つて一番重大な神祕思想や、形而上の人生觀とか世界觀とか言ふやうなものがなく、今日では全然世の人から顧みられない有様である、若し夫れ神

社崇敬に至つては、民族の祖先や國家の功勞者やを祀り、之れに對して敬意を拂ふといふ、國民の一種の儀禮であつて、素より宗教として見るべき性質のものではない、しかも世の宗教家が求道の衆生に對する態度を見るに、理想の彼岸へ行くべきの道を、單に口の先きで教へるのみであつて、實際に靈性の絶對的安住地へ、親しく手を引いて連れて行つては呉れないのである、宗教家が其の會堂や寺院に於て説教をするのはよいが、併し彼等は先づ自から开が胸奥の靈火に衝動されなければならぬ、徒らに經文聖書の講義を試みたり、唯だ神の愛や佛の慈悲を説いたりすることが、宗教家としての本分ではないので、开が本來の使命とするところのものは、實に經文聖書の精神を體驗し、尊き神の愛や有り難き佛の慈悲を實行するにあるのだ、宗教が哲學と異なる所以も亦た茲に存するのであるが、彼等自身が未だ眞に救はれたのでなくして、不眞面目にも他人を濟度しようとして試みるやうであつては、其の内面に熱と言ふもの、無いのは素より其のところであつて、夫れでは其の宗教と言ふものに全く生命もなければ

ば活力もない筈であらねばならぬ、勿論人類としても、一たびは其の精神的ハトロンであつた宗教を、空しく捨て去ることは素より忍び得ぬところであつたが、日に時に進展し行く人生文化の健脚は、何うしても开を見捨て、進まなければならぬのである、併し宗教としては、一度硬化し淤滞したところから、もう日進月歩の人生に追従することは出来ない、一たびは彼等も人生示導の地に脚を立て、寧ろ動やもすれば硬化し淤滞しようとする人生を誘接して、よく文化の境地へ引き入れたのであつたが、今は全く人生に追従することすら至難の業となつたのである、とは言へ今日としても、宗教は依然として其の形式を備へて居て、一部の人々には多大なる信念を投げられて居るのである、が夫れは素より階下の民衆に對するものであつて、階上の民衆は、全く従來からの宗教に疑ひを有して居るのである、科學の進歩に伴ふ哲理の進化、其所には形式のみの宗教は何等精神的價値を有せぬものとなつた、しかも宗教家は其の故壘を守るにのみ急であつて、進んで前進陣地を見出すことに無頓着である、硬化した教

義と、形式的保壘、夫れを守ることが彼等の唯一義とせられ、开が教義の改革や變更や、形式の順應的推移など言ふことは、一つも彼等には見ることが出来ない、之れには無論因襲の弊もあらうが、要するところは矢張り思想の硬化から來たものである、元來宗教は、一個の目的、即ち思索的であつて同時に實行的な一種の目的を有して居る、それは「眞」と「善」とに向つて進んで行くのであるが、宗教は單に普遍的社會性の共感的本能や、想像作用を満足せしめん爲めに、有らゆる宇宙の森羅萬象を有情化するものではない、して其の有情化の目的とするところは、先づ第一には、自然界の恐ろしい壯大な現象、更に進んでは、自然界裡の凡べてを説明しようとするが爲めである、それから第二には、高級存在者の假定的助力を以て、其の意志に順應して、意志し且つ行動すると同様に、吾々人間を刺戟しようとする故である、素より宗教なるものは、多少純なる道德觀を含むと同時に、また一種の發生的宇宙論をも含蓄するのを普通とする、そして最後に、宗教は其の本質上、吾々の精神的乃至官能的憧憬と、

开が生死をば支配する世界の法則とを調和せしめんが爲めに、此の宇宙論と道德觀とを結合させようとする一種の試みである、果して然らば、宗教の目的は、善にして同時に幸福なる、吾々が理想生活に對する希求としての、實際的であり且つ極めて有効な満足でなくてはならない、デ宗教の主眼とするところは、實行の満足の境地であると同時に、萬物を有情化するものである、ところで現代人としては、最も力強い宗教を求めて居て、決して従來のやうな、單なる他要的信仰や、弱い自發的信仰のものでは満足しないのである、實際現代の人々は、何かしらドエライ變つたことを豫望して居る、世の中の大改革であるとか、人生の大轉機であるとか、思想上經濟上の大變動であるとか言ふやうな、大いなる衝動を受くべく期待して居る、夫れは現代人の精神が餘りに疲弊し切つて居て、神經衰弱に羅つて居るところから、尋常一樣な刺戟に對してはなかく感應しない、飲酒酩酊とか、性慾充足とか言ふやうな、瞬間的に最も強烈な刺戟を要するのは夫れが爲めで、従つて宗教を求むる上にも、大なる豫言や大

なる神祕に立つやうなものを求めるに至つたのである、言ふまでもなく飲酒性慾の享樂が一時性であるに反し、宗教生活の愉快は、永久的である、そして其所には、道念の向上と言ふこともあり、靈眼の覺醒と言ふこともあり、生死の超脱があり、永遠の生命がある、しかも其の極致とするところは、謂ふところの靈界無邊の風光に逍遙して、神人結合是身是佛の大なる自覺にまで到達するものであるが、今の世の宗教に、眞に此の要約に合致したものがあらうか、デ或る種の不健全なるものを除いて、比較的眞面目に生きようとする人々は、此の際また眞面目に宗教を要求し出した、此の宗教要求と言ふことも、事實に於て二様の意義があり、即ち一は實用主義に由る要求で、一つは理想主義に由る要求である、ところで實用主義に由るものは何う言ふ根柢から提起されたかと言ふに、最近に於ける人心の動搖や思想の紛亂、之れに加ふる人々の精神的不安状態などは、全く或る信念が缺乏されて居るからであるとし、これは主として宗教家その人の奮起を翹望すると言ふにあるので、之れは全く宗教家その

ものをば、人心歸趨の中心たらしめようとする必要から生ぜられた要求とされる、そこで之れに就て檢覈して見ると、此の種の要求としては、まったく宗教そのもの、根本義と歴史的事實を遺忘したものと云はなければならぬ、一たび宗教の屋内を出で、他に適合の營舎を索めようとするものに對し、單に信念鼓吹の宣傳を以て、無條件に开が故屋に立ち歸れと言ふことは、餘りに目先きの見えない考へでなくてはならぬ、宗教を以て實用に供しようとする、夫れが既に根本からしての誤謬である、既に實用である以上、其の目的さへ達すれば他を顧みるところはない、人心歸趨の道具になるならば、宗教家は偶僞師であつても宜しい、内には教義などの大抱負はなくとも、外に其の形式さへ立て、置けば足りる、教義の蘊奥が何うであらうと、夫れは問ふところでない、つまりは之れまで多大な人心歸趨を得て居たのであるから、其の惰力を以て打ち立つて行かう、斯んな宗教が現代の人々の心に合する筈がない、惟ふに敬神仰神と言ふ語が、之れまで何程他から強要されたことであらう、他を愛すること自から

を愛する如くせよとは、如何に吾々が命令的に聞かせられたことであらう、神を敬すると言ふこと、佛を仰ぐと言ふこと、慈悲博愛と言ふこと、夫れは洵に結構至極なもので、苟くも人間として遵奉すべき最要のものたるに相違ない、然しながら夫れが如何に大切なものであつたにしても、其の觀念が自發的のものでなかつたら何んにならう、自動的のものでなくて何の効力があるか、神佛の禮拜は人として爲すべきものであるとの他の勸誘から、泥棒にも神佛に向つて祈願を籠むるものがあるに至つては、宗教の實用も噴飯的茶事に過ぎぬではないか、それから理想主義に由るものは何うであるかと言ふに、之れは頗る進取的な要求に屬する、即ち此等は、其の人々の見地からして、もはや過去の何物にも満足するところがない、舊宗教であれ舊道徳であれ、夫れ等は皆な陳套な廢物でモウ其のやうなものには執着して居らない、殊に既成宗教のやうな、偶像的（有形的偶像の諸佛——無形的偶像の基督）の時代は過ぎ去つてしまつた、何か目新しい、そして世人がアツと言ふやうな宗教でなくてはならぬ、斯う

した考へから、謂ふところの創造氣分で、何かを求めようとするのが現代人の要望であるとのことである、デ此の様な要求者は、必然的に信念とか道徳とか言ふ言葉を嫌つて居るのが事實だといふ、して見ると彼等は、全く根柢的に新しい宗教を要求して居るに相違ない、即ち或る神祕的傾向を有して居ると言ふのが之れで、其の希求の要素は、他的でなく目的であり、外的でなく内的であることが知られる、之れを卑近な實例に當て籍めると、現在の宗教なるものは、目先のきかぬ商店と一般である、即ち時代おくれの商品を並べて、スツカリ現代人に飽かれてしまつたものと言へる、有らゆる好尚を無視し、有らゆる時代性を無視し、有らゆる流行を無視し、有らゆる反響を無視した商店が、何時までも無限に顧客を引き付け得ることは不可能でなくてはならぬ、此の様な時代おくれの商店を去つて、或る新しいハイカラな當世的の店舗に足を入れようとする現代人を、如何にして彼等は引き留めようとするか、併し茲に存する一つの希望は、斯かる保守的舊式的商店をして、翻然その守るところを擲ち、實

際に現代人に必須なる商品を仕入れて陳列することにあるが、因襲と情實と情氣とに拘泥され、一方その素養と開發に缺乏を有して居るものには、此等は事實に於て容易な業ではない、此の事に想到すると、理想的に宗教を要求するものと、現在に於ける宗教との聯絡徑路は、殆んど之れを發見することが出来なくなる、即ち求むるものは實質を要望する、然るに求められるものは空虚しか有つて居ない、實質の需要に空虚の提供、矛盾は其所に双方を押し隔てるのである、若し時代錯誤なる語が、或る相反した事實の遭遇であるとするれば、此等は全く此の一語を以て標示さるゝものでなくてはならぬ、さはれ求むるものは積極であり、求められるものは消極である、需要者は必ずしも供給者の改善を強望するものでなく、寧ろ機會だにあらば、勿違として何等かの新しきものに走らうとして居る、此の場合宗教家としての覺悟は如何に、改造か放棄か妥協か絶縁か、然しながら今のところ未だ全然落伍してしまつたと言ふのでもなければ、壊滅に歸してしまつたと言ふのでもない、此の場合一鞭を加へたならば、